IS〜Along with the memories〜

暁晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～Ａｌｏｎｇ　ｗｉｔｈ　ｔｈｅ　ｍｅｍｏｒｉｅｓ～

【Ｎコード】
Ｎ７４３２Ｘ

【作者名】
暁晃

【あらすじ】
テンプレの神様によって『インフィニット・ストラトス』の世界へチート付きで転生させられてしまった主人公、霜月一は、自分の知る世界と違う世界で何を思い、何をするのか？この世界で何を見るのか？月はいつも、空にある。

プロローグ（前書き）

初めまして！
まずはここまで来ていただいた方に感謝します。
作者は文才ありませんが、ご期待に添えることができるよう頑張ります！
よろしくお願いします。

プロローグ

……ハッ！！

私は、ＡＢの音〇のように大の字で白い空間に寝ていた。

「ここは……？」

確か私は高校に登校途中だったはずだが…

脳裏を色々な考えが巡る。道で倒れて連れてこられた、今昏睡状態にあり、これは意識の中なのだ、等々。

そしてある考えが浮上した時

……「目が覚めたか？」

ふと隣を見てみると、一枚の布を纏った青年がいた。

……「青年か…お主よりは長く生きているのだがな…」

心を読まれたらしい。ここでさっきの考えが確実なものに変わった。

「私は……死んだのか？」

……「ほう、自分の現状況を理解できるとは…お主、さえてるのう」

…何故か褒められた。私はそんな事は無いと思うのだが。

……「確かにお主は死んだ。だからここにいるのだ」

…いきなりそう言われても訳がわからない。貴方は何者だ、いや、あるいは…

……「そうだ。私は神だ」

……唐突にそう言われ信じる人間が何人いるのだろう？しかし、私の考えていることと一致したので敢えてスルーさせてもらった。

……「お前が死んだのは私のミスだ。のうのうと生きている殺人犯を死なせたかったのだが…名前が似ていてな。お主が死んでしまった。すまない」

…そうか、死因はなんだったのだ？

……「うむ。遥か彼方より飛んできたこんにゃくの角が頭に当たって死んだのだ。すまないと思っている」

私はそんなみじめな死に方をしたのか。というよりもこんにゃくの角で人間は死ねる……のか？

……「そこで、私はお主に転生という道を提示しよう。タダとは言わん。好きなだけ能力をくれてやろう」

…私が元いた世界は…すでに死体になって無理だろう。テンプレの神様の如くそういった神は、私が愛読している『インフィニット・ストラトス』（以下ＩＳ）の世界へ転生させてやる、と言った。

正直、ＩＳは最新刊である7巻まで読破済みで、こういう世界には少なからず憧れていた。私も子供ということだ。

ならば……

「身体能力と技能面を軽くチートレベルにしてもらいたい。後ＩＳ

適性も高く頼む。ＩＳは…」

私は、ガンダムＸに出てくるヴァサーゴが好きである。故に、ヴァサーゴを頼んだのだが……

……「ふむ、それだけでいいなら後は私が適当に色々つけておくとしよう。これでいいのか？」

なんかとてつもなく嫌な予感がするのだが、ここでごちゃごちゃ言うのは悪いだろう。

「ありがたい。何から何まですまないな」

……「元はと言えばこちらの責任だ。遠慮しなくてもよい。ではいいか？ゆくぞ？」

そういうと、私は薄くなっていく。

「ああ、世話になった」

……ふふふ…世話になったか。別れる訳ではないのだがな。

消える間際、そんな声が聞こえた気がした。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

プロローグ（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
作者は紙の心ですので、やさしくお願いします。

1話　その青年、転生（前書き）

更新しました！
プロローグだけでも多くアクセスがありとても喜んでいます。
見づらい部分、表現がおかしい部分があると思いますが、やさしく見守って頂けるとありがたいです。
では、どうぞ。

1話　その青年、転生

……ハッ！

私は、見たこともない室内にいた。
体がうまく動かないが、何かに拘束されているわけでないだろう。
（……知らない天井だ…）
そう呟いたはずだった。しかし声は出なかった…

今まであったことを総動員して現在の状況を考えてみる。
私死亡→神様→消失→？

…つまり今は転生した後であり、私は赤ん坊というわけか？
おそらくあそこにいる若い女性が私の母なのだろう……

とまで考えたとき、ふいにその女性がこちらへと寄ってきた。

……嫌な予感がする……
やめろ。こっちに来るんじゃない。せめて私が寝ているときにすればよかろう。不意打ちはいけない。私に生き恥を晒せというのか……！

こうして、私、霜月一はＩＳの世界へと転生した……

そんなこんなあり、私は6歳になった。
うむ？間はどうしたかだと？あの生き恥を晒すような日々や、特に変わり映えのしない日々を綴って欲しいのか？
とにかく、現在私は小学生である。

ちなみに、私の歳は一夏達と同じようだ。
原作キャラと遭遇することは無かった。雲を掴む様な事だったのであまり意気消沈はしていないが、物悲しさはある。
さて、これまでの私について簡単にお話ししよう。

私の今世の名前は、霜月　一（しもづき　はじめ）という。
名前からも分かる通り日本人である。父、母、私という家族構成で、兄弟はいない。
神からもらった力がもう出ているのか、私は比較的早い段階で歩き始め、前世の記憶も合わさり、現在で高校レベルの問題なら普通に解けるぐらいにまでなっている。
まだＩＳは発表どころか開発すらされていないはずだが、物心ついた時には、私の持ち物の中に金色のピアス（シャギア・フロストが原作でつけているやつ）があった。

…これはＩＳ……なのか？

ひとまずまだこれを使ったことはない。
時期が来れば展開して練習もしなければならないな、と思うだけである。

また、私の思いすごしでなければ、おそらく声変わり後にはシャギアのようなイケボになりそうである。
ここは神が計らってくれたのだろう。ただ感謝するのみである。

さて、私は晴れて小学一年生となったわけだが、私が所属するクラス（１－３）に、私の肝をつぶす人間がいた。コードギアスに出てくる枢木スザクの幼少期に似た人がいたのである。
名を、枢木　隼人（くるるぎ　はやと）と言うらしい。単なる偶然

なのか、はたまた……

私とは違いかなり明るい人間のようだが、不思議と出会う運命だったように思える、すぐに打ち解け、友になることができた。

この世界は私が来たことで歪んでしまったのか？何故か、そのような考えが頭を廻った。

単なる気のせいか、はたまたニュータイプとしての（？）直感なのか、どちらにしても今はまだ動けないでいるのだった……

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

1話　その青年、転生（後書き）

誤字脱字、おかしいところ等ありましたら感想にてお願いします。
次回から人物を変えながら話を進めることになりましょうか。
次回もよろしくお願いします。

2話　その青年、困惑（前書き）

更新しました！
まだ長く文を書くことができないでいます……
おかしな所が多くあると思いますが…どうぞ。

2話　その青年、困惑

ｓｉｄｅ　霜月一

衝撃の入学から一年経った。

隼人とは性格は全く違うが、どこか引き合うところがあったのだろうか、あるいは彼の魅力なのだろうか、クラスでもどこか線を引かれていた私は彼を介して少しずつクラスに馴染んでいった。

そして、事件は起こった。

私の両親が亡くなったのである。

酔っ払い運転をしていた車にひかれたのだ。

外見は幼いとはいえ、私の精神年齢は２０をとうに越えている。

しかし、身近な人が亡くなるという経験は初めてである。

当然加害者を恨みもした。しかし、

やはり私は歪めてしまったのか？この世界を。人の運命を。

そんな考えが浮かんだ。

だとしたら、私は何のためにここにいる？

何故私は転生してしまったのだ？

答えなどどこにも無いのだろう。ただ、この頃から私は

この世界にいる意味を見出せなくなっていた…

ｓｉｄｅ　枢木隼人

小学二年生の頃、親友である霜月君のお母さんとお父さんが死んでしまった。

クラスに少しずつ馴染めていけた彼だけど、そのことがあってから近寄りがたい雰囲気を醸し出し、徐々にクラスから孤立していった。もちろん僕は彼の親友であり続けたけどね。

彼は叔父と名乗る人に保護されたが、どうも信用できないらしく、遺産を貰いつつ一人で生活している。

……こんなになってまで、彼は普通とは言えないけど生活してたんだよね…普通できるかな?

僕は彼の親友だ。彼の力になりたい。　…でも僕には彼の力になれる力がない…それだから、彼に何もできない自分にイラついた。

誰かが支えないと彼は壊れてしまう。そう思わずにはいられなかった…

ｓｉｄｅ　???

”転生者達”は無事に日々を生きているようだ…

この世界がどうなり、”彼ら”はどんな道を辿るのか、そんな事は私にだってわからない。

”彼ら”の介入により、この世界にどれほど”歪む”のだろう？
私の目的を”彼ら”は果たしてくれるのだろうか？

「……今はまだ…時ではない…」

彼は一人、笑みを浮かべた…

side out

……そして二年後、あの事件は起きる。
彼らはその時、何を思い、何をするのだろうか？
これから始まる世界の混乱など微塵も感じさせず、時は流れてゆく
……

To be continued・・・

2話　その青年、困惑（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

3話　その青年、驚倒（前書き）

本日2度目の更新！
やっと長い話が書けた……それゆえ文がめちゃくちゃになってると思いますが…どうぞ。

3話　その青年、驚倒

ｓｉｄｅ　霜月一

…両親の命日から一年が経とうとしていた。

未だ両親の他界には心に深い傷がある。おそらく一生残るのだろうな。おかげで友達と呼べる人間は隼人以外いなくなってしまった。彼はいつも私のそばにいてくれた。おそらく私を励ましたかったのだろう。いつしか私と彼の間には深い絆が生まれていた。彼がいなければ、私は……どうなっていたのだろうな。

神にもらった頭脳を使えば衣食住は難無くクリアしていたので、叔父と名乗る者（叔父なのかも知れないが、会ったことがなかったので分からない）からの仕送りもあったので生活はできていた。

そんなある日のことだった。

私の机に一通の手紙があった…ちょっと待て、どこから入ったんだ？

疑問に思いながらも封を開けた。すると、

『初めまして、ではないか。この世界についての話がある。明日の零時●●●●●2階の応接室に来い』

とだけ書いてあった。

…最早怪しさしかない手紙だと思う。しかし、”この世界”というワードに引っ掛かりを覚えた私は、ひとまず行ってみることにした。

……存在意義は見つかるのだろうか？

指定された建物に来た。こんな建物あっただろうか？今あたりは真っ暗である。当たり前だが。なので調べようもなかった。
…うん？先客がいるな。あれが私を呼び出した人物か？
ひとまず私は応接室と書いてある部屋のドアを開け、足を踏みいれた。
そこで私が見たのは……

枢木隼人！！？

ｓｉｄｅ　枢木隼人

僕の部屋にあった謎の手紙、その指定通りに僕はこの部屋に来た。
応接室と書いてあった部屋はほんのりと明かりが灯っている程度で、３メートル先を見るのが難しい位暗い。冗談じゃないよ？

「う～～～　暗いの苦手なんだよ～　早く来てよ～」

誰に言うでもなくそういうと、出入り口のドアが開いた。（怖いので閉めていた。作者がそうだったので間違いない）

やっと来た！まだ零時にはなって無いけど早く来てくれるなら何でもいいや！

そう思って振り向いた。

「……え？」

そこで僕が見たのは、僕の唯一無二の親友である、
霜月一君であった。

ｓｉｄｅ　霜月一

何故隼人がここにいる?彼が呼んだにしては様子がおかしい。あっちも予期していなかったようだ
。

霜「どうして…君が…?」
隼「どうして霜月君が…?」

やはり向こうも驚いているようだ。と、困惑している間に、時計の針は零時を指した。

その時、虚空から声がした。

?「お、二人とも来てくれたのか。特に霜月は来ないかと思っていたが」

霜・隼「!!!」

声がした方を見ると、何故かあったクローゼットを背にし、黒いスーツを着た青年が立っていた。

?「ふむ、まぁ立ち話もなんだ、来たまえ」

そう言うと、青年はクローゼットを指差した。

霜「…は？」

私のこの対応は当たり前だったと言えよう。クローゼットを指差して来いと言っているのだから。

？「何をしている？早く来なさい」

言うなりクローゼットの戸を開け、”入って”行った。

何なんだ？さっきからおかしな事ばかりではないか。私がこの世界に転生したのはそこまで影響力が…

ふと、あの手紙の文が頭をよぎった。

『この世界について話がある』

私は意を決してクローゼットの中に飛び込んだ！

……うん？私はさっきまでコンクリートむき出しのビルにいたはずだが……

今私がいるのは、まるで未来都市のようなビルの中にいた。

隣には隼人がいる。あいつもここに来れたのか。と、突然壁から（？）声がした。

［シモヅキ様とクルルギ様ですね。前の部屋にお入りください。］

もうこうなればヤケである。私はその扉を開け、その部屋に入った。
隼人も恐る恐るついて来ているようだ。

？「久しぶりだな。霜月一、枢木隼人」

そこにはさっきの黒スーツの青年が社長椅子みたいな物に座っていた。

霜「私たちを知っているのか？お前は誰だ？」

声が震えているな、枢木に関しては筋肉がつきそうな位足を震わせている。

？「忘れたか？私は、神だ」

……

時が止まったような気がした。
いきなり何を言っているんだ？この目の前の奴は。

？「む、信じないのか？●●●●、柊隼人」

……今こいつは何と言った？●●●●は私の前の名前ではないか…
まて、柊隼人というのは…もしかして…

隼「…何故貴様が俺の前世の名前を知っている？」

…まて、こいつは何と言った？というかこんな口調で話すのを聞くのは初めてだ…

？「だからそれが私が君たちを転生させた神だという証拠にならないか？自分が転生者だということは自身以外誰も知らないはずだろう？」

……さっきから訳が分からない。確かに私は転生者で私以外は誰も知らないはずだ。
では隼人も…転生者なのか？

霜・隼「「お前は…転生者なのか？」」

何ということだ。見事にハモったじゃないか。

？「さて、なんなら君たちの死因も言ってやろうか？」
霜「……分かった。貴方があの神ということは認めよう。で、今はどういう状況なんだ？何故私と隼人は呼ばれたんだ？ここはどこなんだ？何が望みだ？何が…」

私にしては珍しく動揺していた。当たり前か、こんな状況下では気がおかしくなりそうだ。

神「質問は一つずつにしてほしいものだな。まずは自己紹介といこうか」
霜「何を…」
神「神では外界で呼べないだろう。私の事は…
　クワトロ・ポイボス
と名付けよう。クワトロとでも呼んでくれ。そしてここは、
”月面都市　フォン・ブラウン”だ」

……まて、ここは月なのか？どうしてただのクローゼットが月と繋がっている？

ク「今何故クローゼットとここが繋がっているかと思ったな？後にＩＳという兵器ができるんだが、それに使われている量子変換システムを少し応用したまでだ。早い話がご都合主義というわけだ」

…最早突っ込む気力もない。隼人は隣で固まっている。

ク「私はこの都市全体の長だ。まぁこの都市丸々１つの企業なのだが。さて、望みだったな…と、聞いているか？」

隼人はようやっとフリーズから解除された。そしてクワトロから告げられたのは

ク「この世界には君たちが来たことで多くの歪みが発生している。それの排除が私の望みだ」

…やはり歪んでいたのか…

ク「君たちにはこの都市の一員としてここに住んでもらいたい。もちろんここから地球にも例のシステムで往復できるし、悪いようにはしない」

なるほど。それに私の存在価値私の存在価値があるのなら…

霜「私はその話に乗らせてもらう。だが、隼人には親がいるぞ？親ごとここに連れてくるのか？」

隼「ッ！！！　君に言っていなかったが、俺は半年前、親に捨てられたんだ。だから連れてくる奴なんていない」

…こいつもこいつでとんでもない事を言う…

隼「クワトロ、その話、俺も乗らせてもらう」

ク「そうか…なら住居等は追々話そう。本題に入りたいのだが、いいか？」

…隼人のこと、これからのことは後で考えよう。

クワトロは、深くイスに座ると机に両肘をつき顔の前で手を組み、鋭い眼差しで霜月達を見、告げた。

ク「霜月は知っていると思うが、後一年後にＩＳというマシンが開発され、日本に二三四一発のミサイルが撃ち込まれる」

…隣で隼人が息をのんでいるのが分かった。隼人はＩＳについて知らないのか？

『白騎士事件』――――

束博士がＩＳを発表してから一ヶ月後、全世界のミサイルが日本に向かって発射された事件である。

これには束博士が発表したＩＳ、通称『白騎士』がこれを駆逐、続いてきた軍隊を無力化させ、世界にＩＳの圧倒的な戦力差を証明させた事件である。

ク「その事件で『白騎士』というＩＳがミサイルを駆逐するわけだが、『白騎士』が斬ったミサイルは一二二一発、表には全部落としたことになっているが……」

霜「後残りの一一二〇発のミサイルは本当は落ちた、と言いたいのか？」

隼「なっ！！そんなことが起こるのか！？」

ク「まぁ枢木は知識がないから知らないかもしれないが、落ちたと私は考えている。故に、だ」

そこでクワトロは深く息を吐き、低い声で、告げた。

ク「君たちは、そのミサイルを全て落として欲しい」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

3話　その青年、驚倒（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
やっと少しだけ原作に介入できる……

4話　その青年、始動（前書き）

更新しました！
今回で原作に微介入するつもりだったのですが…次回で介入します。
相変わらず長い文ではありませんが…どうぞ。

4話　その青年、始動

ｓｉｄｅ　霜月一

あの後、私と隼人はフォンブラウン第四区にある住居に住むことになり、正式にフォンブラウン社の所属員となった。
資金、物資等はクワトロ（以下社長と敬称をつける）から送られてくる分があるので、叔父とは手を切った。

私の机にあったあのピアス、やはりＩＳのようだ。しかも何故か一次移行は済んでいた。
私の機体は”ガンダムヴァサーゴｃｂ”である。二次移行したらどうなるんだ？

隼人はやはり転生者のようで、あの神に「ロボット物だ」と言われ、コードギアスだと直感したらしい、何の迷いもなく「枢木スザクにしてくれ」と言ったらしい。
残念ながらこの世界は『ＩＳ』である。少し間の抜けているところがあるが、基本かなりいいやつで、社交性では負けるだろう。
何より、私よりも知能が低い分、身体能力が馬鹿らしく高い。道理で私が運動方面で勝てないわけだ。

彼の機体は”ランスロット・アルビオン”である。こちらも一次移行済みである。
彼は前世では槍を持つ機会が多かったらしく、剣の扱いが苦手（良い意味で人間のレベルでは無い）らしい。
……まて、こいつの前世はなんだったんだ？

私は、第二区にあるＩＳ第１６アリーナで練習をしていた。隼人も

どこかでやっているのだろう。

地球には第八区にある転送ゲートから行ける。外観は飛行場のようである。

私がフォン・ブラウンで驚いたことが、この都市にはかなりの人間が住んでいるということだ。

その人間がどこから来たのか、何故こんな所に居るのかは答えてくれなかったし、あまり興味も無かった。

そんな常識とかけ離れた日常を過ごし、約1年が過ぎた。とうとうこの時がやってきたのである。

一か月前に無名の博士が『ＩＳ』なる兵器を開発、発表したのである。

この瞬間、私と隼人というイレギュラーを抱えた世界は、動き出した。

ｓｉｄｅ　枢木隼人

ちょうど一週間前だろうか？社長から、地球に”その時”が来るまで霜月と待機していろ、という指示が来た。

霜月君もこれからの展開を知っているようで、妙に落ち着いていない。

僕はと言えば、本当に二三四一発のミサイルが来るなんて思っていなかった。
世界中の軍事機関にハッキングをする能力を持つ人間なんて、普通いないと思っていた。霜月君は出来ると言っていたけど、普通じゃないもんね。

そう、僕は今この時、指定されたポイントで待機しているこの時も、そのニュースが来るまで信じてはいなかった。

――――全世界のミサイル、計三三四一発が日本に向けて放たれたという情報が知らされた。

何故が予定よりも多い。これは僕たちがこの世界に来た事による歪みなんだろうか？

だったら……やってやるさ。

俺のランスロットと、霜月のヴァサーゴで、すべて駆逐するまでだ！

ｓｉｄｅ　霜月一

今さっき、ミサイル三三四一発がこのあたりに飛んでくるという情報が社長よりもたらされた。

三三四一？何故そんなに多いのだろうか？これも歪みなのか？

隼人はなんだかそわそわしている。早く自分の実力を試したいのだろう。目立ちたがり屋め。

とか言う私も少し興奮していたりする。このヴァサーゴがどのくら

い出来るのか、試してみたい。

……ふと向こうの空より”人”が飛んできた。おそらくあれが白騎士なのだろう。

さて、そろそろか……？

〔クワトロより各員へ！これよりミッションを開始する！総員の健闘を祈る！〕

隼「オーライ！枢木隼人！行くぜーーー！！！！！」

霜「了解した。霜月一、出る！」

こうして後に【白騎士】と呼ばれることになる機体と謎の二機との、ミサイル殲滅戦が始まった…

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

4話　その青年、始動（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
次回、初の戦闘描写です！ひどいと思いますが……

5話　その青年、介入（前書き）

本日二度目の更新！
書いてて思った。あれ…戦闘描写は？
やはりＩＳ同士の戦闘でなくてはね！うん！
……失礼しました。では、どうぞ。

5話　その青年、介入

ｓｉｄｅ　白騎士

束に白騎士のパイロットにさせられ、ミサイルを落としに来た私だったが、目標地点に来た時、下から謎の機体反応があった。
…馬鹿な!?この白騎士の、ＩＳのセンサーに反応は無かったぞ!?どうやって隠れていたというんだ!?

とその時、白い機体が背中から二本の棒が出たかと思うと、そこから緑色の羽を出し、あり得ない数のエネルギー弾をミサイルの群れに向けて発射し、自身も突っ込んでいた。

……もう訳がわからない…あれもＩＳなのか？

私は、ミサイルを落とすということも忘れて、愕然としていた。

ｓｉｄｅ　霜月一

千冬さんは何もしてくれないのか？…って目の前でこんな事されたら呆然としてしまうか。

さて、私も準備をしよう。

私は、ヴァサーゴの腹部を割り、胸部装甲を展開させ、６枚の羽根を全開にさせた。

ｓｉｄｅ　枢木隼人

俺はミサイルを順調に落としていた。

ある時はスーパーヴァリスのハドロン砲でまとめて破壊し、ある時はスラッシュハーケンで落としつつも剣で擦れ違い様に切断、またある時はエナジーウイングから粒子を射出、確実に落としていった。

その時、後に膨大な熱量を感知した。

霜月が”あれ”を使うのか…なら俺も後ろで待機だな。

隼「おい！そこのパイロット！聞こえてるか！？今から俺とあいつはチャージに入る！ミサイルを落としてくれ！」

そして俺は、あいつとタイミングを合わせるために後ろに下がった。白騎士とか言うやつは俺の指示に従ったのだろう、ミサイルを落としに前に出た。

霜〈チャージが完了した。いくぞ〉

隼〈あいよ！待ってました！〉

そうして俺は、スーパーヴァリスのフルバースト、エナジーウイングのエネルギー弾を一斉に発射した。

ｓｉｄｅ　霜月一

霜〈チャージが完了した。いくぞ〉

隼〈あいよ！待ってました！〉

隼人の健闘のおかげか、この短時間で空域のミサイルは三分の二ぐらいになった。

私も頑張らなくてはいけませんね。

露「大地を見ぬまま地獄へ堕ちろ」

私は、ミサイルの群れに向かってトリプルメガソニック砲を放った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

この後、攻勢にでた霜月の活躍もあり、ミサイル三三四一発は一つ残らず落とされた。

後に『白騎士事件』と呼ばれるこの事件は、後に来た軍を白騎士が完全制圧。死者０という行為を容易く成し遂げ、世界にＩＳという兵器の圧倒的な戦力を思い知らせた。

ちなみにヴァサーゴとランスロットはミサイル全撃破後、戦線から海中へで離脱。誰の目にも触れることはなかった。

しかし、ただ一人、白騎士の搭乗者、織斑千冬はあの機体を忘れることはなかった。

そして六年後、彼女はそのＩＳらに再び会うことになる。

序章～物語の始まる前～　ＴＨＥ　ＥＮＤ

ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥＤ！

5話　その青年、介入（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
次回から原作に入ります。

オリジナル設定（前書き）

ネタばれがある！未読者は見るのをお薦めしません！
飛ばして頂いて一向に構わないので…
ここに書いてあることを本に書いてます。要するにメモ。

オリジナル設定

オリキャラ設定

霜月（しもづき）　一（はじめ）

所属：フォンブラウン社
身長：１８５ｃｍ

専用機
ＭＶＩＳ－０１　ガンダムヴァサーゴ

一次移行　ガンダムヴァサーゴＣＢ

二次移行　ガンダムクローケル

この物語の主人公。
神により、ＩＳの世界に転生した一人。
年齢に釣り合わぬ雰囲気を醸し出している。
幼い頃に両親を亡くし、自身の存在意義を見失っているが、歪みを駆逐するという目的で自身の存在意義を保っていた。現在は簪を守るという想いを意義としている。

前世ではアニメやゲームを好み、隼人とよく談議をしている。

ＩＳ適性はＳランク
転生条件は身体能力と技能の強化。

更識（さらしき）　簪（かんざし）

専用機
ＲＶＩＳ－４６Ｎ　斬鉄

霜月に惚れてしまった事により、原作軸から大きく外れてしまった。
霜月やフォンブラウン社の助けもあり、自身のＩＳを開発した。
現在はフォン・ブラウン居住権を持っているが、自宅をつくらず霜月の家で生活している。しかし、フォン・ブラウンに来ることは霜月に呼ばれた時以外無い。
寮にルームメイトが居るためである。
霜月とは相思相愛だが、多少ぎこちない。
これは作者に恋愛経験が無い為である。ごめんなさい。

枢木（くるるぎ）　隼人（はやと）

所属：フォンブラウン社
身長：１７６ｃｍ

専用機
ＭＶＩＳ－０２　ランスロット

一次移行　ランスロット・アルビオン

二次移行　ランスロット・トリトン

神によりＩＳの世界に転生した一人。
頭脳は転生者の中では低い方だが、身体能力は高水準で霜月を上回る。
性格は前向き＆脳天気。とりあえず突っ込んでいくタイプである。
戦闘状態になると口調が変わる。

前世ではアニメやゲームを好み、霜月とよく談議をしている。

ＩＳランクはＳだが、霜月に少し劣る。
転生条件は身体能力の超強化。

クワトロ・ポイボス（神）

所属：フォンブラウン社
身長：不明

使用ＩＳ

ＶＳ－００　０

霜月や枢木など、多くの人間を転生させてきた神であり、フォンブラウン社の社長、都市フォン・ブラウンの永久大統領。

神としては、犯罪者を裁き、来世で罪を償わせる事が仕事である。
しかし、たまに対象を間違えてしまう事もあり、案外軽薄である。
迷惑この上ない。

進藤（しんどう）　真人（まひと）

所属：フォンブラウン社
身長：正確な値は不明

フォンブラウン社副社長。その正体はクアトロが最初に転生させた者であるが、実は元から普通の人間ではない（この物語では語られない）。身体能力、知力ともに最高峰であるが、言動が少しキツい。しかし根は良い…かもしれない。

転生条件は幻想を再現する能力。
オリＩＳ設定

ＭＶＩＳ－０１
ガンダムヴァサーゴ

全身装甲

搭乗者　霜月一

第一形態
ＭＶＩＳ－０１－ＣＢ
ガンダムヴァサーゴＣＢ

第二形態
ＭＶＩＳ－０１Ｃ
ガンダムクローケル

装備（ＣＢ時）

基本装備〈プリセット〉
ストライククロー×２
クロービーム砲×２
トリプルメガソニック砲

後付装備〈イコライザ〉
ストライクシューター×２

装備（クローケル時）

基本装備〈プリセット〉
ストライククロー×２→ストライクビームクロー×２
クロービーム砲×２

トリプルメガソニック砲

ツインサテライトキャノン

ガンダムアローケル

サテライトランチャー
（ガンダムアローケル接続時）

後付装備〈イコライザ〉

ストライクシューター×２

正宗

Ｐ－Ｇビット

単一仕様能力〈ワンオフ・アビリティー〉

リミッター解除

霜月一の専用機。
神より授かった機体であり、ガンダムヴァサーゴをモデルに造られている。

リミッター解除などの搭乗者を考えていない設計ではあるが、強力なステレスシステムやフラッシュシステム受信機、ニュータイプの能力を高める機能も有している。
待機状態は金のイヤリング。両耳に付けているが、本体は右耳の方である。

ＭＶＩＳ－０２
ランスロット

搭乗者　枢木隼人

全身装甲

第一形態
ＭＶＩＳ－０２Ａ
ランスロット・アルビオン

第二形態
ＭＶＩＳ－０２Ｔ
ランスロット・トリトン

装備（アルビオン時）

基本装備〈プリセット〉

メザーバイブレーションソード×2

スラッシュハーケン×4

エナジーウイング（6枚羽）

後付装備〈イコライザ〉

スーパーヴァリス×2

ランドスピナー×2

その他

装備（トリトン時）

基本装備〈プリセット〉

メザーバイブレーションソード×2→ビームトライデント

スラッシュハーケン×6

エナジーウイング（8枚羽）

後付装備〈イコライザ〉

スーパーヴァリス改×２

バスターソード

単一仕様能力〈ワンオフ・アビリティー〉

バーサーカーシステム

枢木隼人の専用機。
神より授かった機体であり、ランスロットをモデルに造られている。

ガンダムクローケルと同じく、バーサーカーシステムという搭乗者を考えていないシステムを搭載しているが、隼人の特性を最大限に発揮すべく高い機動性と高威力の武装を有している。
待機状態は鍵型のペンダント。

ＶＳ－０
０（ゼロ）

全身装甲

搭乗者：クアトロ・ポイボス

移行度不明

標準装備不明

単一能力

月光蝶

全てが謎に包まれた機体。

そもそも使う機会が無いのでどのような装備が有るのかも分からない。月光蝶は《破壊》、《再生》、《攻撃》、《防御》など様々な機能を有しているらしい。

また、移動手段としての量子化に成功していて、一瞬で大気圏の離脱、突入が出来る他、単機での大気圏突入も可能。

ＲＶＩＳ－４６Ｎ
斬鉄（ざんてつ）

搭乗者　更識簪

移行後の名前変更無し

基本装備〈プリセット〉

斬鉄

山嵐

春雷×２

後付装備〈イコライザ〉

インコム×２

単一能力〈ワンオフアビリティー〉

不明

簪の専用機。

霜月が簪の為に作らせた機体で、量産型四世代ＩＳをカスタマイズした機体である。ビームを纏う薙刀『斬鉄』や、収束、拡散可能の巨大ビーム砲『春雷』、マルチロックオンを搭載した１０門×１０発のミサイル『山嵐』、非ニュータイプ用試験型遠隔操作武器『インコム』など、高出力武装がありつつもかなり燃費が良い。

また、展開装甲も標準装備されており、機動性も高い。

待機状態は右手中指に填められたクリスタルの指輪。

ＲＶＩＳ－３７（Ｄ）

バリエント

基本装備（プリセット）

ビームライフル

ビームサーベル

内蔵型二連ミサイルランチャー×２

フォンブラウン社が開発した量産型三世代ＩＳ。現在は無人機のテスト機として使われている。
全体的にスペックが高いが、特に機動力が高い。無人機になって採用された変形システムにより、その機動力はより増した。
敢えて挙げるなら、若干耐久性が足りず、被弾時にシールドエネルギーが多く減少する。
基本戦法は一撃離脱に編隊行動。無人機では難しかった連携も、見事実現された。
本作では福音事件で敵として登場。見事な連携プレーで主人公達を追い詰めた。

オリＢＩＳ設定

ＢＩＳとは、Ｂｉｔ－ＩＳの略であり、主に霜月が使う。高い並行処理能力が必要で、特殊な能力を持つニュータイプしか動かすことは出来ない。
しかし、高いニュータイプ能力を持つ者はかなり制御をする事が出来る。
ガンダムクローケルの持つフラッシュシステム受信機がある機体で

ないと動かせない。

ＭＶＢＩＳ－０１
ガンダムアローケル

装備

ギガンティックビームシザース×２

シザースビームキャノン×２

サテライトランチャー
（ガンダムクローケル接続時）

ガンダムクローケルに最初から搭載されていたＢＩＳ。外見はＭＡ時のガンダムアシュタロンＨＣである。後のＧビットに技術が生かされ、ＢＩＳの基盤を作った。
普通のＢＩＳとは一線を画した姿をしており、性能はとても高く、展開装甲搭載機と比べスピードが段違いである。
当機はクローケルの補佐を目的とした機体であり、クローケルを上に乗せての高速飛行、単独での支援など幅広く活躍出来る。また、クローケルと接続する事により、サテライトランチャーを撃つことも出来る。

両腕のギガンティックビームシザースはＩＳの腕を握り潰す程の威力があり、主に敵機の拘束に使う。

ＶＢＩＳ－０１
Ｐ－Ｇビット（プロトタイプ－Ｇビット）

装備

ビームサーベル

ビームライフル

試験型サテライトキャノン

フォンブラウン社が最初に開発したＢＩＳ。
試験機なので性能や汎用性が低い。サテライトキャノンも親機からエネルギーを流すので、とてもチャージが遅く、実戦ではまず使えない。

学年別トーナメントの際、ガンダムクローケルに６機配備されたが、いずれもランスロット・トリトンに撃破されている。

福音事件でも用いられたが、親機がマイクロウェーブ受信不可状態だった為、大した活躍も無く全滅している。

ＲＶＢＩＳ－１１
Ｇビット

装備

ビームサーベル×２

ビームライフル×２

肩部ビームカノン

フォンブラウン社がＰ－Ｇビットのデータを用いて開発した量産型第一世代ＢＩＳ。

Ｐ－Ｇビットと比べて基礎性能が向上。宇宙、大気圏内両方でそつなく運用が出来、追加装備も可能なので汎用性はとても高い。試験的に取り付けられていたサテライトキャノンは廃止。代わりにビームカノンが追加された。

このビームカノンは、簪の専用機『斬鉄』の春雷をもとに、量産機に追加する目的でつけられた。春雷には劣るが、量産機にしては高い威力があり、エネルギー消費も比較的少ない。拡散射撃不可。現在これを使っているのは霜月だけだが、専用のシステムを機体に組み込むことによりどの機体でも扱う事が出来る。

月面都市　フォン・ブラウン設定

月面にある都市。

クワトロが創設、フォンブラウン社の本社であるが、都市としての機能性も十分にある。

一つのクレーターをそのまま使っている。

町全体にシールドや迎撃砲があり、隕石などを防ぐことができる。

都市の形は円形で、本社のある第零区を中心として第八区まである。
（ピザを切り分けたような形）

第零区…フォンブラウン本社、フォン・ブラウンの管理施設、マイクロウェーブ送信施設など、非常に重要な施設がある区間。

第一区…人々の精神の安定を目的とした区間。
主に娯楽場がある。宇宙で自然を見かけることはないので、地球に見たてた自然公園もあるが、そこは地球よりもきれいである。機械で管理されている事が少し残念ではある。
スポーツ場や図書館、どうなっているのかはわからないが地球の電波を受信しているＴＶ、ネットも使用可能であり、息抜きには最適の場所である。

第二区…ＩＳなどの兵器運用を目的とした区間。
シュミレータ施設や、ＩＳのアリーナが数多くあり、フォン・ブラウンの中で最も面積を有している区間でもある。アリーナの数は実に２０を超え、野外での戦闘や高出力兵器の運用を目的としたアリーナなど、多様なバリエーションがあり、隣の区間が娯楽施設なので、訓練に適している場所と言える。

第三区…兵器開発、研究を目的とした施設がある区間。
隣の運用施設とマッチングしており、データがリアルタイムで送られてくる。
当施設には独立型マルチＡＩ〔ハロ〕が複数配備されており、高速演算、修理、データ管理など、幅広い分野で活躍している。
ＩＳの後付装備〈イラコイザ〉もここで開発が可能である。

第四区，第六区…居住区。
推して名の通り、住む区間である。
間に商業区を挟み、電車に加えてバスなど交通機関が最も発展しているところであり、人が生活しやすい設計になっている。
この都市には何故か多くの人が住んでいるが、それでもまだ住居はかなり余裕があるらしい。

第五区…商業区
食料品や生活雑貨に衣服など、ポケットティシュから家まで何でもそろっている。流石に兵器はない。
すべてフォンブラウン社の製品であり、どれもどの世界の地球の文明を超えている。

第七区…外（地球）から来た人を迎える区間。
高度文明は欠片も見られず、ほとんど地球の文明と同じであるが、第七区の周りには高い壁があり、兵器の働きを妨害するシステムなど、情報の漏えい防止にとても気を使っている。
フォン・ブラウンの住人は、事前に血液中にナノマシンを投与され、それにより区間内の転送ゲートより中に入ることができる。フォン・ブラウンの中では最も面積が小さい。

第八区…地球への転送ゲートがある区間。主に座標指定で地上へと降りる。地上でやることのある人は多くないので、あまり多くは利用されていない。

なお、各区間は列車のようなものが地下に通っていて、自由に区間を行き来できる。
第七区には駅などがない。これは情報の漏えいを防ぐためである。

6話　その青年、入学（前書き）

更新しました！
ＰＶ５０００，ユニーク１０００人突破しました！ありがとうございます！
やっと学園転入です。今回はいつもと比べて少し長め。
文が変なところがあると思いますが…どうぞ。

6話　その青年、入学

白騎士事件から六年後……

ＩＳが世界を左右する存在になった事で、大きく世界は変わった。

その一つとして、女尊男卑は良い例だろう。

ＩＳは、理由は不明だが女性しか動かす事が出来ない。

ＩＳが世界の法となっている今の世なら、そうなるのは必然であるといえる。

だから、このニュースは世界を震撼させた。

『世界で唯一ＩＳを使える男が現れた』

だが、事態はこれだけに止まらなかった。

世界で二人目、三人目が現れたのである。

世界は、新たな混乱に見舞われた……

ｓｉｄｅ　枢木隼人

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田……何て言ったっけ？

兎に角、山田先生はそう言った。

あの人は本当に先生なのかな？
僕には背伸びしています感があるように見える。僕だけ？

山「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

……しーん……

誰からも返事がない。教室は変な緊張感に包まれていた。

山田先生はうろたえながら自己紹介を求めている。
僕はそんな山田先生を横目で見ながら、霜月君に視線を送った。

霜月君はこうなることも知ってるだろうし、これからの事も知っている。
この物語の知識がない僕にはわからない。

と、一番前にいる男子が窓側に視線を送った。
霜月君いわく、あれは織斑君と篠ノ之さんの感動の再会のシーンなんだとか。
…とてもそんな風には見えないな～…

山「織斑くん。織斑くん。」
一夏「は、はいっ！？」

織斑君が山田先生に呼ばれた。何か考えていたのだろう、声がひっくり返っていた。
あ～あ、周りに笑われてるよ。

山田先生がペコペコ謝ったり、織斑君が後ろを向いてたじろいだりした。

一夏「えー…えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

…それだけ？

教室内の視線がプレッシャーに変わる。

霜月君が驚いている。どうしてだろう？

と、

一夏「…以上です」

本当にそれだけだったみたいだ。女子が何人か椅子から落ちたぞ。

と、僕は物凄い威圧感を感じた。僕や霜月君は大丈夫だけど、明らかに普通の人のそれを超えている。

その時、

パアンッ！

織斑君が叩かれた。

その人というのが、

一夏「げぇっ、関羽！」

バアンッ！

出席簿から出したとは思えない音が響いた。

？「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

…織斑くんの机に少しヒビが入っていた。生きているのだろうか。

山田「織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

織斑「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

山田「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

織斑先生の口調が変わった。凄い変わりようだ。

織斑千冬…

確かあの白騎士に乗っていた……

そこまで考えたとき、霜月君にアイコンタクトをされた。

〔耳を塞げ〕

どういうことだろう？ひとまず耳を塞いだ。すると、

「キャーーーーーー！！！」

…ビリビリビリ……

突如、ソニックブームが巻き起こった。

耳を塞いでいなかったら即死だった……

……その後も自己紹介はつつがなく行われた。

今は『く』。僕の番だ。

隼「初めまして。フォンブラウン社に所属しています、枢木隼人です。好きな言葉は友情。嫌いな事は他人を卑下すること、またはする人です。よろしくお願いします」

そう僕は笑顔で言った。うん？また霜月君からだ。

〔耳を塞げ〕

そして塞いだ瞬間ソニックブームが巻き起こったのは言うまでもない。

そいて霜月君の番がきた。

霜「初めまして。フォンブラウン社所属、霜月一だ。特に好きな事などは無いが、気兼ねなく接してほしい。よろしく頼む」

その後ソニックブーム（以下略）

こうして自己紹介は窓ガラス三枚を犠牲にして終わった。

ｓｉｄｅ　霜月一

一時間目の授業が終わって今は休み時間である。

私は隼人と前世でのゲームについて論を交わしていた。

一夏「ちょっといいか？」

一夏がこちらに近づいてきて、話しかけてきた。

霜「何だ？」

一夏「お前らが後二人の男子だよな。俺は織斑一夏。同じ男同士、仲良くやっていこうぜ」

霜「ああ、よろしく頼む」

隼「よろしくね。織斑君」

そう言って、握手を交わす。

一夏「俺の事は一夏で構わない」

霜「そうか。では私の事も一でいい」

隼「僕も隼人でいいよ」

一夏「そっか。よろしくな。一、隼人」

余程これまでのプレッシャーがキツかったのだろう。初めて安堵した表情になった。

？「ちょっといいか？」

霜「うん？」

そこにいたのは篠ノ之箒だった。ああ、感動の再会をするのか。

箒「少しこいつを借りたいのだがいいか？」

霜「構わない」

隼「いいよ」

そう言うなり、箒は一夏の手を握り、教室の外へでた。

私と隼人は、再び雑談に戻った。

二時間目は、一夏が参考書を捨てたとか、そんな事があった。このあたりは原作通りか。

休み時間、一夏は一人、金髪貴族に絡まれていた。私達の所に来なかったのは時間がなかったからだろう。嬉しい事この上ない。

三時間目、織斑先生によりクラス代表を決める（一方的な）話し合いが行われた。
真っ先に名前が挙がったのが一夏、私と隼人は名前が挙がらなかった。原作通りに進むのだろうか。だとしたらありがた……

一夏「なら俺は一を推薦するぞ！」

…前言撤回。世界は優しくは出来ていないらしい。
とその時、代表候補生のエリート（笑）が怒りをあらわにした。
大まかに言うと、恥さらしがどうだの、極東の猿がどうだの、文化が後進的だの、そんなようなことを叫んでいた。実際は、その極東の猿がＩＳを開発したのだがな。
これにより、一夏、ついでに隼人がキレた。面倒事はごめんなのだが、しょうがないか。

一夏「イギリスだってたいしたお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」
隼「昔にすがりついてるだけの小さい孤島の猿が、何を喚いているのやら」
セ「あっ、あなたたちねえ！私の祖国を侮辱しますの！？」
霜「初めに侮辱したのはそちらだろう。言語をちゃんと理解したう

えで生きていかなければならないぞ？」
セ「ぐっ……！ぬぬぬぬぬ！決闘ですわ！！」
一夏「おう、いいぜ。四の五言うより分かりやすい」
隼「はぁ、雑魚を相手にしなきゃいけないなんて、めんどくさいなぁ…」
霜「だったら、総当たりも面倒だ、トーナメント形式にしないか私と隼人、一夏とオルコットで戦えばいい。それで文句無いか？」
セ「ええ、いいですわ。だれが勝つのかなんて目に見えてますもの」
織斑「話はまとまったな？それでは一週間後の月曜日、第三アリーナで勝負を行う。各員準備しておくように。それでは授業を始める」

つい言ってしまったが、隼人とは数年ぶりに戦うことになる。これは少し楽しみになってきたな。

放課後、山田先生から寮の部屋の番号を伝えられた。神聖なるバトル（じゃんけん）の末、一夏は１０２５室、私と隼人は１０２６室になった。どうせフォン・ブラウンに小型端末を用いて帰るから必要ないのだが。一夏は原作通り、１０２５室で波乱の生活を送るのだろう。私の知ったことではないがな。

私と隼人は帰宅するなりフォン・ブラウンへ帰還、自身の機体を調節したりしながら一週間を過ごした。

そして月曜日、第三アリーナで勝負が行われた……

To be continued...

6話　その青年、入学（後書き）

誤字脱字、おかしな所等ありましたら、感想にてお願いします。
次回は戦闘！うまく戦闘描写が書けるよう努力します。

7話　その青年、出撃（前書き）

更新しました！
戦闘描写のはずだったのに…どうしてこうなった？
滅茶苦茶ですが…どうぞ。

7話　その青年、出撃

ｓｉｄｅ　霜月一

今私はアリーナのゲートにいる。

原作通りなのだが、やはり一夏はずっと剣を振っていたらしい。改めてみると、馬鹿である。

その後、一夏のＩＳ『白式』が来て、一夏は空へ飛んで……押し出された。

原作通りなので割愛

織斑「馬鹿者」
箒「馬鹿だな」
霜「バカだ」

帰還早々フルボッコにされた一夏はその場に倒れ込んでしまった。
ＩＳの絶対防御でも防げなかったらしい。

…さて、次は私の番だな。

（来い、クローケル。）

私が意識するのとＩＳが展開するのはほぼ同時である。伊達に七年も使っていない。

ガンダムクローケル

ガンダムヴァサーゴの第二形態であり、これまでの武装に追加して、ツインサテライトキャノンがついている。

だが、これは最低出力でもＩＳの絶対防御を貫いてしまうので使えない。学園内で使ったらここは無くなってしまうだろう。正直、邪魔である。

後は後付装備として長さがＩＳの二倍を誇る『正宗』、ストライククローがストライクビームクローになった。

これを展開したとき、織斑先生の顔に驚愕の色が浮かんだ。が、そんな事はどうでもいい。

霜「霜月、クローケル、出る！」

私はバレルロール上昇をし、隼人の元に降り立った。

隼人のＩＳはランスロット・トリトン。

ヴァサーゴと同じく、ランスロットの第二形態である。

メザーバイブレーションソードが無くなり、変わりにビームトライデントになった。

ハイパーヴァリスは新たにミドルモードとショットモードが加えられた。

ミドルモードは連射に優れ、ショットモードはビームを撒き散らす事が出来る。

エナジーウイングの羽の枚数や、スラッシュハーケンも増えており、戦略に幅がでたが、いかんせん隼人は猪突猛進型で戦略というものを知らない。

隼「悪いが勝たせて貰う」

霜「軽口は私に勝てるようになってから言うのだな」

隼「もうあんたには負けない」

霜「フッ…では再び、絶望を贈ろう」

隼人はビームトライデントを、霜月は正宗を頭上で構える独特な型で構える。

山田「それでは初めて下さい！」

始まりのブザーが鳴った。

side out

……開始から3分後…

一夏「どうして二人とも動かないんだ?」

織斑「互いに牽制しあっているんだ。篠ノ之なら二人の間で行われてる戦いがわかるだろう?」

箒「はい…凄い殺気がするのがわかります。あの二人は一体…」

千冬は考えていた。

(あの赤い機体と白い機体…あの時の機体にそっくりだ……偶然なのか?)

しばらくした後、隼人がビームトライデントを構え、突進した。

霜月はそれを正宗で弾き、返す刀で隼人に太刀を浴びせた。その速さは凄まじく、千冬の目にも捉える事が出来なかった。

織斑(なっ!!私の目で太刀筋が追えない!!何なんだ?あのスピードは!)

霜「フッ!」

正宗を一閃、衝撃波が隼人を吹き飛ばした。

隼人は体勢を立て直したが、直ぐに連撃を浴びる。

試合は一方的に行われるかと思われた。

だが、隼人は徐々に刃を弾き始め、鍔(?)迫り合いになった。

霜「ほう？何がお前を強くした？」

霜月の質問に隼人は意図を察したようで、

隼「あんたには言いたくないね！」

そのやり取りが面白かったのか、二人は笑った。ちなみにこの間も不可視の斬撃は続いており、隼人はそれを弾いている。

霜「だが、遊びはここまでだ」

〈八刀一閃〉

霜月が使うその剣技は不可視の斬撃から一転、凄まじいパワーの斬撃のラッシュへと変わる。

そして八刀目、

霜「終わりだ」

一閃。

強制的に絶対防御を発動させ、そのままシールドエネルギーを０にする。

山田「し、終了！勝者、霜月一！」

試合時間はおよそ１０分。
状況が理解出来ない者、呆然としている者、反応は様々だったが、
アリーナは、静寂に包まれていた。

ｓｉｄｅ　霜月一

次はセシリアか……
面倒だな。適当に終わらせるか。

セシリアがこちらに降りてきた。

セ「…あなたに勝とうとは思いません、でも、健闘はさせてもらいますわ」
霜「ほう…一夏と戦い、学んだか。」

まぁ、原作通りだがな。

山田「両者準備は良いですね？では、始めてください！」

開始のブザーが鳴った。

セ「踊りなさい！私とブルーティアーズが奏でる円舞「邪魔だ」…え？」

私は正宗を一閃、衝撃波でビットを全て落とした。

霜「悪いが、直ぐに終わらせる」

直後、ヴァサーゴは、アリーナにいる全員の視界から消えた。

セ「なっ！ＩＳのセンサーでも見つからない！一体どこに…」

突如、上から声がした。

霜「残念だが、サヨナラだ」

〈獄門〉

霜月はセシリアの上から、正宗を下に構え急降下。ブルーティアーズの絶対防御を発動させその勢いのまま落下。アリーナにクレーター作った。

山田「……はっ！勝者、霜月一！」

その日、会場が沸くことはなかった…

その後第三アリーナの修理をしたのは私である。はぁ、面倒臭かった…

――試合後――

織斑「霜月、枢木、話がある。ちょっと来い」

霜　隼「「…わかりました」」

私と隼人は織斑先生に呼び出された。休ませてくれてもいいのではないか？本当に面倒事が続く…

ｓｉｄｅ　織斑千冬

霜月と隼人は何者なんだ？

あの試合で霜月は強力なステレスシステムを使っていた。それこそ全てのセンサーに引っかからない強さである。

織斑「単刀直入に聞く。霜月、隼人、お前たちは何者だ？」
霜「どういう意味ですか？私はフォンブラウン社所属の霜月一、それ以上でもそれ以下でもありませんが？」
隼「僕も霜月君と同じですね。ただのしがない高校生です」
織斑「何を隠している…？」
霜「人とは常に何かを隠しているものですよ。お先に失礼します。」

霜月は、そう言って去っていった。

隼「…あの時僕の指示に従って頂きありがとうございました。お陰で効率よくミサイルを落とすことが出来ましたよ……では、失礼します」
織斑「！！！！！！　おい待て！！どういう事だ！？」

……既にそこには誰もいなかった。

奴らは…何者なんだ…

ｓｉｄｅ　霜月一

山田「…と言うことで、クラス代表は織斑君に決まりました～」

どうやら原作通りに事は進むようだ。
私は辞退、恐らくセシリアも辞退だろう。隼人は元から選ばれていない。

一夏「あの～…俺負けたんですけど…」
霜「私が辞退したからな」
セ「私も辞退致しましたわ。」

その後もセシリアがなんか言っていたが割愛させていただく。面倒だから。

一夏「だからって…」
霜「一夏、敗者は勝者に従え」

私は無言のプレッシャーを添えてそう告げた。

一夏「……はい」

その後、クラス代表就任記念パーティーがあったが、やはり面倒なので途中で抜け出した事だけをお伝えしよう。

to be continued...

7話　その青年、出撃（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
設定の方も更新しなくては…

正直に言うと、もう一人をスザクにしたのは、

「ほう？何がおまえを強くした？」
「あんたには言いたくないね」

このやりとりがやりたかっただけです！
分かる方はわかると思いますが……

8話　その青年、懐疑（前書き）

更新しました！
今回は日常回です。
では…どうぞ。

8話　その青年、懐疑

ｓｉｄｅ　筆者

前回のあらすじー。

何かセシリアが一夏に惚れて一夏が落ちてフラグを建てまくってボコボコにされました～。

以上ー。

ｓｉｄｅ　霜月一

……何だったんだ？今のは？

さて、今クラスはクラス対抗戦の話で盛り上がっていた。

何でも勝ったクラスには食堂のデザート半年フリーパスがでるらしい。そんな事もあったな。

皆は一夏の机の周りに群がり、勝ってくれれば皆がハッピーだのそんな声がよくきこえる。

そして話は二組の転入生……名前はなんと言ったか？とりあえずその話になっていた。

さっきまで話に加わってなかったセシリアと箒も加わった。二人と

もいつ移動したんだ？

……そろそろか？

「その情報、古いよ」

入り口の前でなんとか鈴なんとかは仁王立ちしていた。人の名を覚えるのは得意ではない…。

「中国代表候補生、フ「鈴じゃないか！久しぶりだな！」ちょっと一夏！最後まで言わせなさいよ！」

ナイスだ一夏。いつも空気を読まないくせに筆者の都合に合わせてくれるとは……

……今日の私はどうしたのだろうか？疲れが溜まっているのか？

私は現実逃避するために机に突っ伏した。

遠くで出席簿クラッシュの音がする。

織斑「霜月！起きろ！」

いや私は起きているのだが……

ひとまず出席簿クラッシュが来そうだ。

ブンッ！……バシッ！…

私は出席簿クラッシュを人差指で抑えた。結構衝撃が来るな。痺れてしまった。

霜「調子が悪いので保健室で休んできます」

織斑「あ、ああ。わかった。次も出られないようなら連絡を入れろ」
霜「わかりました」

私は顔をあげた。見るとクラス中の隼人以外の人間が茫然としている。人差し指で止めるのはやりすぎたか？やはり親指あたりがよかったのだろうか？

私は保健室で考えていた。
クラス対抗戦…確か束博士により無人ＩＳが送られてくる日だ…
それだけならなんら問題ないのだが、なぜだか胸騒ぎがする。最悪、アリーナが消し飛ぶかも知れん…
対策を練っておくか…杞憂であることを切に願いたい。

ｓｉｄｅ　枢木隼人

僕は今、霜月君や一夏君たちと食堂でお昼をとっていた。

霜月君は何を考えているんだろう。それがこれから先起こることに関してなのか、別のことに関してかはわからないけど、霜月君の勘はよく当たる。

一夏君達はセカンドがどうだとか言ってるし、ちょうどいい。僕は霜月君に耳打ちした。

隼「ねぇねぇ霜月君。これから先、なにかあるの？」

霜「…ああ、クラス対抗戦で束博士が試合中に無人機を送ってくるのだが、それ以外に何かある気がしてならない。杞憂だといいのだが…」
隼「そう…なら、手をうっておかないとね」
霜「ああ、ひとまずは社長に相談だな」
隼「うん、そうだね」

といっても、今は何も出来ないけど…

ｓｉｄｅ　霜月一

放課後、私と隼人は寮の隣の部屋から聞こえるビンタの音を聞き流しフォン・ブラウンへ行った。

第七区から第八区、列車を乗り継ぎ第四区のマイホームまで戻ってきた。ここで無いと社長とコンタクトがとれないからだ。

霜「社長。今日隼人とそっちに行っていいか？少し気になることがある」
ク「分かった。２２時にこちらへ来い」

短い会話を済ませ、旨を隼人へ伝えると第三区の研究所へ行った。
少し機体の調整もしなくてはいけないし、何より今ビットタイプの新兵器を開発中なのである。
ガンダムアローケルの技術がうまく生かせればいいのだが…

――――２２時――――

私と隼人は第零区にあるフォンブラウン社の本社ビル８０階の社長室に居た。何故こんなに高くする必要があるのだろう？

霜・隼「「失礼する」」

私と隼人は入室した。社長は、いつもの通りイスに座っていた。

ク「来たか。用件というのは？」
霜「原作通りクラス対抗戦が行われるが、その時に襲来してくるのがただの無人機（ゴーレム）だけでは無い気がしてな。場合によっちゃ向こうのアリーナが吹っ飛ぶかも知れないから、何か対策を立てておきたくてな」
ク「……そうか。分かった。当日は一応私も『０』に乗って待機していよう」
霜「すまない。恩にきる」
ク「用はそれだけか？」
霜「ああ、では失礼した」

そう言うと、霜月はここを後にした。
さて、私の読みが当たればここに”歪み”が来るはずだが…どうなるんだ？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ク「…枢木、本当にお前は何もないのか？」
隼「……この世界のことについては何もわからない。俺はここに居るべきなのか？」

ク「なに、お前の望みはちゃんとかなえてやったさ。まだ時期ではない」

隼「なに？どういうことだ？」

ク「そのうち分かる。そのうち、な」

隼「……？…そうか、失礼した」

隼人もそう言うと部屋を後にした。

ク「さて、この世界はどう動く？」

クワトロは、誰に聞かれるでもなくそう呟き、口を笑みに歪めた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

8話　その青年、懐疑（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
原作キャラになかなか介入できない…
アローケルはクローケルの後付装備です。

9話　その青年、調節（前書き）

更新しました！
テスト前期間に入るため更新が若干遅れます&本編にいくのが難しくなります。
今回は本編ではないです。
では…どうぞ。

9話　その青年、調節

ｓｉｄｅ　筆者

おはこんばんちわ。
前回のあらすじ

来るクラス対抗戦に向けて機体を調節する霜月であったー

一夏はビンタされたり怒らせたりしたのであったー

以上ー

ｓｉｄｅ　霜月一

……最近変な電波を受信する。ニュータイプになったせいだろうか？

今日は休日。私はフォン・ブラウンの第五アリーナ、高威力兵器稼働用のアリーナに来ている。

数時間前ーーー

研究員「君の新装備を開発するためのデータがほしいから、アローケルを使ってみてくれないか？」
霜「わかった。こちらも高威力の武装の調節をする予定だ。第五アリーナで行う。」

研「了解。アリーナ壊すなよ？」
霜「保証は出来ないな」

私は通信を切り、第二区のアリーナへ向かった。

…どうでもいいが、何故交通手段が列車しか無いのだろう？量子転換システムを使えばいいのだと思うが、これでは時間がかかる…
今度社長に打診してみるか…

霜月は第五アリーナにつくと、クローケルを展開した。

（来い、アローケル）

霜月は、自分の右隣にガンダムアローケルを展開した。

ガンダムアローケル

クローケルの後付装備。外見はガンダムアシュタロンＨＣのＭＡ形態そのもので、大型ビット兵器である。
一部動作は内蔵型ＡＩ『ＨＡＬＯ』がサポートしているが、殆ど霜月の脳波でコントロールしている。
主な武装は両腕のギガンティックシザースと、シザースに内蔵されたシザースビームキャノン。
また、クローケルとドッキングする事によりサテライトランチャーを使用する事が出来、クローケルの追加推力としても使うことが出来る。

研「よし、では始めてくれ」

アリーナに複数のターゲットが現れた。

（行け、アローケル！）

アローケルはビームを連射しながらターゲット群に強襲した。
シザースで握り潰し、ビームを撃って落とし、ビットとは思えない戦果を叩き出した。

霜「アローケル、ドッキング！」
Ｈ［リョウカイ！アローケル、ドッキングモード！］

アローケルはこちらに戻り、ドッキングの姿勢に入った。といっても、クローケルが乗りＨＡＬＯが調整するだけなので大層な事ではない。

（同調率は上々。いける！）
霜「マイクロウエーブ、来い！」

すると、フォン・ブラウン第零区にある特殊発電施設よりマイクロウエーブが送信された。
クローケルはそれを背中のリフレクターで受信、チャージを開始した。

リフレクターが徐々に黄金色の光を放ちだす。

……

……

……

〈チャージ率１００％〉

その合図を確認するや、ツインサテライトキャノンの砲門を前面に、アローケルからサテライトランチャーの砲門を展開した。

霜「いっけぇぇぇぇ！！！！」

〈トリプルサテライトキャノン〉

その名の通り、ツインサテライトキャノンとサテライトランチャーを複合させた技である。

威力だけで言うなら、地図を変える事が出来る位の威力である。

現に、ターゲットは跡形もなく消えている。

アリーナの防御壁は破壊されていない。クアトロが何かを仕掛けているらしいが、この威力を防ぐものが何なのかはわからない。

威力こそ高いが、実戦で使うにはチャージが長すぎて無理である。

もし仮にこの兵器を通常のＩＳに使ったら、操縦者もろとも消えてなくなるだろう。それ程に強力な兵器なのである。

霜「ふむ、やはりチャージの効率を良くしなければいけないな。どうだ？データはとれたか？」
研「はい。上々です」

霜月はＩＳを解除し、
霜「わかった。装備の完成を期待している」

そう言い残し、通信を切って去っていった。

さて、これからどうなるのか…
私の生きる意味はどこにあるのだろう…

私はただ、歩を進めるだけであった。

また列車に乗り損ねた。絶対に打診してくれる。

ｓｉｄｅ　研究員

（アローケルを元にしたＩＳ型の大型ビット……サテライトシステムの搭載……）

どうしてここまで装備にこだわるのだろう？我々の技術力は開発者である篠ノ之博士をとうに超えているのだから、そこまでする必要はあるのだろうか？

研「戦争でも起こす気なのか？それとも、戦争が起きるのか？」

私はディスプレイの中にある開発プランを見つめた。

研「ＩＳ型遠隔操作兵器”Ｇビット”開発計画か……」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

9話　その青年、調節（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

あの研究員も出演キャラにしようかな…

１０話　その青年、破砕（前書き）

更新しました！
相変わらず原作キャラとの交流がない……
では…どうぞ。

１０話　その青年、破砕

ｓｉｄｅ　霜月一

今日はクラス対抗戦の当日。
一組対二組の試合（一夏と鈴）が行われてる事だろう。
というのも、今私と隼人はそのときに備えアリーナ外で待機している。時が来ればシールドを破壊し中に突入する。

そしてそのときはやってきた。

上空にＩＳが接近するや、両手の巨大ビームを発射、シールドを突き破り中に入っていった。

霜「来たか…隼人、ハドロン砲でシールドを破れ」
隼「うん……わかった。やってやる」

私と隼人は飛翔し、ハドロン砲の発射と共に飛び込んだ。
…ここのアリーナのシールド、脆すぎないか？

一夏「一！隼人！どうしてここに！？」
鈴「うそ！？あれ一と隼人なの！？」

一夏と鈴がこれまで戦っていたんだったな。正直邪魔だ。

霜「お前等はさっさと後退しろ。戦力にもならない。邪魔だ」
一夏「なっ……！！もう少しで教師が来る！それまで「そんな雑魚ども待つだけ無駄だろう！！」…隼人？」
どうやら隼人は早く戦いたいらしい。この隼人は本当に面倒だ。

霜「隼人。腕は私がもらう。後は好きにしろ」
隼「向こうの攻撃手段潰しちまったらつまらん！どうして腕にこだわる？」
霜「なに、あのエネルギーの充填方法が使えないかと思ってな」

そこまで言うと隼人は頭をかき、
隼「しょうがねえな…分け前寄越せよ？」
霜「ああ。と」

霜月はまだ居た一夏と鈴を一瞥し、

霜「足が竦んで動けないなら安全な所まで行け。ウロウロされるだけ迷惑だ」
鈴「……わかったわ。もう何も言わないわ」

ふむ、やはり我々では力不足と思っているようだな。
まぁ、逆の立場なら私もそう思うか。

霜「さて、アローケル、頼む」

霜月はアローケルを展開。高速でゴーレムに突撃した。勿論、迎撃を全て回避して。

霜「取り付き、もぎ取れ」

アローケルは瞬時加速を5重発動し、背後からシザースでゴーレムの両腕を掴んだ。
少しの時間金属の軋む音がなり、両腕を引き離した。

霜「隼人、後は好きにしろ。コアに興味はない」
隼「りょーかーい。さーて、やります「隼人！離れろ！」な！？」
突如、アリーナ上空から赤黒いビームがゴーレムを貫いた。
隼「あれは……ハドロン砲！？」
見ると、上空に普通のＩＳの１．５倍はある巨大なＩＳが滞空していた。
霜月と隼人はそれの名を知っている。
霜「ふむ…あれはガヴェインか？織斑先生！生徒の退避は終わってますか？」
織斑「あ、ああ。生徒の退避は終わっているぞ」
隼「そういえば織斑先生たちいたんだ……」
霜「では先生方はそこで固まっている一夏たちと共に退避してください。このアリーナは最悪消し飛びますが、後でなおします。では」
織斑「おい！しも…」
私は一方的に通信を切った。
霜「さて……始めるか。隼人、支援頼むぞ。これからソニック砲を撃つ」
隼「おうよ！任されて！」
霜月はアローケルを回収、両手を地面に差し、発射体勢に入った。
隼人は突撃し、ひたすらトライデントで突いていたが、ことごとくかわされてしまう。

隼「こいつっ…！見た目の割に早い！」

……

〈エネルギー充填率６０％〉

霜「貴様にはこれだけで充分だ。地獄へ堕ちろ」

〈トリプルメガソニック砲〉

腹部より放たれた閃光は、しかしハドロン砲で相殺させられた。

（ソニック砲の相殺だと！？あのコアは調べてみたいが…無理だろう）

霜「くっ……天気は晴れだ！マイクロウエーブ！来い！」

空にある昼間の月から、マイクロウエーブが送られる。

（やはりアリーナは消し飛ぶか…）

霜月は、深く息を吐いた。

……

……

〈エネルギー充填率４０％〉

霜「隼人、後退しろ！いっけぇぇぇぇ！！」

〈ツインサテライトキャノン〉

前面に出した砲身から光が溢れた。
対するガヴェインもハドロン砲を最大出力で放出した。

そしてアリーナが光に包まれた……

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

１０話　その青年、破砕（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

11話　その青年、追想（前書き）

しばらくの間更新出来ず、申し訳ありませんでした。
だからアレは嫌いだ……
失礼しました。では…どうぞ。

11話　その青年、追想

side　霜月一

……不味い。やりすぎた…

確かにガヴェインみたいなやつは倒した。それこそ、塵も残さず消滅させた。

なのだが……

使っていた舞台、第二アリーナは…消滅した…

霜「ふむ、４０％でこれか…威力としては申し分ないが…如何なものかな？」

ＩＳのモニターで周りを確認してみる。どうやら皆無事のようだ。あんぐりとはしているが。

霜「織斑先生。申し訳ない。アリーナを消し飛ばしてしまった」

織斑「……」

へんじがないが、屍と言うわけでもないだろう。山田先生含めて何人か気絶しているし。

取り敢えず、さっきから上空にいる人に声をかける。

霜「社長。降りてきても構いませんよ」

ク「ああ。しっかし、派手にやったなぁ」
霜「わざとでは無いんですがね。半分も出してませんし」
社長こととクアトロは、自身の専用ＩＳ《０》でこちらに降りてきた。

０

クアトロの専用機であり、世代は不明。
見た目は∀であり、髭に貫禄がある（本人談）
戦闘能力は…わからない。戦っているところを見たことがない。

ク「さーて、いっちょやるか」

０は、上空に上がると、背中から虹色の粒子を出し始めた。

《単一能力　月光蝶》

突如、０の背中からおびただしい量の粒子が出て、アリーナのあったクレーターを包み込んだ。

月光蝶は、単一能力でありながら、《再生》、《破壊》、《防御》など、様々な用途に使うことができる、正にチートＩＳに相応しい能力である。

数秒後、第二アリーナは何事も無かったかのようにそこにあった。

霜「あ、これ束博士作のＩＳの腕です。研究してエネルギー充填率向上させてくださいよ」

私も何事も無かったかのように収納していたゴーレムの腕を出した。

ク「お、博士製かい。いいサンプルになるよ。ありがとう」

此方も特に気にして…する訳ないか。

霜「いえいえ、では、この埋め合わせは必ず」

ク「気にしなさんな。じゃ。」

軽い挨拶をすませた後、０は”消えた”。何でも量子転換システムを応用したらしい。今頃は月に居るんだろう。

織斑「……おい、霜月。今のは誰だ」

あ、織斑先生が我に返った。

霜「私の所属している、フォンブラウン社の社長です」

そう答えると、織斑先生はまた固まってしまった。もうソニック砲撃った事なんてどうでもいいようだ。撃った時少し焦ったんだが。

…何？撃たなければ良かった、だと？そう言われると反論出来ないではないか。あれで充分と思ったんだ。後悔しかしていない。

なんて馬鹿な事を考えつつ、学園はまた何時もの生活へ戻っていくのだった。

余談だが、この後一夏達から引かれた事は言うまでもない。

はぁ、次はあの二人か…

ペアはどうするかな…

ｓｉｄｅ　？？？？？

ここは誰も知らない暗闇の中……

周囲には、様々な機械の部品や機器がある。

その真ん中で、ウサミミアリスは、固まっていた。

「……」

彼女は、一夏達を鍛えるために送り込んだＩＳを呆気なく破壊し、更に後から来た謎のＩＳと戦闘していた様子を見ていて、漫画のように目を見開いたまま固まっていた。

「何あれ…あんなのこの天才の束さん知らないよ…」

誰に聞かれるまでもなく、一人呟いた。

「あの機体、それにフォンブラウン社…調べてみる価値はあるね…」

その女性は、まだ若干顔をひきつらせながら、呟いた。

「あれじゃあ箒ちゃんの紅椿が負けちゃう…」

深い溜め息を吐くと、また黙々とＩＳの開発に戻った。

ｓｉｄｅ　霜月一

…久々に、前世の夢を見た。

今は学生寮の自室。隼人はフォン・ブラウンに戻っている。

私は、前世の死ぬ（殺される）少し前の夢を見ていた。

……

……

私は、モテなかった。それどころか、性格が災いし、高校では碌に親しい友人もいなかった。

テストはいつも下位。勉強してもあまり反映されず、虚しい日々を送っていたように今では感じる。

友人も居ることは居るのだが、いつも根暗のオタク扱いされ、正直辟易していた。

……思い返してみれば、あの日々は非常に空虚だった。
ただ学校へ行き、勉強して、帰って、勉強して、悪い点をとって親に呆れられ、勉強して……

そんな日々でも、私には高校に行く理由があった。

私は、クラスの一人に、恋をしていたのだ。

恋愛経験などなく、女性に話しかける事の出来ない私は、ただ彼女を見る事を支えに学校へ行っていた。少し思考が変態である、と今は思う。

だが、そんな日常は長く続かなかった。

彼女は、身体の具合を悪くし、転校したのである。

別に私に他人をどうこうする権利などなく、片思いの人もいなくなり、また何時もの空虚な生活に戻った。

その頃だっただろうか。こんにゃくが頭にクリティカルヒットしたのは。

……

……

起きたら私は涙を流していた。昔を思い出したのか、あの気持ちを思い出したのか。

あの世界に未練はない。此方は結構面白い。それ故、私は思うのである。

私が此処にいる意味は何なのだろう？
ただ悪戯に人の運命を変えるイレギュラーの私が……

私は一人、再び涙を流した。

今日は休日である。あのままでいるのも嫌なので、敷地内をふらふらとしていた。織斑先生に捕まる可能性もあったが、どうでもよかった。

ふと、ハロでも作ってみるかとＩＳ整備室を訪れた。む、中から音がするな。熱心な者も居るものだ。

取り敢えず私は中に入った。中に居たのは音を出していたその一人。髪は青色のセミロング、眼鏡をかけていて、少し近寄りがたい雰囲気を醸し出していた。

それが、私と彼女、更識簪との出逢いだった……

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

11話　その青年、追想（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
霜月に少し自分を投影してみました。霜月は変態ではないのであしからず。
レッツ、原作キャラ介入！

12話　ある少女、邂逅（前書き）

更新しました！
今回は書いている家に主人公が変わってきたので、タイトルも変えてみました。いつもより長めになっています。
では…どうぞ。

12話　ある少女、邂逅

ｓｉｄｅ　霜月一

…休日に研究をするなんてと思ったが、専用機を作っているのだったな。

私は彼女、更識簪に軽く一礼して奥へと入った。それほど広いわけではないが。

さて、技能を向上したので、当然開発能力もある。

さて、まずは本体から作るか。

ｓｉｄｅ　更識簪

私がいつも通りＩＳを作っていたら、男の人（確か一組の霜月君）が入ってきた。

今日は休日なのに…珍しい人だな…

私は霜月君に返礼すると、また作業に戻った。

霜月君て確かとても強い人だよね。機械にも強いのかな？

と思っていると、霜月君がどこからか取り出した金属板を丸く加工していた。あんな金属板あったっけ？

ついつい気になって、霜月君の手元を凝視していた。

ｓｉｄｅ　霜月一

…後ろから視線を感じる。恐らく私を凝視しているのだろう。

本体は完成し、ＡＩを作る工程に入った。

ペットタイプのハロにするつもりなので、あまり難しい回路は作らなくても良い。

回路工程に入った瞬間、後ろからのプレッシャーが強くなった。ガン見してるな…

……

…よし。出来た。後はこれを本体に取り付けて……

〔ハジメマシテ、ハジメマシテ〕

霜「ああ、宜しく頼むぞ。ハロ」

〔ヨロシク、ハジメ。ヨロシク、ハジメ〕

ふう、何とか完成したな。

ｓｉｄｅ　更織簪

〔ヨロシク、ハジメ。ヨロシク、ハジメ〕

霜月君の作った丸いボールのような機械は、そう言葉を発しながら跳ねていた。

…凄い。独立したＡＩで自意識を持っている…多分感情も。

それをこんな短時間で…

霜「さて……さっきからどうした？更識さん」

簪「……いえ……何も……」

霜月君は此方に歩きながら私に言った。

霜「ＩＳを作っているのだろう？姉のこともあるだろうが、誰かに頼るのも手だ」

簪「……！……どうしてそれを？」

霜「さあ？どうしてだろうな？只忠告しただけだ」

そう言うと、霜月君は歩いていった。

簪「……何者？」

ｓｉｄｅ　霜月一

更識簪……

昔の私と雰囲気が似ていたから声をかけてしまったが…私はまた人の運命を変えてしまったのか？

…まぁ、頼られれば助けるか。

〔ハジメ、ゲンキナイ。ドウシタ、ドウシタ。〕

霜「さあな。どうしたんだか」

私は、今度の個人戦もとタッグマッチについて思考を巡らせていた。

隼人とは…恐らく組ませてもらえないな。

他の人は大体運命が決まっているからな。

……更識簪と組むのも悪くない、か。

まぁ技術に関しては社長に相談だな。

私は、自室に向けて歩みを進めた。

その時、

「待って！」

ｓｉｄｅ　更識簪

私は、霜月君を追いかけていた。

霜月君に手伝ってもらいたい。

どうしてか解らないけど、そんな思いがあった。

簪「待って！」

私は、霜月君にむかって叫んだ。こんなに声出るんだ…

霜「む、どうした？」

簪「どうして私の事情を知っているのかは知らないけど、お願い！手伝って！」

霜月君はとても驚いている。私もどうしてこんなに声がでるのかわからない。

霜「…ふむ。願ったり叶ったりだな。わかった。手伝おう」

霜月君は少し考えるような仕草をした後、そういってくれた。

簪「本当！」

霜「ああ。だが、次の個人戦までに仕上げるぞ」

簪「うん。わかった」

早く作れるなら早いに越したことはない。

霜「さて…社長に相談だな…」

霜月君が小さな声でそう呟いた。

簪「社長？」

霜「ああ。我がフォンブラウン社の社長に相談をして研究施設を使わせてもらおうかと思ってな」

唐突に恐ろしい事を言い出した。フォンブラウン社は暗部の更識家でも調べられない存在。そんな易々と案内して良いのだろうか。

簪「……いいの？」

霜「勿論、君には黙って貰うことになる。が、ＩＳ開発が我が社の技術で出来るのだが、不満か？」

…霜月君や、もう一人の隼人君の機体を見て、技術力が凄いのはわかる。なら…

簪「……わかった…お願いします…」

霜「うむ。では明日連絡する」

私と霜月君はひとまずメアドを交換し、別れた。

…これ、お姉ちゃんには絶対に言わない方がいいよね…？

ｓｉｄｅ　霜月一

霜［……と言う訳だ］

私は今、フォン・ブラウンの自宅にて社長に例の件について報告していた。

ク［あ～いいんじゃね？もう直ぐそっちにも支社作るし］

霜［……えらく軽いな…］

ク［大丈夫だろう］

…まぁ、いいか。

ｓｉｄｅ　更識簪

……翌日

今日は日曜日。何時もはＩＳを作っているけど、今日は違う。

霜月君に呼び出されて、アリーナの丁度死角にいる。

会社に行くんだから、やっぱり制服の方が良かったかな…。

今私は、私服のワンピースを着ている。男の子に呼び出されるのなんて初めて…

と、霜月君がこちらに来た。少し驚いているようだ。

…ちょっと酷くないかな？

霜「悪い。待たせたか？」

簪「……ううん……今来たとこ」

霜月君も私服だ。やっぱりいいのかな？

霜「さて、行くか」

うん……と言おうとしたとき、

霜月君に手を握られ、抱き寄せられた。

簪「～～～！！／／／／／」
霜「すまない。こうしないと上手く転送できないんだ。少しの辛抱だ。我慢してくれ」
何か言ってるけど聞こえない。
うう～～…私今多分顔真っ赤だよ～～
霜月君、男の子なのに、いいにおい……
気がつくと、私は寝かされていた。ここはどこだろう？
霜「気がついたか？」
見ると、上から霜月君が私を見下ろしていた。
簪「……ここ…どこ…？」
霜「ここか？私の自宅だが」
簪「……／／／／／」
…どうしてこんな事になっているんだろう…？
霜「どうした？具合でも悪いのか？」
簪「…ううん…全然…」
霜「そうか。なら、そこのクローゼットにスーツがかかっている。それを着てくれ」

霜月君が指さすと、クローゼットが”自動で”開いた。

霜「私は隣の部屋にいる。着替えたら来てくれ」

そういうと、霜月君は隣の部屋に行ってしまった。

さっきからおかしいけど…ここ、どこ？

着替えた後、私は霜月君に連れられ、外に出た。そして私は目を丸くした。

未来都市

そんな表現がぴったりだった。

流石に車は飛んでないけど、明らかに地球の技術力を超えていた。

簪「……ねぇ霜月君……ここ…どこ？」

霜「うん？フォンブラウン社のある、月面都市フォン・ブラウンだが？」

簪「……へ？月面都市？」

ここ、月なの？

霜「こういう所は好きだろう？」

簪「…え？うん…でも…どうやって…」

あの短時間で月まで来る事なんて不可能だ…よね？

霜「来るときに君を抱きかかえただろう？」
簪「／／／／／…うん」
霜「その時に量子転換システムでここまで来た」
簪「量子転換システム？」
霜「つまり……

かくかくしかじか

と言う訳だ」

そんなおかしな話、信じられないけど、信じるしか無いみたい……

その後私達は電車みたいな乗り物に乗って、移動した。

霜「着いたぞ。ここが本社ビルだ」

何ともまた近未来的な……

霜「む、そういえば」
簪「…うん？…どうしたの…？」

霜月君は振り返って、私に

霜「忠告だ。私を好きになるな。碌な事にならない」

そう言った。

簪「……？それってどういう……」

霜「さて、入るか」

霜月君は踵を返してさっさと行ってしまった。

［一様にお客様。本日はどのようなご入り用でしょうか？］

霜「社長に会いに来た」

霜月君は、どこからか聞こえてきた声にそう返した。

［かしこまりました。では、転送します］

声が聞こえた後、私達はさっきとは違う場所にいた。

霜「この先が社長室だ」

簪「…今のも？」

霜「ああ。転換システムだ」

呆然としている私を軽く動かし、我に返してくれた。

霜「失礼する」

簪「…失礼します」

ロボット系のアニメでよく見る扉の先には、２０代の前半に見える男の人がいた。

ク「ご苦労、霜月。さて、ようこそフォンブラウン社へ、更識簪さん。私はクアトロ・ポイボス。当社の社長をやっている。宜しく」

簪「……更識簪です。…宜しくお願いします…」

クアトロさんは、椅子に深く座ると、溜め息を吐いた。

ク「早速だが、ここのことは口外してほしくない。守ってくれるとありがたいのだが、どうする？」
簪「…勿論、約束する」
ク「よろしい。では、後は霜月の指示に従ってくれ。霜月、いいな？」
霜「わかった」
ク「少し簪嬢と話がある。霜月、退室してくれ」
霜「？…わかった」

霜月君が出て行くと、クアトロさんは息を吐いた。

ク「簪さん。霜月の事、宜しく頼むぞ」
簪「…宜しくってどういう？」
ク「あいつは過去に苦い経験をしている。できれば彼の苦しみを解いてやってほしい」
簪「…わかった…でも、約束出来ない」

私がそう言うと、クアトロさんはクスクスと笑って、

ク「霜月の言っていた通りだ。確かに堅いな」

笑いながら私にそう言った。
その姿は、先程までの姿とは全然違って見えた。

ク「なに、君は奴の事が少し好きなのだろう？愛情を持って接してやれ」
簪「……わかった」

クアトロさんはまだ少し笑いながら、

ク「私の話は以上だ。この都市の施設は霜月と使ってくれると有り難いな」
簪「……わかりました。失礼しました」
そう言って私も退室した。

外で霜月君は待っていてくれて、私と一緒に歩き出した。
霜「ふむ。今から研究所に行くか？それとも、もう少し見ていくか？」
簪「……研究所に行きたい」
霜「わかった」

道中他愛もない話をしながら、またあの電車みたいな物に乗り、別の所へ来た。

霜「失礼する。翼はいるか？」
翼「こんにちは。霜月さん。と、そちらの方は？」
簪「…更識簪です。」
霜「昨日話しただろう。ＩＳを開発したいそうだ」
翼「ああ、その子か。僕は鈴峰翼だ。ここの研究所の所長をやっています。宜しくね」

霜月君より少し年上だろうか。翼さんはとてもここの所長には見えないほど若い。

翼「早速だけど、霜月君のＧビット計画でベースの機体が無いんだ。少し時間がかかっちゃうけど…」

霜「その事なら心配ない。大体今の地球の四世代程度で良いよな？」
簪「…え？四世代？」

私は驚いた。だって、今世界は三世代に尽力している。それなのに、霜月君は”地球の”四世代”程度”と言った。程度って……

翼「ああ、ならコア入れて一週間程度で出来ます」
霜「うむ。この位でいいか？……更識？」

この人達は……
確かコアって束博士しか作れないんじゃ無かったっけ？しかも一週間でベースが出来るなんて…

簪「…いいの？」
霜「む？どうしてだ？」
簪「…こんな機体貰っちゃって…」
翼「こんな機体も何も、プログラムを入れるのは君だって聞いてるよ？僕達は只君をサポートするだけだよ」
簪「……じゃあ…お願いします」
翼「オーライ。任されて」

翼さんは向こうに歩いていき、私の手を霜月君がとった。

霜「さて、時間があるな。私の家に行こう」
簪「／／／／／…わかった」

それからまた、私達は電車で移動して、霜月君の家に戻ってきて、ソファーに座った。

霜「さて、更識はここではゲストの立ち位置だから、当然家はない。

この家を使ってくれ」
簪「…え？霜月君の…？／／／」
霜「ああ。勿論配慮はする。風呂も2つ作るし、君が使う部屋には入らない。貸してるだけだからな」
どうしてだろう？少し悲しそうな顔になった。
簪「…ねぇ、過去に何があったの？…力になるよ？」
霜「……無理だ。これを知ったら君はもう戻れない」
簪「霜月君に悲しい顔をされるのは嫌だ。昔、何があったの？」
どうしてこんなに話せるのかわからない。でも、身体の中に熱いものがある…。
霜「そうか…悲しい顔を私はしていたのか……昔の話は出来ない。君をこれ以上巻き込む事は出来ない」
簪「そう……」
しばしの沈黙、破ったのは私だった。
簪「……私は……霜月君の事が……好き……だから、力になりたい……だめ？」
霜「……私を慕ってくれるのは嬉しい。しかし、私はこの世界に居てはいけない存在なんだ……だから……むぐっ！」
私は、霜月君の唇に私の唇を押し付け、次の言葉を遮った。
簪「いつもの霜月君じゃない。私が近づいているのにも気付かないし、男らしくない。会ってから少ししか経ってない私が言うのも変だけど、私は何時もの私を助けてくれた霜月君が好き。今の霜月君

は霜月君じゃない。」

キスをしたことが不思議と恥ずかしくない。何かの感情が私を支配している。

簪「お願い。いつもの霜月君でいて。私を助けてくれた優しい霜月君でいて」

霜「……いいのか？…後悔しないか？」

簪「したくないから言ってる。あなたが背負っているもの、教えて」

私は諭すように、静かにそう言った。

霜「……この事を話すのは君が初めてだ。全て話そう」

……霜月君の口から出たのは驚くべき事だった。

自分は転生した身で、この世界はお話であること、前世で味わった苦しみなどを教えてくれた。

霜月君の雰囲気からみて嘘はついていない。

本当なんだ……。

私は、途中から涙を流していた。悲しかった。ただ、彼が背負っていた物の重さが、悲しかった。

霜「……泣いてくれるのか。私の事で…」

簪「……だって…悲しすぎるよ…辛かったんだね…」

霜月君は、私を優しく抱き寄せた。愛しいものを抱くように、優し

く。

霜「……少し、疲れた…」

そう言って、私の肩が熱くなった。私は只、彼の頭を撫でていた。

……数分後

霜「君は……私を受け入れてくれるのか？」

簪「…勿論。君の存在意義は私があげる。私の事は簪って呼んで」

霜「簪……私の事は一でいい。…無口よりもそっちの方が可愛いぞ」

簪「…頑張る。返事は？」

私がそう言った瞬間、彼は私の頭を手で優しく包み、

霜「…勿論、いい。君の事が好きだ…簪……」

私と一は、ゆっくり、優しく、お互いを確かめるように、口付けをした……

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

１２話　ある少女、邂逅（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
恋愛って…難しい…。
ひとまずヒロインは簪になりました～。
隼人も誰かとくっつくよ。基本ハーレムにはしたくない。

１３話　「切り札は最後までとっておくものだ」（前書き）

更新しました！
前回が少しシリアス（？）だったので、今回はコメディに挑戦してみました。
ＰＶ２００００，ユニーク４０００突破しました。こんな作品を見て頂き、ありがとうございます。
では…どうぞ。

13話　「切り札は最後までとっておくものだ」

ｓｉｄｅ　筆者

おはこんばんちは。
前回、存在意義を見いだした主人公。

今回の舞台はＩＳ学園。何やら訳がありそうな二人が転入してきます。

はてさて、霜月はどういう風に彼女等に介入していくのか？

それでは！！ガンダ……

ｓｉｄｅ　霜月一

……おい！最後まで言わせろ！

最近無かったのだが…この違和感は何なのだろう？

簪のＩＳは今開発中である。そう言えば四世代ではいけなかったような気もするが、まぁ性能の良い方が良いだろう。うむ。

…時期的にそろそろあの二人が来る頃か。

山「今日は転校生を紹介します」

…ドンピシャではないか…

教室に入ってきたのは二人の女子…いや、一人は男装中だったな。

シ「シャルル・デュノアです。宜しくお願いします」

A「……男？」

シ「はい。ここに僕と同じ境遇の方が三人居ると聴いて…」

久々に耳栓の出番だな。

隼人に目配せし、自身も耳栓をつける。この間わずか一秒。

キャーーーー！！！！！！

…ビリビリビリ…

上から悲鳴（最早音響兵器）、窓ガラスが震える音である。

冬「静かにしろ。まだ全員終わっていない」

見ると、さっきの音響兵器でふらふらしている女子が一人。流石の大佐さんでも耐えられなかったか。

冬「ボーデヴィッヒ。挨拶をしろ」

ラ「……」

冬「ボーデヴィッヒ！」

ラ「…は、はい！教官！」

ラウラは改めてこちらに向き直った。

ラ「ラウラ・ボーデウィッヒだ」
山「……ええと…以上ですか？」
ラ「以上だ」

何という素っ気なさ。この頃はただの問題児か。

ラウラは、一夏の前に来ると、手を振るった。

まぁわかっていた隣の席の私は、机の上にあった本で受け止めた。

霜「初日から問題を起こすなよ」
ラ「……貴様…！」

ラウラは殺気を放ったが、痛くも痒くもない。当たり前だが。

冬「何をしている。さっさと席に着け」
ラ「…チッ」

愛しの教官を前にして何て悪い態度なんだろう。

……それこそどうでもいいか。

冬「次の授業は校庭で行う。織斑、霜月、枢木、デュノアの面倒を見ろ」

織斑先生は出て行き、シャルルがこちらにきた。

シ「君達が織斑一夏君と霜月一君と枢木隼人君だね？僕は……」

夏「紹介は後でいい。急ぐぞ！」

そう言うと一夏はシャルルの手を引いて走り出した。シャルルの頬が少し朱に染まっている。隠せよ。

今、私達は廊下を疾走…するわけにはいかないので早歩きでアリーナへ向かっていた。

女A「あ！織斑君発見！」
女B「しかも転校生に霜月君、枢木君も一緒だ！」
女C「皆のもの！出会え！出会えー！」

モブ女子達が現れた！

夏「くっ…逃げるぞ！」
隼「言われなくても！」

一夏達は逃げ出した！

隼「一夏！足遅い！」
女D「こっちにも居る！」
女E「こっから先は一方通行だぜェェ！」

しかし、回り込まれた！てか自重しろE！

霜「ふっ…切り札は最後までとっておくものだ」
夏「何か策があるのか？」
霜「ああ。食らえ！必殺！一夏ミサイル！」
夏「は？ってうぉあ！」

霜月は一夏の背中を蹴った！
一夏は女子達に突っ込んでいった！
一夏は息絶えた…
霜月達は逃げ出した！

霜「一夏。君の犠牲、無駄にはしない」
夏「覚えてろよー！」

こうして私達は戦線を離脱した。

更衣室にて

霜「さて、一夏も居なくなった事だ。本題に入ろう」

今は着替え終わっていて、犠牲のおかげでまだ余裕もある。

シ「？あ、自己紹介の事か。僕はシャルル・デュノア。シャルルでいいよ。宜しくね」
隼「枢木隼人。隼人でいいよ。宜しくね」
霜「霜月一だ。事情は知っているから聴かんが、挙動で女子だとすぐにわかるぞ、シャルロット・デュノア」

私がそういうと、隼人は呆れたような顔になり、シャルルは心底驚いている。

隼「なんで言うのかな…僕は黙ってたのに…」
霜「黙ってれば良いという話でも無いだろう」
シ「あの～…二人とも、何の話をしているの？」
隼「シャルルもシャルルだ。そんな明らかに挙動不審にしてたらハ

イそうですと言っているようなもんじゃないか」
霜「おしゃべりはここまでのようだな。急がないと手痛い裁きがくるぞ？」

そう言うと、私は駆け出した。

隼「あ、ちょっと！待ってよ～！」

隼人もそれにつれて走ってきた。シャルルはまだ後ろでブツブツ言っているな……分かり易い奴だ。

結果

私と隼人は余裕で間に合った。

シャルルはギリギリセーフだったが、一夏は完全に遅刻した。そして、一夏を狙う者達（これから一夏ハンターズと呼ぼう）の中の二人、鈴とセシリアは織斑先生に手痛い裁きを食らった。

冬「本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する。今日は戦闘を実演してもらう。鳳！オルコット！」

織斑先生に指名され、鈴とセシリアは渋々前に出た。

鈴「…一夏のせい一夏のせい一夏のせい…」
セシリア「…一夏さんのせい一夏さんのせい一夏さんのせい…」
冬「…お前ら少しはやる気を出せ。あいつに良いとこを見せられるぞ？」

瞬間、両者の目が光ったかと思うと、１８０度態度を変えた。

鈴「ここは中国代表候補生である鳳鈴音の出番よね！」

ああ、そんな名前だったか。

セ「ここはイギリス代表候補生の私の出番ですわ！」

鈴「で、誰と戦えばいいの？セシリアでもいいのよ？」

冬「慌てるな。お前たちの相手は……」

と、そこまで言った時、

山「ど、退いてください～！」

上空から山田先生が落ちてきた。それは真っ直ぐ一夏の元へ。

夏「え？うわわわっ！！！！」

―どんがらがっしゃーん！！

…この擬音を考えた人は凄いと思う。

……閑話休題

一夏は落ちてきた山田先生に巻き込まれ、特殊能力（ラッキースケベ）を発動した。

一夏の右手が、見事に山田先生の山の片方を握…もとい掴んでいた。

山「あのう…／／／／／織斑君…握りたいなら良いですけど、白昼

堂々やるのは…」
夏「うーん…てうぉあ！！」

一夏は即座に飛び起きた。瞬間、一夏の頭があった所に光が通り過ぎた。

セ「あらあら、外してしまいました…次は！！」
鈴「死ねーー！！」

セシリアから狙われ、鈴に双天牙月を投げられた。さらば一夏。お前のことは忘れない。（棒読み）

その時、山田先生が双天牙月を弾き、それでセシリアのビームを防いだ。普段の山田先生の姿はどこにもなく、一夏に突っ込んで壁に激突したとは思えない姿がそこにはあった。

織斑先生の話によると、山田先生は元代表候補生らしい。知っているが。
ちなみに山田先生もいつもの状態に戻っている。

冬「では、鳳とオルコットには山田先生と模擬戦闘をしてもらう」
鈴「え？２対１で？」
セ「大丈夫ですの？」
冬「安心しろ。お前たちならすぐに負ける」

その言葉にカッときたのか、鈴とセシリアはすぐに戦闘態勢に入った。

冬「では、始め！」

結果は山田先生の圧勝だった。
鈴とセシリアは互いの動きを考えずにただひたすら攻撃していただけなので、たいして攻撃も当てられず落とされた。

冬「これで学園教師の力は分かっただろう。以後は敬意をもって接するように！」

一瞬私と隼人の方を見たが、どうやら止めたらしい。まぁしょうがないか、時間もないし。

冬「専用機持ちは……織斑、オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィッヒ、霜月、枢木だな。では五人グループになって実習を行う。織斑、霜月、枢木のグループは六人でいいだろう。各グループリーダーは専用機持ちがやること。では分かれろ」

シャルルの所だけ六人ではないのか…人数的な問題はあるが、やはり織斑先生も気付いている？

……まぁ分かっていた結果だが……
大半が織斑の所へ行き、シャルルの所にも数多く、男の中では（一部例外を含む）私が一番少ないが、それでも六人以上はいる。はぁ…

冬「馬鹿者どもが…。出席番号順に各一人ずつグループに入れ！順番はさっき言ったとおりだ！次もたつくようならグラウンド百周させるぞ！」

それはまるで蜘蛛の子を散らすように、わずか数秒で整列が完了した。

ま、後は教えたり乗せたり一夏が馬鹿やったり、そんな感じだ。

昼休み

私は簪と屋上で昼食を食べていた。

あちらでは一夏とハンターズが昼食を食べている。騒々しいが気にしない。

流石に公衆の面前であり姉こと更識楯無が物陰から見ているので、至って普通に食べている。ちなみに弁当は私が作った。

簪「…うん。おいしいね」

霜「そうか。ありがとう」

未だ簪は無口のままである。普通に話している時の方が筆者としても書きやす……何を言っているのだ?私は?

霜「今日はどうする?プログラムを組み立てるのか?」

簪「…うん。もうすぐ終わりそう」

霜「そうか。なら後は向こうで組み立てるだけだな。間に合ってよかった」

ちなみに簪は今度の個人戦こと学年別トーナメントはペアになることを知っている。…なに?前に個人戦と言っていた?そんな細かいところまで覚えているわけがなかろう。

簪「…あのね？一…感謝してる。ありがとう」
霜「それは完成した後に言う言葉ではないのか？」
簪「…一のおかげでとても早く完成した…。それが嬉しいの」
霜「…そうか。行事に参加できないかも知れなかったのだな？」
簪「…うん」
霜「私だって、簪が私の存在意義をくれたことにこれ以上無いほど感謝している」
簪「…たいしたこと、ない」
霜「私にとってはたいしたことだということだ。ありがとう。簪」
簪「…うん」

こうして昼休みは過ぎて行った。向こうで修羅場が発生していたが、それこそたいしたことでは無いだろう。

ｓｉｄｅ　更識楯無

最近簪ちゃんが妙に明るくなったと思ったら、よく1組の霜月という男子と一緒に居るところを見る。（というか、つけている）
簪ちゃんに彼氏ができたのは喜ばしいけど…なんだかな～

隼「嫉妬でも抱いているんですか？会長」

突如後ろから声をかけられ、後ろを振り返った。そこには、おなじく1組の男子、枢木君がいた。

隼「そんな化け物でも見たような目で見ないで下さいよ…傷つくなぁ…」
楯「ああ、ごめん。何か用かな？」

そりゃ私の後ろをとったら驚く。更識家の17代目『楯無』なんだから、ただものではない。

霜月一と枢木隼人、それにフォンブラウン社…。更識家の力をもってしても全くその存在が分からない…

隼「用って…物陰からものすごい嫉妬の炎を出してりゃ声をかけたくもなりますよ…って、聞いてます?」

彼ら、そしてフォンブラウン社というのはなんなのだろう?

隼「聞いてますかー?かいちょー?」

隼人は、楯無の耳元で優しく息を吹きかけるようにそう呟いた。

楯「ひゃん!…もう、からかうとお姉さん怒っちゃうぞ?」

考えに集中しすぎていた?何も気配を感じなかった…

隼「だからー。霜月君に嫉妬抱いてるせいで僕を監視する回数が減ってきてるじゃないですか。おっと、そんなことじゃなかった。物陰からどす黒いオーラ出してたら怖いですよ?会長」

楯「……気付いてたの?」

隼「そりゃあんなオーラ…ってそっちじゃないか。確かに気配の消し方は上手ですけど、まだ駄々漏れでしたよ?霜月君だって気付いてましたし」

楯「…ねぇ、あなたたち一体何者?」

隼「何者って…僕はＩＳを操縦できる三人目の男性に不幸にも選ばれたかわいそうな男子高校生ですけど?」

楯「……そう…わかったわ。変な事聞いてごめんなさい」

隼「いえいえ、気にしてませんよ」

そうして枢木君は私と擦れ違い、

隼「…いずれわかりますから」

私の耳元でそう呟いた。

楯「どういうこと!?」

振り返ると、彼はそこにはいなかった。

…さらに興味出てきちゃったかも。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

様々な思いが交錯しあった昼休み。

物語は、すでに別の方向へ動き出している…のかもしれない。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

13話　「切り札は最後までとっておくものだ」（後書き）

次回で学年別トーナメントに入りたいな…
つくづく作家やマンガ家など、話を考える方々が凄いと感じる筆者でした…。

１４話　「リミッター、解除！」（前書き）

遅くなりました…
今回も学年別トーナメント前の話です。
では…どうぞ。

14話　「リミッター、解除！」

ｓｉｄｅ　霜月一

――ある日の夜

今日は向こうでやることも特にないので、寮の自室で隼人と他愛のない会話をしていた。

今隣の部屋は一夏とシャルルが同室である。そろそろバレるだろうか？

隼「霜月君？」

霜「…ああ、済まない。学年別トーナメントの事だな。言った通り今回は特に何もないだろう。多分私と隼人は一回戦で当たるからな」

隼「はぁ…ニュータイプってのは便利だねぇ…」

霜「いや、純粋なニュータイプではないから何とも言えんのだが…」

実際この微予知能力は怪しい物だからな。

隼「やっぱりペアはランダムかな～。霜月君は更識さんと組むんでしょ？」霜「ああ。そうなるな。だが、私と隼人が当たるならペアなど関係無かろう」

隼「……本気でやる？」

隼人は怪しい笑みを浮かべた。

霜「…ああ、単一能力か。…やってみるか？」

私も同様に笑みを浮かべた。

隼「……はぁ～…。やるならあらかじめ先生に言っとかないとね～」

さっきまでの笑みを解き、ベッドに倒れながらそう言った。

外に出ると、一夏がいかにも何かあります的な感じで自室に入って行った。今日だったのか。さて、

霜「一夏。シャルルに用がある。入れろ」

夏「え…あ～…今は…ダメ」

霜「シャルルの事は知っている。隼人もつれてくるが良いか？」

夏「……ああ。変な事するなよ？」

霜「…よもや君に言われようとはな…」

出入り口で頭に？を浮かべている危険分子を無視し、隼人を呼んできた。

一夏の部屋に入ると、シャルルは驚いたような顔をした。

霜「さて…。シャルロットと呼んだ方が良いかな？」

シ「ううん。シャルルでいいよ。…ねぇ？どうして知ってるの？」

隼「うーん…。シャルルの挙動が明らかに女子で、デュノア社を調べたらシャルルという名前は無くて、変わりに本妻の子でないシャルロット・デュノアっていうシャルルにそっくりな女の子がいたってことでいい？」

少し考えるような仕草をした後、すらすらとそう答える隼人。上出来だ。

シ「殆ど知ってるじゃん…。僕がここに来たのは「大方社長である父親に命じられて私達の機体のデータでも取りに来たんだろ？」…うん」

私がすかさず言葉を被せると、視線を下に落としてしまった。やりすぎたか？

霜「で、ばれたので本国に呼び戻されるかと思ったが、学園の特記事項第二一により、少なくとも三年間は大丈夫と。合ってるか？」

夏「さっきまでの話聞いてたのか？」

霜「どこで聞けと？」

夏「あ…いや…その～…」

一夏、再起動&再停止

隼「でね、シャルルはうちの会社に引き入れます。うれしい？」

シ「……へ？」

隼「君はフォンブラウン社のＩＳ部に転属です。もう話ついてるから本人の了承次第だけど」

シャルルはあんぐりとしていた。あれがギャグ絵か。

シ「どうやったの？」

霜「なに。只我が社の旧式ビット兵器の設計図の譲渡を条件にしたら二つ返事だったぞ？」

隼「あ、イギリスのブルーティアーズみたいな粗悪品じゃ無いからね？」

シ「粗悪品て……。いいの？」

霜「話はついていると言っている。君次第だ」

シャルルは少し考えているらしい。つまりまだ混乱しているという訳だ。

シ「じゃあ…お願いします」
隼「うん。じゃ社長にもそう言っとくよ」

私は少し考え、

霜「私達はお邪魔虫のようだな。一夏とシャルルの愛の巣にいつまでも居るわけにはいかないだろう」
そう言った瞬間、
シ「ふぇっ!?」
ボンッ!!

シャルルは一瞬で真っ赤になった。因みに一夏が停止しているから言えるのだ。
隼「一夏はきついよ?ライバルは多いし、本人は超鈍感だし」
霜「夕飯を口移しで食べさせて貰えばいいのではないか?」
シ「はふ〜〜……」

シャルルは頭から湯気を出している。心ここにあらずのようだ。

霜、隼「「ではでは、ごゆっくり（〜）」」

停止している一夏、ショートしているシャルル。二人を残して私達は退散した。

自室に帰ってくると、

楯「あ、お帰りなさい。ご飯にする？お風呂にする？それとも、わ・た・し？」

現生徒会長、更識楯無がいた。……はぁ…。何でここに…

隼「うーん…じゃあ会長をいただく方向で」

そう言うなり隼人はチートを使い有り得ない速さで楯無の背後に回り込んで、

楯「ひゃん！！／／／／／」

楯無の耳をハミハミした。力が抜けたのか、その場にへたり込んでしまった。何をしているんだお前は？

隼「やっぱりかいちょーって耳弱いんだ～。」

楯「あなたね／／／…ひゃん！！」

また耳をハミハミした。もう止めてやれ。おそらくライフは０だぞ？

隼「今度権限使って入ってきたらペロペロしますからね？止めて下さいよ？」

楯「……あなたには負けたわ…」

そう言いでてこうとする楯無だったが、

霜「会長。部屋に付けてった１２個の盗聴器外してって下さいね？」

こんなになってもまだ探ろうとする精神に脱帽である。

ｓｉｄｅ　更識楯無

……もう！あの二人は何なの！？

ちっとも分からないし、私を手玉にとる男の子なんて初めて…／／／／／

…はっ！何を考えているのよ更識楯無！

更識の名にかけて必ず真実を解き明かしてやる！

……気持ちよかった／／／／／

ｓｉｄｅ　更識簪

今日は休日。一と一緒に完成したＩＳを見に行く事になっていて、今は一の家で朝食を食べている。

簪「…一。どうしたの…？」

霜「ん。いや、君の姉君が隼人にからかわれてたのを思い出してな」

簪「…お姉ちゃんが…？」

そんな…。お姉ちゃんが手玉にとられるなんて…

霜「ああ、耳にちょっかいを出していて見事撃退していたな」

簪「…なにそれ…／／／／／凄い…／／／」

私の顔も赤くなっていく。多分そうなっているだろう。

霜「なぁ簪。私達は健全な付き合いをしているよな…？」
簪「…他人と比べたこと無いから分からない…」
霜「…そうだな」
なんて他愛のない話をしていた。

一一一数時間後　第二区　研究所

私の機体は、昨日渡したプログラムを組み込み調整してから後付武装を装備させてもらった。
もう完成している筈だけど…

霜「翼、私だ。簪の機体を取りに来たのだが」
翼「わかりました～。少し待ってて下さい」

…まだここのシステムには慣れてない。当たり前かな？

しばらくすると、翼さんが床からエレベーターみたいなもので上がってきた。

翼「お待たせしました。まずは簪さん。」もう完成している筈だけど…

霜「翼、私だ。簪の機体を取りに来たのだが」
翼「わかりました～。少し待ってて下さい」

…まだここのシステムには慣れてない。当たり前かな？

しばらくすると、翼さんが床からエレベーターみたいなもので上がってきた。

翼「お待たせしました。まずは簪さん。この指輪が簪さんのＩＳ『斬鉄』です。起動テストはアリーナでおねがいします。多分一次移行はすぐに終わります。」

翼さんから綺麗なクリスタルの指輪を渡された。いつか一からも指輪を…／／／／／

霜「なぜ赤くなっている？」
簪「ふぇ！？何でもないよ！？」
霜「そうか…？」

ううう…恥ずかしい…。

翼「霜月さんにはこっち。エネルギー充填率の向上と、Ｇビットをつけておきました。」

翼さんは、一に金色のペアイヤリングを渡した。

霜「ありがとう。第５アリーナで稼働実験をする。データを頼むぞ」
翼「わかりました」
霜「さて…行くぞ、簪」

私の手を握って一が言った。

簪「一…。手…／／／」
霜「…同じ家で生活しているのに恥ずかしいのか？」

簪「…うーん……」

そう言われると何とも言えない…。

ふと気になったので、一にどうして電車しか無いの?と聞いたら、社長のこだわりらしい。と答えた。

転送したりした方が格好いいのに…

――第5アリーナ

霜「一次移行は終わったな?これよりISの稼働実験を開始する。簪、システムボードは画面に表示されているはずだ」

簪「…うん…。わかった」

霜「そうか。では、初めて良いぞ」

side out

開始と同時に簪はダミーをだす。

このダミーは弱いのでも二世代IS級、強いのは四世代IS級らしい。今世界は三世代の試作機を作っているのだが、ここはもう四世代の量産機まで開発できている。簪が使っている斬鉄も、その量産型をベースとして作られているが、運動性はこの後出てくる篠ノ之箒専用IS『紅椿』に少し劣るぐらいである。

出した二世代IS級を近接武装『斬鉄』で”真っ二つ”にした。

この武装は、この機体唯一の基本装備の薙刀である。
そのままでもＩＳの装甲を破壊できる威力があるが、刃の部分にビームを纏うことにより先ほどのような威力を出す。

続いて背中に展開された『春雷』から収束表示がダミーに向けて発射される。

春雷は、束製ＩＳ『ゴーレム』のビームを参考にした大型ビーム砲である。

集束と発散の両方で撃つことができ、高出力の上チャージは無いに等しい。

一通り撃った後、本命の山嵐をダミー１０機に向けて一斉に放った。

山嵐は、マルチロックオンシステムを搭載した１０門×１０発、計１００発のミサイルを同時に１０機までロックオン、発射する武装である。

直撃すれば三世代ＩＳのシールドエネルギーを０にする事ができるが、ほとんどが迎撃されてしまうので弾幕の意味合いが強い。

簪「…うん？まだ武装がある…」

簪が頼んだ武装以外に、有線式遠隔操作武器『インコム』が装備されていた。

インコムは、フォンブラウン社開発部が試験的に開発した簡易遠隔操作武装で、ビットには劣るが高い操作性と威力。高い空間認識力を必要としない汎用的な武器である。

簪「…性能高すぎ…。凄すぎる…」

一通りの武器を試し、ピットに戻った簪がそう呟いた。

霜「しかし我が社の中では量産型を強化した部類にすぎないのだが。特にインコムは試験武装だ。どのような効果を発揮するかはわからない」

簪「でも…。この展開装甲って言うものの性能もいいし…燃費がいい上に威力も高いし…。」

霜「それは汎用性の高い量産機をカスタムした機体だからな。燃費が良いに越した事はない。さて…次は私が行くか」

簪はＩＳを解除、霜月は展開して、アリーナに入った。

翼「今回はトリプルメガソニック砲のチャージ時間を２０％短縮、試作機のＧビットを６機追加しました」

霜「わかった。ありがとう」

霜月は、左右に3機ずつＧビットを展開した。

性能は四世代量産型とほぼ変わらなく、操作もアローケルと同じである。

主な武装はビームライフルとビームサーベル、威力大幅低下の代わりにチャージ時間をクローケルの四分の一以下にした簡易サテライトキャノンである。

簡易式と言っても直撃すれば絶対防御を易々貫く事が出来る。

霜「ふむ、運動性は悪くないな。地球での戦闘データもとっておこう」翼「ありがとうございます。ビット兵器は稼働データが命なの

で…」

霜「わかっている。Gビット計画の為にも頑張るさ。さて…こちらもやっておくか」

霜月は、ダミーを大量に出現させた。その数四世代５０機。

霜「気は乗らんが…。リミッター、解除！」

《単一能力　リミッター解除》

リミッター解除

クローケルにかけられた安全装置を全て解除し、本来の姿を取り戻す能力である。が、搭乗者の事を考えられていないこのシステムは、常人ならショック死、霜月でも５分程しか保たない。

フェイスマスクの目の部分が赤くなり、右肩から真っ黒な片翼がでてくる。これの羽はビットであり、計１３枚ある。

霜「敵ノ破壊ヲ最優先トスル……」

そして、アローケルに６機のGビット、１３枚のウイングビットにクローケルが正宗装備で突撃した。

……

……

ものの三分でダミーは殲滅され、クローケルも元に戻った。

霜「はぁっ……はぁっ……。ビット操作には、問題、無いか…。」

翼「お疲れ様です。データ収集終わりました」

霜月は、ふらふらとピットに戻った。

簪「一！」

霜「大丈夫だ…。少し休ませてくれ…。」

簪「わかった。お休み」

霜「……やはり…その話し方の…方が……か……わ……い……」

霜月の意識は、落ちた。

いよいよ学年別トーナメントが始まる。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

１４話　「リミッター、解除！」（後書き）

時間がない……

次回は学年別トーナメント

15話　「待ち遠しかったな」（前書き）

更新しました！

勉強が忙しい…（泣）

今回は少しキャラ崩壊が入って…今に始まった話ではない？そうですね…

では…どうぞ。

１５話　「待ち遠しかったな」

ｓｉｄｅ　霜月一

予想していた事だが、学年別トーナメントでは私達の番は回ってこなかった。

順を追っていくと、鈴とセシリアはラウラにボコボコにされて不参加。

一夏はシャルルと組み、私は簪と組んだ。隼人はランダムである。

かなり女子が集まっていたのだが…

当日は一夏＆シャルルペアが、ラウラ＆箒ペアと当たった。

私達は偶然にも隼人達のペアと当たった。…もしかしたら偶然ではないかもしれないが…

後は原作通り、ラウラがＶＴシステムを発動し一夏に倒された。詳しくは原作で。

よってトーナメント及びその日の試合は中止、一回戦までは後日行う事になった。

クラスの女子が嘆いていたが、恐らく一夏と隼人の交際権でも賭けていたのだろう。私は対象外であって欲しい。私には簪が居るのだから断じてお断りである。

一夏はいつも通りラウラにフラグを建て、箒√をへし折った。流石と言えよう。

後日の朝、シャルルが女と言うことをばらし、ラウラが一夏嫁宣言をし、クラスに真っ赤な薔薇が舞った。一夏の生命力には感心する。

そして更に後日。

遂に私達対隼人達の試合が行われた。

霜「フフフ…。待ち遠しかったな」

簪「…一…怖い…」

霜「む。失礼した」

今私と簪はピットにいる。一応作戦立てと、これからする事を教えている。

霜「まず、開始と同時に一般生のラファールを落としてくれ。その性能なら直ぐに落とせるだろう」

簪「…うん…わかった」

霜「撃破後、直ぐに後退してくれ。巻き込むわけにはいかない」

私の指示に簪は無言で頷いた。これで確認事項は大丈夫か。

霜「では、行くか」

私は射出台の上に乗った。

霜「霜月、クローケル、出る！」

どうやら向こうも同じタイミングだったようだ。私と隼人は暫く飛んだ後、降り立った。

霜〔あのシステムを使うには周りに気をつけろよ〕

隼〔わかってるって〕

互いにプライベートチャンネルで短く会話をした。その間に簪と女生徒Ａは降りてきたようだ。

山「それでは、初めて下さい！」

山田先生の合図、開始のブザーと共に、簪の斬鉄から山嵐を半数射出、ラファールのシールドエネルギーを０にした。その後簪は後退、ここまで手はず通りだな。

霜「山田先生！私か隼人のシールドエネルギーが０になった時点で即刻試合を止めて下さい！勝者は残った方でいいので！お願いします！」

私はオープンチャンネルで叫んだ。恐らく聞こえているだろう。

霜〔待たせたな。始めるか〕

隼〔ああ。俺とお前の演舞をな！〕

霜「いくぞ。リミッター、解除！」

《単一能力　リミッター解除》

隼「いくぜ！バーサーカーシステム発動！」

《単一能力　バーサーカーシステム》

バーサーカーシステム

ランスロット・トリトンの単一能力。

防御をかなぐり捨て、攻撃に徹する能力である。
機体の運動性及び武装の破壊力が上昇するが、防御力は半分以下になる。

また、操縦者の精神に直接働きかける事により、操縦者の身体能力が大幅に上昇する。

しかし、クローケルのリミッター解除と同じく操縦者の安全を考えていないシステムなので、五分が限界である。

隼人の攻撃と相性がよく、システムの効果は十二分に発揮されている。

霜「敵ノ破壊ヲ最優先トスル……」
隼「ははは！おい！俺と戦えよ！殺り合おうぜ！俺と戦えよ！！！」

クローケルのモノアイ部分が真っ赤になり、真っ黒な片翼が生え、左右三機ずつＧビットが、前方にアローケルが、上空に１３枚のウイングビットが現れた。

対するランスロットは、その白い機体から真っ赤に染まり、トライデントのビームも赤みを帯びている。

そして、両者はぶつかった……

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

セシリアは考えていた。

セ（そんな！あの数のビットをあの動きで動かしつつ自身もあんなに早く動くなんて！）

因みにセシリアの言っているビットはウイングビットの事で、Ｇビットやアローケルは数に入っていない。あれをビットとは思っていないからだ。

アリーナの管制室で千冬は考えていた。

千（あの動き…。霜月の周りのＩＳはＢＴ兵器か…？だとしたらとんでもない並行処理能力だな…。だが、隼人もあの数を強引ではあるが凌ぎ、かつ攻撃もしている。あの二機にあの二人…やはり…）

冷静を装っている千冬だが、内心は驚愕に満ちている。現に隣の真耶は少し涙目になっている。

千（終わったらまた呼び出さなくてはいけないな）

今はまだ試合の行く末を見守るだけである。

現在量の差も有ってか霜月が押しているが、既にＧビットは全機撃墜されて量子化されている。ウイングビットも殆ど残っていない。

霜「……」

隼「もっとだ！もっと戦えよ！」

今三分が経過したところである。両者のシールドエネルギーは残り二百を切っている。

動き出したのは霜月であった。

ウイングビットを全機収納し、正宗を取り出し、連撃を始めた。

最初こそ隼人は受け止めていたが、次第に激しい斬り合い突き合いになった。

次の瞬間、背後に回っていたアローケルがランスロットの両腕を掴み、動きを封じた。

霜「……破壊……」

霜月はそのまま腹部を展開、３０％の出力でトリプルメガソニック砲を打ち込んだ。

隼人も抵抗し、背中のエナジーウイングでアローケルを破壊、離脱するも足が巻き込まれ、大幅にシールドエネルギーが減少した。

霜「……破壊……」

《八刀一閃》

息をつく間もなくランスロットに強力な連撃が襲いかかり、ランスロットのシールドエネルギーは０になった。が、霜月は攻撃を止めず、なお攻撃を加えようとしていた。

千「そこまで！勝者霜月＆簪ペア！攻撃を止めろ！」

アリーナ中に千冬の声が響いた。

クローケルとランスロットが徐々に元に戻っていき、二人とも自意識を取り戻した。

霜「……終わったのか。私の、勝ち、だったよう、だな…」

隼「……ああ。負けだ。疲れたな…」

隼人はピットに、霜月も簪と共にピットへ戻った。

かくして、実質霜月対隼人の戦いは、またも霜月の勝ちで終わった。

ｓｉｄｅ　霜月一

試合終了から数時間後

千「さて、お前たちに聞きたい事がある」

この構図、デジャヴだな。

霜「何でしょうか？」

千「単刀直入に聞く。お前たちは先の白騎士事件で現れた二機のパイロットか？」

隼「はい」

織斑先生から問われたのは予想していた事だったが、隼人も即答し

すぎではないか？

千「む……」

ほら見ろ。若干困っているではないか。

千「何故あの時現れた？」

霜「社長に指示されたミッションだったので、ミサイルを全て落としました」

こうなっては私も答えるしかないな。まぁ答えるつもりだったが。

千「何故？」

隼「先生もわかりませんね。あんな性能の低い束博士産の初期型じゃ全部落とせなかったでしょう？僕達はミサイルを全て破壊し落下予想地点を守ったんですよ」

隼人、言い過ぎだ。

千「お前たちのＩＳも当時は初期型では無いのか？それ以前になんでＩＳを持っていた？」

隼「僕達の今の機体はあの時と変わってませんよ？移行はしましたが」

霜「偶然我々フォンブラウン社の作っていた兵器がＩＳと一致したんです。我が社ももうすぐ動き出しますが」

こうでもフォローを入れておかないと危ないかもしれない。

……お前の発言もあぶねぇよ！ｂｙ筆者

久方ぶりの電波か…。無くなったかと思ったが…

千「……そうか。もういい。聞きたい事は終わった」
霜「わかりました。では」
隼「失礼しました」

私と隼人は、そう言って個室を後にした。
織斑先生はまだ何か言っていたが、まぁいいだろう。

かくして、学年別トーナメントの一連の騒動は終わりを迎えた。

ｓｉｄｅ　篠ノ之束

――少し時間を遡って

さてさて、ドイツの研究所を壊しに来た私だけど…。
あ、ＩＳ学園でＶＴシステムが発見されたから壊しに来たんだよ～。

うん。おかしいね。
もう研究所は跡形もなかったんだ。全員無事だったけど。

ふむふむ、誰かがＩＳで壊しに来たのかな～っと思って、意味ありげに残っていた監視カメラを解析ちゅー。束さんこんな事出来るなんて凄い。

そこに写っていたのは、

”生身”で研究所を壊している少年…いや青年かな?がいた。
おかしいのは、その人の体から雷とか炎とかが出てたこと。
そして、その人はカメラに向かって言った。
?「さて、コレを見てるって事は束博士かァ?」
虚空に向かって話しかけるその人は端から見ればおかしな人だろう。
だけど、それはこのカメラが全て意図的に残された物っていうことだよね。
?「わざわざご苦労だったなァ?ここは俺が潰しといてやったぜェ?」
まだ潰れていない時に撮っているのにこんな事言ってる…。
?「まァ?ご苦労さんてことで名乗ってやるよ。それが目的だからなァ」
…結構高圧的な態度でムカつくね。まぁ、我慢我慢。
?「俺はフォンブラウン社副社長の
進藤真人だ。
じゃな。Ｇｏｏｄ－ｂｙｅ」
そこで彼は”消えた”。

……何者？

その場から離れて暫くたった頃、私の携帯からゴッド・ファーザーのテーマが流れた。

この状況、どうやってちーちゃんに説明しよう…。

束「も、もすもす？終日？」

「……」

ぶつっ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

15話　「待ち遠しかったな」（後書き）

新キャラはこの後も多く出す予定。
遂にフォンブラウン社が動き出します？

１６話　「束の間の平和だがな」（前書き）

まずはお詫びを。

すいませんでした。
私事からちょっと書けない状況になってしまっていたのです。今回もかなり短めです。

なかなか投稿出来なかったこと、誠に申し訳ありませんでした。

多分今月中はこれが最後だと思います。

一言
テストなんてだいっきらいだ。

では、どうぞ。

16話　「束の間の平和だがな」

ｓｉｄｅ　霜月一

ＩＳ学園といっても普通教科もちゃんとある。やはりシステムは普通の高校と同じだが、この学園はエリート揃い。テストなどなんてことのないものであり、水準はとても高い。

しかし二名、ほぼ強制的に入れられた者達を除くことを追記しておこう。私は大丈夫だが。

隼「なんで日本人なのに英語をやんなきゃいけないんだろう…。ＩＳの普及によって共通語はほぼ日本語になりつつあるのに…」

一「隼人なんてまだいいじゃないか…。俺なんて何一つわからねぇよ…」

現実は優しくはない。女子の中に放り込まれ周りの男子から羨望の眼差しを向けられている一夏だが、実際はとても肩身の狭い思いをしている。また、学力の差、社会から狙われたりとろくなことがない。と、持論はここまでにしておこう。

そのテストが終了した後、１年生が楽しみにしているであろう行事がある。

臨海学校

その名の通り海に2泊3日でＩＳの訓練を主として行う行事だ。

だが、これはあくまでも建て前に過ぎず、旅行の意味合いが大きい。

１日目のみ自由行動で、２日目から訓練に入る。このスケジュール

で旅行と言えるのだから流石ＩＳ学園といえよう。

…今年は我々男子もいるが、女子が殺気立っているのは気のせいであると追記しておこう。そうに決まっている。そう願いたい。はぁ…。

今私は簪とともにフォンブラウン第五区の服屋に来ている。洋服などの区切りがないため、下着から宇宙服まで何でも揃っている。

ちなみに地球のほうで買わなかったのは一夏＆一夏ハンターズ及び教師陣（織斑先生と山田先生。詳しくは原作で）に遭遇したくないというのが私の意見で、簪は恥ずかしいらしい。では私はどうすればいいのだろう？

簪「…広い…」

霜「この都市に服屋は一つしかないからな。これだけ大きくなるのも仕方ないだろう」

何せこの都市の店は、東京ドームという建造物と比べると軽く数個分らしい。（社長談）なぜそんなに広いのか、どうせ浪漫だのどうだのと言うに違いない。

ジャンル毎に階層で区切られており、ナビで場所を確認出来る。子供は間違いなく迷子になるだろう。

はっきりと言おう。不便である。

まぁ私達のように直接出向くパターンはごくまれなので何とも言えない。

閑話休題

ひとまず私達は水着コーナーへ向かった。
私の水着など適当に買えばいいし実際そうしたが、問題は簪の水着である。

簪「……ねぇ…一…。これ…どうかな？」

などと簪は頬を朱に染め、両手を胸のあたりでモジモジさせながら若干上目遣いでこちらを見てくる。さながら小動物のようである。

霜「…私に意見を求めるのはどうかと思うぞ？」
簪「…いいの…。一は私の彼氏だから」
霜「…彼氏だから彼女の水着を決めさせられるのか？」
簪「……」
霜「……」
実際わかったものではない。私にこんな経験はないし、筆者も……
うん？何を言っているんだ、私は？

まぁいい。ひとまず私は青の水着を選択した。素直に似合っていると思ったのだが、この空気のせいで冷静な判断など出来ようか、い

や、出来ない。（反語用法）

逃げるように店から出た私達だったが、店の中ですれ違った客は両手で数えられるほどであった。なので、

霜「…次からは郵送にしてくれ」

簪「……わかった」

こうなるのも必然と言えよう。

さて、その後は第一区でのんびりくつろいでいた。詳しく言うとゲーセン（というかカジノ）、公園など色々な所に行った。流石フォン・ブラウン。地上ではお目にかかれないクオリティである。

そして今は風呂に入っている。既に時刻は夕暮れ時。湯に浸かりながら赤く染まった空を見るのも（フォンブラウン社の技術の賜物である。あの社長もたまにはいい仕事をする）いいものだ。

霜「全く。前世では考えられないな」

思えばこの世界に来てはや１５年（まだ誕生日が過ぎていないため）。未だに前世の記憶を引きずっているのもどうかと思うが、今は何と恵まれていることだろうか。この平穏をいつまでも保っていたいものだ。

…この状況で考えることでもないな。

今はただ、一時の平穏に体を休めるのみである。

因みに簪の入浴シーンはない。当然であろう？わからないんだから。

すっかり夜も更けた（月面でその表現は無いだろう）ころ、私達は自宅に戻っていた。

簪「……ここって…凄いんだね…やっぱり」

霜「ああ。私も実感したよ」

今日の事を思い返しながら、他愛も無い話をしていた。

簪「…平和だね」

霜「…ああ。今の状況で考えれば、束の間の平和だがな…」

私は付け加える。

霜「この世界は余りに不安定だ。ＩＳという強大な兵器が出来たからこそ、見せ掛けは平和になり、いつ戦争が起きても可笑しくない状況になっている」

簪「…うん。私の家もＩＳが出来てから更に忙しくなった。……お姉ちゃんともすれ違ったままだし…」

はぁ、と両者深い溜め息を吐いた。

霜「辛気臭い話はこれでおしまいだ。さて、簪は何時になったら普

通になったら話してくれるようになるのかね？」
簪「…努力はしてる。でも、まだ」
霜「…そうか。なら、しょうがないな」
私は簪に向けて優しく微笑んだ。簪の頬が赤く染まる。
霜「ふむ。面白いな」
再度接近して微笑んでみた。案の定頬を赤くして俯いた。
簪「…いじわる」
小声でそう呟いたのが確かに聞こえた。
私の頬も緩んでしまう。この平穏、いつまでも続いて欲しいものだ。
To be continued…

１６話　「束の間の平和だがな」（後書き）

深夜投稿＆急ピッチ
誠に申し訳ありませんでした。

次回は来月になります。テストのばか。

17話　「でも、一夏が良いです」（前書き）

更新！

お詫びも兼ねて早くあげました。次回は来月って言ってたですって？ナンノコトデショウ？

今回で確実に今月最後です。はい。

では、どうぞ。

17話　「でも、一夏が良いです」

side　霜月一

…思えば何年ぶりだろうか。
今私は臨海学校の目的地、つまり海に向かっている。
前世でも引きこもっていた上に内陸県だったからな…。
フォン・ブラウンにも海（勿論人工である）はあるが、やはり自然の方がいい。

学校からバスで向かう訳だが、察しのいい方なら気付いているだろう。隣の席をめぐる問題があった。
クラス別にバスに乗っているため、４組の簪は当然いない。
私と簪の関係は既に知られているので、私の隣を無理にとる者も居なかった。

問題は一夏と隼人である。

一夏はいつもの面々に、（一夏曰わく）のほほんさんが席を取り合っていた。

隼人の方は特に特筆すべき事でもないだろう。出席簿が火を噴いた、と言っておこう。

そして…私の隣にはセシリアがいる。何てこともない。只彼女が負

けただけだ。
因みに一夏の隣にはシャルロットが座っている。それはもう幸せな表情を浮かべている。

まぁ特にする事もないので寝て過ごすか……。

セ「…少し、よろしいでしょうか？」

む、まさか向こうから話しかけて来るとはな。因みに一夏のついでに原作キャラともそれなりに仲良くなっている。

霜「どうした？」
セ「学年別トーナメントの時、１３ものビットみたいな物を操ってましたよね？」

…うん？１３だと？

霜「いや、私が操っていたビット系武装は全部で２０だが？」
セ「へ？」
霜「いや、ウイングビットが１３、ＩＳ型のＧビットが６、同じくＩＳ型のアローケルで計２０だ。と、聞いているか？」

セシリアは目を見開いたまま固まっている。私の声にようやく正気になり、

セ「わたくしもブルーティアーズを操作する身なのでわかりますが、どうやってあんな多くのビットを動かしつつ、自身も高速移動出来るのですか？」

私は暫く考え、

霜「……個人の力が大きいが、企業秘密だ」

と答えるしか無かろう。セシリアも納得したようで、それからは何も聞いてはこなかった。

ｓｉｄｅ　セシリア

…まさかあのＩＳもどきまでビットだったなんて…。しかも黒いビット（ウイングビットだったかしら？）は高威力のビームを持っていたのに、あの複数のＩＳもどきはビームの銃と剣を、一機だけのＩＳはクローの部分に纏った上、撃っていましたわ…。

霜月さんのＩＳもおびただしい量のビームを使っていましたし……。

恐らく作成したのはフォンブラウンという企業でしょうけど、そんな企業聞いたことも無いですわ…。

……一体何なのかしら？

ｓｉｄｅ　霜月一

セシリアが生徒で初めに疑問を持ったか…。

流石は首席。伊達ではないか？

まぁ、考えたところで答えが見つかるわけでもない。懸念すべき事ではないな。さて、この行事では鬼が出るか蛇が出るか、非常に楽

しみである。
……気のせいか私が戦闘狂になってきていないか？

――――――

――――

――

む、いつの間にか寝てしまったようだ。

外を見れば青々とした海が見える。久しぶりだな。
…気のせいか若干こちらの世界の海は妙に綺麗である。気のせいである事を切に願う。

バスの中は女子の声（いや奇声）で溢れている。これで起こされたのか。

……もう少し静かに出来んのか？

――――

――

何はともあれ無事に宿に到着。女将に挨拶を済ませ（一夏はまた織斑先生にどつかれていた）、部屋に入った。

一夏は織斑先生と同室である。ブラコンめ。私と隼人は職員の部屋に一番近い二人部屋になった。

しかしこの宿、かなり豪勢である。国から予算が出ているらしいが、少し特待過ぎないか？まぁ各国の代表とも呼べる生徒が集まっているんだ。このくらいが適切か。

なんてくだらない事を考えているうちに隼人はさっさと海へ行ってしまった。落ち着け、馬鹿者。

さて、荷物もまとめたし、私も行きますか。

部屋を後にし、海へ向かった。

出口の日陰に簪がいる。待っていてくれたのか？

霜「簪！」

簪「…一…遅い」

そう言ってぷくと頬を膨らませた。いい子だと思うと同時、知らず知らずの間に簪の頭を撫でていた。

簪「んっ…」

目をつむり気持ちよさそうにする簪。いつからこんな小動物系になったんだ？

簪「…どうしたの一？」

霜「…いや、簪が可愛いと思っていただけだ」

簪「はう…」

顔を赤くして俯く簪。いじるのもいいが、ここまでにしよう。

霜「さて…行くぞ。簪」

簪「…うん」

まだ少し赤くなっている簪とともに、脱衣所に行った。

…誤解があるかもしれないが、ちゃんと男女別れたぞ？

この空気、この暑さこそ砂浜よ。

私は黒い海パンを履いている。そこ、センスないとか言うな。

簪「…お待たせ」

こちらにトテトテと走ってきた簪は、昨日私が選んだ青の水着（余り露出度が高くないタイプ）を見事に着こなしている。

霜「いや、待ってなどいない。行くか」

簪「うん」

私達は砂浜に繰り出した。勿論ビーチサンダル装備である。

砂浜にシートを敷き、パラソルをさした。下準備はこれで良いだろう。

さて、私も海に入りますか。

――数十分後――

……よく考えたら、この時こそ彼女と泳ぐべきではないか？簪が何も言ってこなかったので気にしてなかったな…。

砂浜に上がり、簪の姿を探す。パラソルの所には…いない。誰かといるわけでもなさそうだ。はて？

と、岩陰で青い物が動いたのが視界に入った。

覗いてみると、そこには簪が何やら浅瀬で一人ヤドカリと戯れていた。

霜「…何をしている？」

簪「……（つーん）」

目を合わせようとしなかった。どうやらご立腹のようである。

霜「一人でさっさと行ってしまったのは謝る。済まなかった」

簪「……寂しかった」

それはこんな所にいればそうだろう。

簪「…今一が考えていることと違う」

何故分かった？

簪「…置いてかないで」

霜「…済まなかった」

こういう空気は苦手だ。どうすればいいのかさっぱり分からない。
と、
簪が弱々しく私の手を掴んできた。…どうすればいいんだ？
とりあえず簪の手を引っ張り、相手の腰に手を回して体に密着させた。要するに抱いたのである。女子特有の甘い香りがする。勿論周りに十分気を付けた。

簪「ひゃうっ！／／／／」
ぼんっ！

おお、一瞬にして身体が真っ赤になった。未だに頭から湯気がでている。当たったのか……

簪「……ばか」

うむ、どうやらハズレだったらしい。少し涙の溜まった上目遣いでこちらを睨んできた。

メガネっ子がメガネを外したときの威力は凄いと何かの本に書いてあった記憶がある。今日ほどこれが正しいと思った事はないだろう。

なんて私も顔を赤くしながら簪と目を合わせていると、

簪「……でも、許す」

そう言ってくすりと笑った。良く分からん。全く持って良く分からん。が、これで良いらしい。

簪「…一…そろそろ離して…」

霜「ッ…ああ。悪かった」
簪「ううん。もう良い」

全く何が良いのかさっぱりだ。が、とても幸せな時間だった。

その後は簪と泳いだり、一夏が面倒事に巻き込まれているのをみたり、ビーチバレーに参加してみたり。
平和だな。私は深く思った。

ーーーーーー

ーーー

今は夕食。やはりとんでもなく豪華な夕食だった。昼も夜も高そうな刺身がついていた。
隣には簪。とても綺麗な姿勢で食していた。やはり家柄か？
向こうでは一夏を中心に何やら騒がしくなっている。あ、シャルロットがおろした本わさの山を食べた。なんという度胸だ。案の定涙目になっているが。
一夏の隣ではセシリアが顔を真っ青にしながら正座をしている。遠目で見ても震えているのが分かる。一夏にその心が理解できる筈もないのだが。
と、キョロキョロとしていた一夏は、急にセシリアに刺身を食べさせようとした。当然女子は一斉に騒ぎ出し、我が我がと一夏の元に群がっていく。静かにしないと迷惑であろう。全く元気な奴ら…

ばん！
千「お前たちは静かに食事をする事ができんのか」
案の定織斑先生の登場である。群がっていた面々が一斉に顔を青くした。
千「どうにも、体力が有り余っているようだ。よかろう。今から砂浜をランニングしてこい。距離は……大体５０キロでよかろう」
「「「いえいえいえ！とんでもないです！大人しく食事をしています！！」」」
そう言うなり、蜘蛛の子を散らすように散会していった。
簪「…一？全然食べてない。どうしたの？」
おっと、私まで手が止まっていたな。
霜「なに、愚か者共を見ていただけだ」
私は食事を再開した。全く、無駄に時を使ってしまったな。
その後、簪、隼人と三人でこれからの事を話していた。既に簪はこの世界の歯車的なものから外れているので、話しても大丈夫らしい（やはり社長談）。
霜「さて、明日アメリカの三世代軍用ＩＳ『銀の福音』（シルバリオ・ゴスペル）が暴走する訳だが…そうだな。撃墜作戦には参加しないでおこう」
隼「どうして？」
霜「我々が参加するのは正式な作戦の時ではない。その後だ」

簪「…どういうこと？」
霜「つまり……」

side out

霜月達が会議をしている頃

セ「ふふふ…。一夏さんにお呼ばれされてしまいましたわ…。」

嬉々として織斑姉弟の部屋に向かうのは、先ほど食事の時に部屋に呼ばれたセシリアである。

セ（喉の調子も整えておきませんと）

端から見ればかなり浮かれているのが分かる。徐々に速くなっていったセシリアは、しかし部屋の前で止まることになった。

セ「鈴さん？それに箒さん？一体どうしたんです？」
鈴「シッ！」

鈴に黙れと指示されたセシリアは、その部屋の中から千冬の喘ぎ声が聞こえて来るのが分かった。

セ「これは一体…何ですの？」

セシリアまでもが聞き耳を立てたとき、不意に襖が開いた。

三人「「「へぶっ！！」」」

思い切り、中に入ってしまった。

千「何をしているか。馬鹿者共め」

三人「「「あは、あはははは……」」」

脱兎のごとく逃げようとしたが、しかし捕まってしまった。

千「盗み聞きとは感心しないが、丁度良い。入っていけ」

話の中で、さっきの喘ぎ声は一夏のマッサージによるものであり、彼女らが考えていた事とは全く違う事が分かった。勿論、セシリアが一夏に呼ばれたのもマッサージの為である。

その後一夏は風呂に行き、部屋には千冬、箒、セシリア、鈴、呼ばれて来たシャルロットにラウラのみとなった。

千「さて、単刀直入に聞こう」

千冬は一息置き、

千「お前ら、あいつのどこが良いんだ？」

あいつとは勿論一夏の事である。

箒「わ、私は別に…以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけなので…」
鈴「あたしは、腐れ縁なだけだし…」
セ「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」
三人はどこか落ち着かない様子（落ち着けるわけがないが）でそう言った。

千「そうか。では一夏にそう言っておこう」
三人「「「言わなくて良いです！！」」」
千冬はそれを笑い声で一蹴した。

シ「僕は…いえ、私は…優しいところ、です」
徐々に言葉がすぼんでいったのはシャルロットである。因みにまだデュノア社所属である。

千「あいつは誰にでも優しいぞ？」
シ「…そうなんですよね。それが少し悔しいかな…」
赤くなった顔を扇ぐシャルロット。続いてはラウラが答えた。

ラ「私は…強いところです」
千「いや、弱いだろう」
即答で返されてしまった。だが、

ラ「少なくとも私よりは…強いです」

そんなもんかね。と千冬はこう続けた。

千「まぁ、強さ云々は置いといて、家事は一通りこなせるし、マッサージも上手い。役に立つぞ。どうだ、欲しいか？」

５人は視線を上げ、

５人「くれるんですか！？」

千「…やるか、馬鹿者共」

えー、と５人は心の中で突っ込んだ。

千「女なら自分から奪いにいくくらいの気持ちでいかなくてどうする。自分を磨けよ、ガキ共」

そう言って笑う千冬は、心底楽しそうだった。

千「そもそも霜月…は駄目か。既にいるな。枢木がいるではないか。そっちは良いのか？」

不意に、そう告げた。

箒「確かに多方面で凄いのですが…」

鈴「いい男だけど…」

セ「格好いい殿方ですが…」

シ「とても優しいけど…」

ラ「私や一夏よりはるかに強いですが…」

それぞれ違う事を言ったが、最後のみはかぶった。

5人「でも、一夏が良いです」

これには流石の千冬も驚き、

千「全く…何故あいつも気付かないのか分からないな」

そう呟いた。

一同深い溜め息を吐いたのはいうまでもない。

side　枢木隼人

霜「……以上が今作戦の概要だ」

隼「しっつも～ん。これって作戦て言えるの～？」

霜「……」

簪「……（呆）」

隼「……はぁ。分かったよ。やります」

霜月君が話した事は、ただ単にこれからの事を言っただけで、断じて作戦じゃなかった。作戦て言いたかっただけなんだろうな～。

読者の皆さんも間違っても期待しないでね～。

隼「でさ、ゴスペル倒した後の事は確かなの？」

霜「……ああ。今回も”歪む”だろうな」

僕達は兎も角簪ちゃんはポカンとしている。説明してないのかな。

霜「簪。これが私達がここにいる事によるズレなんだ。前に言ったよな？」

簪「…うん。私はそれであなた達を否定しない」

簪ちゃんは基本めちゃくちゃいい子。あのハチャメチャ会長の妹とは思えない。

隼「ん〝っ……。僕がいるんだからイチャイチャしないでね？」

ただ、場所を考えない。初だから？

霜「……こほん。後は何もなかったか？では、明日を楽しもうではないか」

隼「……ああ。」

簪「楽しむって…。まぁ、いっか」

簪ちゃんも霜月君と付き合い始めてから徐々に変わってきている。良い意味でも、悪い意味でも。

さてさて、大きな”仕事”の前は血がたぎるね。せいぜい楽しませていただきましょう…かね。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

物語は、歪んでいく。

それが、大でも小でも、歪んでいく。

束「……えぐ…。いっくんも、箒ちゃんも、ちーちゃんも、誰も気付いてくれなかった……。…ぐす……。一日中待ったのに～！」

…大小関係なく、物語は歪んでいく……。

束「いっくんのばか～～～！」

それに左右される人間も、少なからず出てくる。

束「うわ～ん！」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

17話　「でも、一夏が良いです」（後書き）

中途半端で止めてしまって申し訳ないです。

アドバイス等有りましたら是非！お願い致します！

18話　［…健闘を祈る］（前書き）

やっとテストが終わった……。

今月はちゃんと投稿します。

いつもよりも長めになっていますが、他の先生方はもっと長いんですよね…凄い。

…こほん、では、どうぞ。

18話　［…健闘を祈る］

ｓｉｄｅ　枢木隼人

ーー午前４時ーー

隼「おはよーございま～す。では、早速霜月君の寝顔を拝見しましょう～…（小声）」

今は少し空が明るくなりかけている時間帯。当然皆寝ている？
寝起きレポート、やってみたかったんだよね～。わくわく。

隼「では、ごはいけーん（小声）」

慎重に、かつ早く霜月君の布団をめくっていく。霜月君は、眉間にしわを寄せて寝ていた。

隼「おおー。寝顔も凛々しいですね～。子供っぽかったら面白かったんですがね～（小声）」

恐らく今日の事に関する夢でも見てるのか、不機嫌そうだった。

と、突如霜月君の体が動いた。

隼「なっ！迎撃体制に入っただと！？（小声）」

霜月君から放たれた右ストレートをかわす。寝てるんだよね？

隼「その程度の攻撃っ！（小声）」

すると、霜月君は右足で蹴り上げてきた。

僕はそれを自身の右足で抑え、続く右ストレートを両手で抑えた。

隼「これで……なっ！（小声）」

しかし、強烈な左足キックが僕のこめかみにクリティカルヒットした。

グキッ！

嫌な音と共に僕の体は壁まで飛ばされた。

隼人「…これが…ニュータイプの力だというのか…。がくっ（小声）」

そして、僕の意識は深い闇に落ちていった。

ｓｉｄｅ　霜月一

――午前６時――

朝起きたら、壁の近くで隼人が泡を吹きながら寝ていた。全く、寝相の悪い奴だ。

そろそろ皆も起き始める頃だろうか。私は隼人を起こし、支度を始めた。

何やら隼人がしきりに首を押さえ、音を鳴らしている。寝違えたのだろうか？

うむ、今日もいい天気だ。この世界はいい。何かある日は大抵晴れている。昼でも夜でも月が見えないとサテライトキャノンが使えないので、非常にありがたい。

さて、今日からは訓練だったな。まぁ、本日は実戦なのだが。
相変わらず豪華な朝食を食べ、海岸へと出た。

――海岸にて――

今日は丸一日ＩＳの装備試験運用とデータ取りで潰れる。どうせ実戦が控えているのでどうという事はないが、正直、めんどい。
特に専用機持ちは大量の装備があるので大変だ。

千「よし。専用機持ちは全員集まったな？」

専用機持ちは一般生徒から少し離れた所に集められた。が、箒がこの集団の中に入っていた。

鈴「あの～…。箒は専用機を持っていませんが…」

まぁそうだな。今現在、箒は専用機を持っていない。なのに、ここにいるのはおかしいというのだろう。この後の事を知らなかったら誰だってそう思う。

千「その事なら心配ない。もうすぐ「ちーーーちゃ～～～～ん！」……来たか…」

頭を抱えながら溜め息をつく織斑先生の後ろを見ると、ウサミミドレスの、不思議の国のアリスのような不思議な格好をした天災（誤字にあらず）が砂煙を上げながら織斑先生に突撃してくる。

千「……束」

そう。このアリスもどきの天災が、ＩＳ製作者にして箒の姉、現在国際指名手配中の篠ノ之束である。

改めて出で立ちを見てみると、アリスが着ているような青と白のワンピース、頭にはメカニックなウサミミがついている。確かあのミミはかなり高性能だったはずだ…。

さて、織斑先生は臆することなく束の頭を鷲掴み、アイアンクローをお見舞いした。少し離れているここからでもギチギチという音が聞こえる。

束「やあやあちーちゃん久しぶりだね～。熱い愛情表現嬉しいよ～」

千「そうか。ならもっとやってやろう。後その名で呼ぶな」

束「分かったよちーいたいいたいギブギブ！」

織斑先生の手の甲から血管が浮き出し、ギチギチからゴキゴキになった。とても頭から出して良い音ではないだろう。

バキッ！

束の頭から衝撃音が鳴ったのと同時、ぴたりと動きを止めた。

山「あの～…。部外者は立ち入り禁止になっているんですけど…」

山田先生は多少、いやかなりビビりながらも注意したが、無駄である。その言葉に応える者は居なかった。

……しばしの沈黙

篝「……姉さん？」

すると、束のウサミミが、”ウサミミが”ピクリと動いて、

束「やあやあ篝ちゃん元気にしてたかい？」

いや何事もなかったかのように動くな。

束は篝を、いや、篝の体を見て、

束「うんうん。大丈夫そうだね。お胸がとてもげん…」

ガスッ！

どこから取り出したのか、篝は木刀をウサミミの間に叩き込んだ。

篝「殴りますよ」

篝、目が笑ってないぞ。

束「殴ってから言ったぁ～…。束さんの脳みそは二つに分かれちゃったよ～？」

千「そうか。これからは二つの脳で同時に物事が考えられるな」

束「あ、そっか。さっすがちーちゃん頭いい～」

こんなアホなやり取りをして親友と実妹に大きな溜め息を吐かれている束博士であるが、ＩＳという兵器を開発した”地球上”ではとても頭のいい人間である。

束「それと…いっくん」
一「はい？」
束「ばか」
一「……はい？」

久方ぶりの再会も済んだことだ。早く本題に入ってくれないか？

束「おお、そうだった。霜月君と隼人君。機体のデータ見せてくれるかな？」

…一応此方は企業所属で企業秘密とかもあるのだが、何を世迷い事を言っているのだろう？

霜「すいませんが、その要望には応えられませんね。束博士」
束「あれ？天才の束さんが見てあげるって言っているんだよ？嬉しくないの？」

…この人も根は良い人なんだが…。その考えはおかしいぞ？

霜「ええ、断固拒否ですね。我々は企業所属です。迂闊に企業秘密の塊を公開するなど出来ません」
束「おやおや、おかしな事を言うんだね。フォンブラウンなんて聞いたこともない企業の秘密なんて大した事無いだろうに」

…ふむ、少ししつこいな。後で何か旧式のデータでも与えておくか。喜んで解析するだろう。

隼「うーん…。只の世代遅れＩＳしか作れない人に言われたく無いですね～」

おい隼人、止めろ。

束「うん？私が作った箒ちゃんのＩＳや、いっくんの白式の一部は四世代型のＩＳだよ？」

その言葉に、私、隼人、簪以外は驚いた。

今の世界を解説しよう。

今一般生徒が使っている、いわゆる量産型のＩＳは二世代型ＩＳ、世界が開発に躍起になっているのが三世代型ＩＳである。セシリアや鈴達のＩＳからも見て取れるように、まだ実験要素の高いレベルだ。

つまり、今束は世界よりも一世代上のＩＳを開発しているのである。これだけ取れば、束がやっている事がどれだけ凄い事であるか分かると思うが、既に我がフォンブラウン社では四世代型は量産型である。現段階で量産にも劣る粗悪品（白式は物凄く燃費が悪い上、武器が剣しかない）を作られたところで、なんら凄みを感じない。

隼「だから、只の四世代、しかも試作型の粗悪品しか作れてませんじゃ無いですか」

阿呆かこいつは。束博士のオリジナルデータは利用できる物もある（それ程凄い物でもなく、精々性能アップに貢献出来れば良いなレベル）し、相手にすると後々面倒だぞ。

束「むむっ。私の子供を粗悪品扱いはひどいね。四世代っていったら世界最高ランクの機体だよ？そんな事も知らないのかな？」
隼「……はぁ…。更識さんの機体は、僕達フォンブラウン社の最も安価の量産型四世代ＩＳを流用した物だし、僕達の機体……」
霜「隼人、止めろ」

…この阿呆が…。我々の情報を漏らしてどうする。
私は、かなり低めのトーンで、静かに言い放った。

隼「……分かったよ」

隼人は言い争いから引き、私はひとまず熱の冷めやらない束に、

霜「…失礼しました。取り敢えず、我々の機体を見せることは出来ませんので…。どうか、お引き願いたい」
束「……」

束は不遜に思いながらも素直に引いた。

千「……ん゛っ。束、自己紹介をしろ。一部混乱したままだ」
束「…えー、めんどくさ分かったよちーちゃんだからその構えは止めてね？」

束の言葉に被せて織斑先生は右手を鳴らした。どうやらこうかはばつぐんだったようだ。

束「私が天才の束さんだよー。はろー。終わりー」

束が非常に平坦な声だったので、織斑先生の右手はまた鳴ったが、

やっても無駄だと判断したのだろう、右手をおろした。
他の専用機持ちや、密かに聞き耳を立てていた一般生徒は、この人がＩＳ開発者の篠ノ之束ということに気づき、一般生徒が少し騒がしくなった。

千「お前達、手が止まっているぞ。作業を続けろ」

織斑先生の声と同時、一斉に一般生徒が作業を再開する。本当によく訓練されたクラスだ。

箒「姉さん…頼んでいた物は……？」

箒がやっと本題を提示してくれた。ここまで長かったな。

束「おおっ、そうだったね。さぁ、大空をご覧あれ！」

真っ直ぐ上を指差す束。その場にいた殆どの人間が空を見上げる。

ズドーン！！

一「のわっ！？」

展開を知っていた私はあまり驚かなかったが、いきなり上から金属の塊のようなものが落ちてきた。
落ちた衝撃で地面が揺れ、激しい砂煙により目を開けるどころか息をするのも難しくなったので、その姿を確認するのに随分時間を要した。見れば束本人もむせている。演出の仕方を考えて欲しかった。
視界も充分に確保出来るようになった頃、金属の塊からプシューという音がした。

束「…あれ？開かない…」

原作だったらすぐに開いて中身の御披露目だったのだが、どうやらさっきの衝撃でどこか壊れたらしく、いっこうに開く気配がない。

霜「…全く、貴女は阿呆ですか…」

私はクローケルを展開、どこが正面かも分からない金属の塊の壁にビームクローを突き刺し、強引に引き剥がした。どうやら正面だったらしく、綺麗に剥がすことが出来た。

束「…ああ、ありがとう」

束は四分の一感謝、四分の三嫌悪でそう答えた。妙にテンションが低かったが気にしない。

束「さてさて…。じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こそ『紅椿』！全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

ここで一つ補足を。現行ＩＳを上回ると言ったが、我が社の量産型四世代とオリジナル（紅椿）では、火力、敏捷性位しかオリジナル（紅椿）は上回っていない。特に燃費などは、紅椿のワンオフ・アビリティーを除く通常状態では雲泥の差である。まぁ、搭乗者の姉が作った専用機、しかも束博士作であるから、発揮能力は高いだろうが、所詮プロトタイプである。

因みに、私や隼人の機体とは歴然の差（しかし一部負けているところもある）であり、簪の機体も月製四世代ＩＳをカスタマイズしたものであり、紅椿よりは基本スペックが高い箇所が多い。

ただ、現行地球製ＩＳの中では一番スペックが高いだろう。

閑話休題

束「さあ！箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！（要するに箒専用にするって事ですｂｙ筆者）私が補佐するからすぐに終わるよん♪」
箒「……それでは、頼みます」

…おっと、姉妹水入らずのところ悪いか。
束はコンソールを開き指を滑らせる。さらに、６枚の空中投影ディスプレイに目配せし、同時進行で６枚呼び出したキーボードを物凄い、しかし翼（前に出てきたフォンブラウン社開発部研究所長。覚えている人は少ないと思う）より遅い速度で叩いていた（彼奴の指さばきは残像が見える）。普通の、いや天災の人間とチートの人間を一緒にしてはいけないか。
その間にも篠ノ之姉妹の会話は続いていた。箒は束を嫌っており、素っ気ない。が、束はそれを意に介さない様子で話している。

なんて解説しているうちにフィッティングは終わり（一夏は一次移行まで少し時間がかかったのだが、あっと言う間に終わった）、尚もキーボードを叩いている。

紅椿は、一夏の白式と同じ接近型だが、白式みたいに剣一本だけのピーキーではなく、左右に一本ずつ日本刀型ブレードがある。右の剣からは、隼人のランスロットのエナジーウイングから出るエネルギー刃のような物が出て、また、左の剣からは帯状の攻性エネルギーを展開する事により、近距離以外にも対応できるようになっている。

生徒Ａ「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの？身内ってだけで」
生徒Ｂ「だよねぇ。なんかずるいよねぇ」

まぁ説はもっともだが、

束「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

今のこの世界では女尊男卑。その昔は男尊女卑。果ては身分制度に民族問題。人間が平等であったことなど一度もない。人間が人間である限り、平等なんていうものは有り得ないのである。

またまた閑話休題

箒は試運転として束が展開したミサイルを、左の剣『空裂』の攻性エネルギーの帯でいともあっさり破壊した。驚愕に染まりつつも、どこか新しい玩具を与えられた子供のような顔をしていた。

と、その時、

山「織斑先生！」

先程から端末を見ていた山田先生が、突然声を上げた。
ただならぬ様子だったので、織斑先生は鋭い視線を向けた。そして、

千「現時点よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで

自室待機する事。以上だ！」

突然の指示に辺りは騒然となる。しかし、

千「とっとと戻れ！以後、許可なく室外に出た者は我々で身柄を拘束する！いいな！」

「「「「はっ、はい！」」」」

鶴の一声、有り得ないスピードで片付け始めた。

よし、これで面倒臭いデータ取りはおじゃんだ、と的外れな事を考える霜月、ついでに隼人だった。

――――――

私達専用機持ちは旅館の一番奥の半作戦室（コンピューターが沢山ある。こんなに繋げて良いのだろうか）に集められた。

内容は、アメリカ・イスラエル共同開発の三世代軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が暴走、後５０分後に二キロ先の空域を通過する事がわかり、”たまたま”近くにいた我々が対処する事になった、というものである。

福音は、広域殲滅を目的とした特殊射撃型。オールレンジ攻撃が使えるらしい。格闘は未知数だが、本当は現段階では大したことはない。相手は超音速飛行を続けているため、アプローチは一回が限度、つまり一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしか方法はない。

山田先生の一撃必殺という言葉に、皆は自然と一夏の方へ顔を向ける。

鈴「一夏、あんたの零落白夜で落としなさい」

一「待ってくれ、霜月や隼人や簪さんだって一撃必殺級の武装を持っているじゃないか」

ここまでは原作通り、そして作戦通りだ。

霜「私のサテライトキャノンはチャージが長いし、単体相手に命中する確率は低い。ソニック砲にしても同様だ（本当は命中率は高いが）。簪の山嵐は全弾命中しなくてはいけないし、可能性も低い（全弾命中など容易い事だが）」

横目で隼人に視線を送る。

隼「僕のヴァリスじゃ威力不足だね。余りいい効果はないと思うよ（充分威力はあるけどね）」

千「そういう訳だ。嫌なら降りても良いぞ？」

言い方はきついが、言葉の節々に可愛い弟を気遣う様子がわかる。

ブラコンめ。

一「……わかった。やります」

霜「ふむ、しかし誰かが運ばなくてはいけないな。移動中に余計なエネルギーを使うのは得策では無いだろう」

これは当然、白式の単一仕様能力『零落白夜』を完全な状態で発動させるためである。

千「お前の機体は使えないのか？」
霜「はい。アローケルは一人乗りなので」

アローケルは追加推力としても使える。まるでドダイ（ガンダムに出てくる飛行機）に乗るかのような格好で、音速を超えて飛行する事ができ、尚且つ余計なエネルギー消費をしない優れものである。

霜「それに、アローケルから離れていては制御することが出来ません」

ただ、私の脳波で動いているため私専用である。

千「そうか。他には居ないのか？」
セ「それならブルーティアーズが。強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が本国より送られて来てますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

パッケージというのは、要するに換装装備である。
本人は二十時間しか超音速下での戦闘訓練をしていないらしい（十分な時間であり、単に霜月達がやりすぎているだけである）。恋する乙女は何とやらだ。

その時、

束「待った待ーった！その作戦はちょっと待ったなんだよ～！」

と、いつの間にか天井から生えていた束の首が大声を出した。

余談だが、何故首と言う表現なのだろうか？日本語は実に不思議で

ある。

閑話休題

織斑先生に束を退去させろと命令された山田先生は、かなりオドオドしながらも束に注意したが、束は綺麗に空中一回転をしてから言葉を繋げた。

束「そういう事なら、ここは断然紅椿の出番なんだよっ！」

千「なに？」

束「紅椿のスペックデータを見てみて！パッケージなんか無くても超高速機動ができるんだよ！」

織斑先生の周りに数枚のディスプレイが浮いている。全て紅椿に関するデータだが、ディスプレイが浮いているのは流石といったところか。

束「紅椿の展開装甲を調節して……。ほら！これでスピードはばっちり！」

私達を除く専用機持ちは頭に？を浮かべている。一夏、お前の白式に付いてるんだぞ。

束「説明しましょ～そーしましょ～。展開装甲装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代ＩＳの装備なんだよ～」

まぁ、そうだな。簪のＩＳにもついてるし。

束「はーい、ここで心優しい束さんがいっくんの為に解説してあげるよ～。嬉しいかい？いっくん」

…説明は長いので簡略しよう。

まず第一世代は、『兵器としてのＩＳの完成』を目標にした世代。

二世代は、『後付仕様による多様化』を目標にした世代。

三世代は、『特殊兵装の装備』を目標とした世代。

そして四世代は、『換装無しでの全領域・局面展開運用能力』を目標にした世代。つまりオールマイティーを目指した世代である。

因みに、先程隼人が言い掛けていたが、私や隼人の機体は、転生補正付きではあるが月製ＩＳ五世代にあたる。月製五世代は、『大気圏外の活動』を目標としている。つまり、私達の機体は宇宙空間でも運用でき、かつ四世代を超えるスペックを誇っている。月も大気圏外だって？気にするな。

さて、現行の地球製四世代は、一夏の『白式』と箒の『紅椿』しかない。つまり、世界中から狙われるということだ。私もオリジナルの四世代には興味があるしな。翼に見せたら…考えないでおこう。それほどまでに危険なモノを渡したのだ。正直、何を考えているのかさっぱりわからない。何とかと天災（誤字にあらず）は紙一重ということか？

閑話休題

結局、撃墜ミッションには一夏と箒が参加する事になった。

原作通り、紅椿を手に入れたせいで箒はかなりハイになっている。

あの状態で失敗を犯すなというのはなかなかに難しい事である。

…無駄だとは思うが…

霜［一夏、箒はかなりハイになっている。もしもの時は援護しろよ］

私は密かに個人通信で一夏に告げた。

一［ああ、千冬姉にも言われたよ］

霜［…健闘を祈る］

さて、帰ってくるまで暇だな……。

メンテでもしているか。空は晴れているが、少し雲が多いか?まぁ懸念する事でもないだろう。

霜「…メンテナンスは先程やったじゃないか…」

誰に聞かれるでもなく、一人海岸で呟いた。

……寝るか。

ｓｉｄｅ　枢木隼人

一夏と箒が任務にでている間、僕達には待機命令が出た。当たり前だけど。

僕と霜月君と簪さんは、来たるときに備えて整備を終えている。つまりはとても暇。退屈だな～。

霜月君はというと、僕の隣で爆睡している。緊張感が一番無いのは

多分霜月君だろう。
どうして寝るのか聞いたら、

霜「機体の次は自分のメンテだ。備えれば憂いなしと言うからな」

といっていた。
隣で寝ているって事は、即ち起こさなきゃいけない人が要る訳で、
即ち僕は寝れないと言う事。…つらい。

しかし、どうして仲のいい瞼の進行を止められようか。

隼「もう無理……。お休み」

そうして、僕も眠りに落ちた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そして、霜月と隼人が爆睡している中、一夏が落ちたという衝撃的なニュースが入った……。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

18話　［…健闘を祈る］（後書き）

かなりの割合で真夜中クオリティなので、誤字等有りましたら感想にてお願いします。

応援して下さっている方々に謝謝。

19話　「……嘘だろ……！？」（前書き）

更新！

書いてて展開が早くなるのが最近の悩みどころです。
前書きに書くことも無くなってしまった…。

こほん。では…どうぞ。

19話　「……嘘だろ……！？」

ｓｉｄｅ　霜月一

ピキーン！

お。一夏が落ちたな？

私は未だ覚めきってない頭を振り、起き上がった。見ると、隣で隼人が普通に寝ていた。

霜「隼人、ファーストフェイズ終了だ。起きろ」

隼人に声をかけたが、一向に起きる気配がない。

霜「隼人、起きろ」

体を揺すりながら声をかけたが、しかし起きる気配はない。

霜「……！」

私は軽く、”軽く”隼人を蹴った。

隼「んん……。眠い…」

霜「寝ぼけている場合か。さっさとセカンドフェイズに移行するぞ」

隼「おお、落ちたんだ。りょーかーい」

隼人と私は海岸へと向かった。

一一一一一

今は夕方。夕陽が海に反射して、非常に美しい。が、一夏を除く原作組5人はそんなムードなどお構いなしで青春めいたことをやっている。

因みに、簪は既に海岸の影で待っていた。

鈴「……！」

箒「……！」

何やら向こうで怒鳴り合っている。大方箒がもう乗りたくないとか言って言い争いになっているのだろう。

鈴「……？」

ラ「……」

一段落ついたと思ったら、ラウラ主導のもと飛び去っていった。流石は軍人。目標は既に捉えていたらしい。さて…と。

霜「織斑先生に出撃許可を貰う。こういう時に白騎士事件の名は役立つな」

私のみ作戦室へ向かった。

―――――

霜「失礼する」

私は至って冷静に入口を開け、モニターをみて慌てている山田先生の隣、呆れ顔の織斑先生に声をかけた。

霜「我々は事情を理解しており、その上で提案します。我々に出撃許可を」

少し思案する織斑先生。だが、返事はすぐに返ってきた。

千「……許可出来ん」

まぁ、ここまでは想定内だ。

霜「おや、先生はあの5人を見捨てると？」

千「そんな訳は無いだろう！」

霜「ふむ、我々を出撃させた方が戦術的にも効果的だと思いますが？」

…正直、言っていることは滅茶苦茶かつ強引だ。だが、この状況下で冷静な判断は出来まい。

千「…出来るのか？」

霜「はっ。可笑しな事を。白騎士事件時の我々をお忘れで？」

話を全く聞いておらず一人テンパっている山田先生の隣で、織斑先

生は何かを決めたような顔になった。

千「…分かった。許可しよう。だが約束しろ。必ず戻って来いよ」

霜「…ふっ。了解です」

よし、これで許可は取った。案外楽だったな。

…さて、円舞の始まりだ。

――再び海岸――

隼「霜月君。ちゃんと優しく持ってよ？」

簪「…力入れたら…洒落にならない…」

霜「分かってはいるが…なにぶん力加減が難しいものでな」

今は、ＩＳ展開した我々が出撃準備に入っている。

アローケルは、後ろのバーニアに追加ブースターを付けた高速移動仕様になっている。その上に私が乗っているのも普通と言えよう。

だが、いつもと違う点は、右手に斬鉄、左手にランスロットを持っているところだろうか。

あえて言おう！不格好であると！

くっ…。これ用に追加装備を付けておくべきだったな。

セッティング完了。福音を探す……いた。分かり易いな。

霜「福音の場所を捉えた。しっかり掴まっていろ」

アローケルを飛び出させ、やがて音速の壁を超えて飛行しだした。

―――数分後―――

霜「まだ第一形態か。善戦しているじゃないか」

着いた先では、かなりの激戦が繰り広げられていた。勿論隼人と簪はおろした。

恐らく我々の接近に気が付いているだろうが、何も言ってこないと言う事は我々の助けを必要とするまでもないと思っている、つまり勝利を確信しているのだろう。

まだ落としていない敵の前で勝利を確信するのは極めて愚かな行為である。なぜなら、その確信が油断に繋がってしまうからだ。自身より強い敵なら尚更油断は禁物である。

隼「…落ちちゃったね…。つまんない」

解説中に落ちてしまったか。まだ次のステージがあるがな。

簪「はぁっ…はぁっ…。霜月達も、来たのか。援護は嬉しいが、無事に撃破したぞ」

簪が形を上下させつつ話しかけてきた。やはり落としたと思ってい

るらしいな。
私は反応しなかった。当たり前だ。まだ終わった訳ではないのだから。隼人に簪も同様だった。

その後、突如水面が光り始めた。
霈達は驚いていたが、我々の反応は別だった。

霜「…来たか。隼人、良かったな。第二ステージだ」
隼「うん…。楽しめそうで良かったぜ」
霜「一応言っておくが、福音のデータも欲しいからな。すぐに壊すなよ?」
隼「無理を言うなぁ…。まぁ、向こうがどんだけ雑魚かで決まるだろ」
霜「ふっ。この戦闘狂め」
隼「お前が言うか…。クックック…」

……やはり私は戦闘狂なのか?

簪「…二人とも…怖い…」

う…傷つくな…。ただ、目の前の”雑魚”がどれほど戦えるかが見たいだけなのだが…。

海面から、二次移行した福音が出てきた。背中からは翼が生え、”天使”と呼ぶに相応しい姿だった。
天使を堕とす悪魔（クローケル&アローケル）と騎士（ランスロット）と侍（斬鉄）、か?面白い舞台だ…。

待機状態だった福音は、突如翼を広げて5人に急接近した。ほう…。スピードはなかなかのものだな。

ラ「なっ…！」

そして、そのまま光の羽でラウラを包んだ。瞬間、羽から出た大量のエネルギー刃がラウラを襲った。おお、あれは避けようがないな。そして羽を畳んだ後、所々装甲がなくなりボロボロになったラウラが海へと落ちていった。

私はそれを、ただ腕を組んだまま記録していた。隼人に簪も同様だ。ただ、簪は少し動揺しているようだが。

その間にも、セシリア、鈴、シャルロットが次々と落ちていく。残りは箒だけになった。

箒「ひっ…」

箒は完全に戦意を失っている。さぁ、早く来てやれ。姫様達の騎士よ。

代表候補生達は既に落とされ、最新兵器は怯え、天使は華麗に舞う。この舞台に、突如白い騎士が現れた。まるで、孤立した姫を護るように。

霜「やっと来たか…」

箒の前には、落とされて意識不明になっていた一夏が、二次移行した白式と共に存在していた。

箒は…見とれてるな。今は戦闘中なのだが…。

ん？一夏が何か紐のような物…リボンを渡したな。確か今日は箒の

誕生日か。繰り返し言おう。今は戦闘中だ。

霜「一夏！箒達を守れ！こちらの手助けは無用だ！」

しびれを切らして一夏に怒鳴りつけると、一夏と箒は近くの島に降りていった。

霜「さて…。隼人、スマートにな？」

隼「ふふふ…りょーかい」

言うなり隼人はトライデントを構え、急接近しながら福音を突いた。当然福音はサーベルのようなもので抑えるが、隼人はその速度のまま離れ、接近。福音の斬撃を避け、カウンターで右わき腹を突いた。福音の右わき腹部分の装甲は大破。隼人はそのまま離れ、接近。サーベルもろとも右腕装甲を貫いた。ちゃんと搭乗者の事を考えた設定にしてあるが、もう右腕は戦闘中使い物にならないだろう。

こんな具合で離れ、急接近を繰り返した隼人は福音を蹂躙。一撃も貰わないまま福音を撃墜した。

下で一夏達が呆然としているのが見えたが、気にしない。

隼「がっかり。やっぱり雑魚かったね」

霜「まぁ仕方あるまい。所詮旧型だ」

データも採れたし、搭乗者は一夏に拾わせた。

…あとはあの予感だが…。

その時、レーダーの端で敵の姿を捉えた。

霜「おいでなすったか……な！？」

レーダーに掛かる敵はどんどん増えていった。その数、千。

霜「この距離なら…！」

Gビットを全機展開し、サテライトシステムを待機状態にした。

霜「マイクロウェーブ……嘘だろ……！？」

私は、空を見て固まった。

……空に有るはずの月が、厚い雲に覆われて見えなかったのだ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

19話　「……嘘だろ……！？」（後書き）

良いところで終わらせられた…でしょうか？

20話　（俺はここで終わるのか？）（前書き）

更新しました！

更新が遅くなってしまいすいません…。宿題なんて大嫌いだ…。

こほん。では、どうぞ。

20話　（俺はここで終わるのか？）

霜「くっ…！隼人！簪！弾幕を張り、散開して敵部隊の到着に備えろ！隼人は敵部隊に突撃してバーサーカーシステムの使用も許可する！」

現在およそ千機のＡＩ敵部隊が接近して来ている。広範囲殲滅兵器のサテライトキャノンは使えず、接近するまで弾幕で数を減らすという苦策をとるしかなかった。

霜月はトリプルメガソニック砲をチャージ、発射しつつ、Ｇビットのビームライフル、アローケルのビームキャノンで牽制射撃。隼人は、エナジーウイングから大量のエネルギー刃を出しつつ両手に構えたヴァリスを散弾状態で打ち続けている。簪は余り操縦技術が高くない（フォンブラウン基準）が、山嵐のマルチロックオンシステムで戦果をあげていた。

各人が弾幕を放ち、敵部隊を落としているが、それでもまだ全体の一割に満たない量だった。

一夏達も加勢しようとしたが、

霜「まだ居たのか！お前達が加わってどうにかなる相手ではない！頼む！早急に帰還してくれ！」

霜月達に退けられ、ただ戦いを傍観しているしかなかった。現実、加勢したって大した増強にはならないだろう。デメリットの方が多

すぎる。

…弾幕を打ち始めてからどの位経っただろうか。未だ一割も落とせておらず、既に目視出来る所まで接近していた。

霜「あの姿……バリエントか！？」

バリエント（ガンダムXより）

フォンブラウン社が創り出した量産型三世代無人ＩＳ。

既に旧式になり生産も停止した機体である。

無人ＩＳの編隊行動を目的として開発された機体で、単機の能力は機動性以外余り高くはないが、編隊行動により高い戦力を生み出すことに成功し、後の無人機技術に生かされている。

プログラムさえあれば編隊行動を複数とることが可能で、ＡＩながら単調でない行動が可能である。

霜（そうか…。やけに当たらないと思ったが…。しかし、どこからあんな物を引っ張り出して来たんだ？その前に何故あれが地球にある？）

あの機体は地球にとってはオーバーテクノロジーの塊。しかもフォンブラウン社は表舞台に出ていない（そもそも地球上にない）企業

である。それなのに、あんな大量に活動しているのだ。

霜（どこかから流れたのか…？いや、今はそんな事を考えている暇はないな）

思考を止め、戦闘に集中する事、味方を纏める事に意識を向けた。

霜「隼人はバーサーカーシステムを発動し、敵部隊に突撃、連携を乱せ！簪は後方から援護射撃！予備のエネルギーパックは大事に使えよ！いいか！？」

簪「わかった！」

隼「りょーかいっと。じゃあ…いくぜーー！！！！」

霜月が指示を出すと同時、隼人はバーサーカーシステムを起動、トライデントが消え代わりに大剣が現れ、エナジーウイングが隼人の身体を覆った。これは一対多の際にバーサーカーシステムでの防御力の低下を補うシステムで、エナジー刃を出すことが出来なくなるかわりに身体の周りにシールドを張ったような状態になる。これにより、多方向からの攻撃にある程度は耐えることが出来る。勿論、剥き出しの所はいつも通りだが。

取り出した大剣は、新装備の『バスターソード』。

斬るよりも凪払うことを目的とした剣である。

日本製二世代ＩＳ『打鉄』とほぼ同じ大きさの剣にはビームを纏っておらず、だがぶつけるだけで敵を粉砕出来るその剣は、隼人が剣に慣れていない（そもそも得意ではない）、剣の大きさ故に命中率が極端に低い上に威力が高い事が問題で、実験的に装備されたこの

剣を隼人は全く使わなかった。だが、現状では一対一向きのトライデントよりも一対多向きのバスターソードの方が効率が良いとバーサーカーシステムが判断したのだ。

隼人は高速で移動しつつ剣を振り回し、火の玉を先程よりも確実に増やした。

このままいけば楽勝なのだが、バリエントのＡＩには学習機能が搭載されており、早い時間で敵の攻撃に対応出来るようになっている。現在の隼人はバーサーカーシステムの発動により、攻撃が一辺倒になっている（元から一辺倒ではあるが）。そのため、攻撃の軌道が読みやすくなり、それの対策がとりやすくなる。かって、霜月も同様の手段で隼人を倒している。強力だが単純。それが隼人の弱点だ。

対策プログラムを完成させたバリエント達は、隼人の攻撃を完全とは言えないが回避、火の玉の数は徐々に減っていった。だが、バーサーカーシステム発動中の彼に考えるという概念は存在しない。ただ敵を破壊する事のみが目的のこのシステムは、徐々に攻撃の軌道を変えていた。しかし、それは成果に結びつかず、相手に反撃をする余裕を与え始めていた。

次第に、ランスロットのエナジーウイングが受ける衝撃が増えていった…。

簪（…怖い…でも、やらなくちゃ！）

簪は、山嵐を撃ち尽くし、春雷（メガソニック砲級の太ビーム）を

敵の密集地帯に撃ちつつ、インコムで霜月の援護射撃、自身に向かってくる敵を斬鉄で切り裂いている。
同時処理能力は霜月監修の元頑張って訓練したが、複数装備を使うのに頭がヒートしそうだった。
当初こそ、春雷により周りの敵を巻き込みつつ破壊、それなりにいい戦果を上げていたが、例のプログラムにより徐々に当たらなくなってきた。
相手の射程外から撃っていた事が功を成したか、或いは霜月が密かに守っているのか、被害は三人の中で一番少なかった。
しかし、次第に春雷を連射していた反動で、シールドエネルギーが残り少なくなってきており、次第に周りの敵の相手が精一杯になってきた。

そして、徐々に防戦一方になってきた…。

…どの位時間が経っただろうか。３０分、１時間、それ以上かそれ以下か。

霜（不味い…。我々の攻撃が徐々に読まれてきているな…。隼人を後退させたのは正解だったか…？）

現在、隼人と簪は互いを援護しつつ攻撃。霜月は一人、愛刀の正宗でバリエントを凪払っていた。

今の所、一番相手に攻撃を読まれてなく、大きな戦果を出している。が、相手の数は未だ三割程度しか減っていない。大した防戦手段を持たない霜月は、正宗で凪払いつつ高速移動で事なきを得ていた。

霜月が攻撃を読まれていない理由、それは幅広い攻撃の種類にあった。
正宗だけでも、衝撃波、ビーム、様々な剣技による攻撃など、様々な攻撃手段がある。加えて、他の装備と組み合わせて攻撃する事により、読みづらい攻撃をしている。
しかし、霜月の攻撃手段は殆ど一対一。良くて一対少だ。複数の攻撃は現在は使えないので、消耗戦に近い形になっている。

霜（私は…俺はここで終わるのか？終わったらどうなる？また輪廻をさまようのか？）

…そこで霜月はフッと思考を止め、

霜（くだらないな。そんな事、考えるだけ無駄か。今の生活が楽しいからな。今度はしぶとく生きてやろうじゃないか！）

霜月は決意を新たにし、既に欠けつつある愛刀を構え直した。

と、その時。霜月達の目の前を、黒い何かが通り過ぎた。それと同時、７００近くいたバリエント達は全て真っ二つになり、火の玉になった。

その爆発の衝撃は凄まじく、簪も、隼人も、霜月も、吹き飛ばされた。

ｓｉｄｅ　霜月一

霜「くうっ…！」

先程バリエント達の謎の全滅による爆発で起きた衝撃を、既に深手を負っている愛機で必死に堪えていた。隼人達の無事も確認したいが、目を開けられない程の光が視界を覆っているように感じる。

…少し光が収まってきたので、ゆっくりと瞼を開く。

見ると、先程までバリエント達がいて、今なお黒煙が立っている中に、何やらメカニックな白馬に乗った人がいる。青年と言うのが相応しいだろうか。漆黒の服に身を包み、鈴が持っている双天牙月の連結させた形態に似た黒い剣を右手に持ち、左手には、拳骨ぐらいの大きさはあるだろうか、緑色に輝く宝石を持っていた。あの馬のような物がＩＳなのだろうか。ＩＳを装備しているのだろうが、どこに装備しているのか分からない。その位生身のままなのだ。

？「ふう…。ご苦労だったな。オーディン」

その青年がそう言うと、乗っている白馬は白い光となって青年の懐の中に入っていった。
…つまり、あの馬はＩＳではないのか。未だに浮いているしな。

？「さてさて。なんとか間に合ったみてぇだな。落ちてるような雑魚じゃなくて良かったぜ」

青年は緑色の宝石を片手で弄びながら、我々にそう言った。

霜「…救援は感謝する。だが、お前は何者だ？」
？「おいおい。名を聞く時は自分からってしらねぇか？これだからわけぇ奴はよ…」

…尤もだが…。こんな人間は原作の知識に入ってないぞ。

？「それに、此処にはまだ軸から外れてねぇ奴も居んじゃねえか。此処で教える事は出来ねぇな」

軸……？もしや！

霜「お前もか！？…なら此処では言えないな。場所を変えよう」

私は一夏達の方に顔を向け、

霜「どうせ残っているとは思うが、早く帰還しろ。隼人、着いてきてくれ」

そう言い残し、隼人と私は近くの無人島に降りた。簪は空気を読んでくれたようだ。感謝しなくてはな。？「さて、何時までも名前の表記が？じゃ嫌だからな。さっさと名乗るか。」

無人島に降り立ち、周りに人が居ない事を確認した後、青年はそう言った。

真「俺の名は進藤真人（しんどうまひと）。まぁ、どうとでも呼べ。フォンブラウン社の副社長で、あの神に最初に転生紛いの事をさせられた人形だ。お前達の先輩に当たるか？」

…うん？

霜「人形とはなんだ？」

すると、副社長は軽く溜め息を吐き、

真「俺はアイツによって創造された存在なんだとさ。世界毎に時間枠はぶれまくってっからどうでもいいんだが、今世ではこのなりでも…どんぐれぇだ？大体数十億か？そんぐれぇは生きてるな」

隼「数十億！？本当に人間じゃない…」

真「そうでもねぇぜ？ただ転生条件に『不老不死』を付け加えればいいだけだからな」

…色々と突っ込みたいところはあるが、転生者に常識は通用しないからな。

そう考えた時、プッと副社長が笑った。

真「『転生者に常識は通用しねえ』か。あの緑も常識がどうこう言ってたな…。クックック…。」

暫く下を向き肩を揺らしていたが、

真「わりいな。こっちの話だ。さて、本題に入ろう」

急に真剣な顔になり、私と恐らく隼人は緊張した。

真「今回の事件は、我々フォンブラウン社のＩＳ支部のデモンスト

レーション中に、防衛用ＩＳ『バリエント』が暴走した事により起こった」
…我が社のＩＳが暴走だと？例のアメリカのガラクタじゃあるまいし、外部からハックは出来ない筈だが…。

真「今回の暴走は外部からのハックにより起こされた。原作に合わない事柄からこの物語の歪みかと思われるが、今回俺が介入しなかったら不味い事になっていただろう。我が社の施設を使い、万一の事に備えてくれ。だそうだ。社長からな」

そう言うと、副社長は軽く伸びをし、

真「まぁ、なんだ。こんなのは俺が見てきた転生者達によくあるパターンだからな。なんとかなるだろ。俺からは以上だ。何か聞きたいことあるか？」

さっさまでの雰囲気は何処へやら。緊張感の欠片もない感じでそう言った。

霜「どうやってあのバリエント部隊を一掃したんだ？」
真「ああ、そのこと言ってなかったな。」

副社長は頭をかきながら、

真「まずな、この宝石の力を借りて一時的に時間を止めた…って言やぁいいか」

そう言って、懐からさっきの大人の拳骨ぐらいの大きさがある、緑色に輝く宝石を取り出した。

真「こいつは『カオスエメラルド』ってな。俺が能力で創った宝石だ。こいつの力を使って時空を歪めた訳だ」

そう言うと、また宝石を懐に仕舞い、今度は白い石を取り出した。

真「来い。オーディン」

すると、石から光が溢れ出し、白く光る線が副社長の隣に集まり、白黒合わさった大きな騎士が姿を現した。
その騎士は、黒い鎧を着て、さっき副社長が持っていた黒い大剣を持ち、鎧の隙間から見える肌（？）は白い色をしていた。

真「こいつは俺が創った召還獣…式神…まぁ、好きに呼べ。とにかく、俺が創った『オーディン』だ。こいつの剣は斬鉄剣ってな。それでスッパリ真っ二つって訳だ。こいつに馬になってもらって、その上に乗り暴れた訳だな」

一気に話したせいか、深く息をついた。

霜「オーディンて…神じゃないか？」

真「気にすんな」

所々適当だが、なんとなく分かった…ような気がする。　あくまでも気がするだけだ。

霜「なんだか…色々とチートだな」

思った事を言っただけなのだが、

真「ハッハッハ！それはお前等も同じだろ」

だがな、と副社長は付け加えて、

真「ま、力なんて重要じゃねぇ。っても、俺じゃ説得力ねぇかもしんねぇがな。要は行動にかかってるんだ。力は良くても中身悪けりゃ最悪だろ？ま、何を良しとして何を否定するかは各々次第だがな」

とても良いことを言っているように聞こえるが、未だ肩を震わせて

いれば雰囲気もクソもない。

真「…あ〜…。こういうのは苦手だ…。要は、力に溺れず己の意志を貫けって事か？まぁ、そんな感じだ」

それから、がしがしと後頭部を掻きつつ、

真「俺はもうこの世界には来ないからな。もしかしたら、月でまた会うかもな」

霜「ああ。色々助かった。ありがとう」

隼「助けてもらってありがとね」

真「ああ。じゃあな」

言った途端、副社長の姿は消えた。どういう原理だかは知らないが、チート人間に常識は通用しないという事を言っておこう。

その後、結局海上で待っていた一夏達と合流し、全員無事に帰還する事が出来た。既に周りは暗かったので、一般生徒を起こさないように行動し、就寝した。勿論飯は食べた。

まさかあの違和感がこんな物だったとはな…。明日は整備三昧か…。はぁ…寝るか。

明日の事を考えると気が滅入るので、さっさと寝た。

…長い1日だったな。

To be continued…

20話　（俺はここで終わるのか？）（後書き）

次回で臨海学校は終わります…かな？

21話　「これで我慢していただきたい」（前書き）

ユニーク100000、PV770000突破しました！

見ていただき、感謝感激です！

では…どうぞ。

21話　「これで我慢していただきたい」

side　枢木隼人

皆さん、お早うございます。

あの戦闘から一夜明け、今は日が昇り始めたところ。当然皆はまだ寝ている。

…もう寝顔チェックは止めよう。あんな痛い思いをしたのに、得る物はなにもなかったからね…。

さて、今からじゃ眠れないしなあ…。外に行くか。

僕は、窓からこっそりと外へ出た。ここ何階だったっけ?ま、いっか。

朝日を浴びた海もまた綺麗だな。

何故かそこら中に弾痕や抉れた跡がある砂浜を歩きながら、海に映る太陽を見ていた。

隼「短いようで、長かったねぇ…。この世界は退屈しないよ…」

語調は嫌そうに、けれど微笑みを浮かべながら、そう呟いた。

と、岩陰にチロチロと銀色の物が動いているのを見た。

隼「あれは…ラウラかな？」

そーっと背後から近付くと、何故かＩＳを装備したラウラが辺りを見回していた。こんなに近付いても気付かないって事は、また一夏が何かやらかしたのかな？

隼「な～にしてるの？ラウラ？」
ラ「！」

背後から声を掛けたのがいけなかったのか、振り向きざま手のプラズマ手刀で攻撃してきた。

隼「うわっと…。あっぶないな～」
ラ「…隼人か。済まない」
隼「いやいや。何てことないって。んで、浮かない顔…って言うか怒ってるのかな？どしたの？」※何てことないと言っていますが、避けてなければ、というか普通の人なら死んでます。

ラ「む…。私は今そんな顔をしているのか？」
隼「うん。とても仏教面だね。一夏の前では赤くなって可愛かったのに」

お世辞じゃないよ。本音だよ。のほほんさんじゃ無いけど。

ラ「かわっ！？…止めてくれ。慣れてないんだ」
隼「そっか。じゃそういう事にしておくよ」

おお、視線が痛いねぇ。こわいこわい。

隼「で？また一夏関係かい？」
ラ「…はぁ…。さっきまでそうだったのだが、調子が狂った」
隼「…ふ～ん。そっか」

言い終わると、また朝日を見た。綺麗だねぇ…。

ラ「なぁ…。何でお前達はそんなに強いんだ？」
隼「うん？……強くなんか無いと思うよ？今回だって負け戦だったしね」
ラ「いや、あの動き、力を見て強くないと思わない方がおかしいだろう」

…う～ん。何か違うんだよねぇ…。

隼「ラウラはさ、強さって力だと思ってない？」
ラ「…ああ。一夏や教官にも違うと教えられたのだがな」

…そっか。

隼「僕も霜月君も弱いところなんていっぱいあるし、ラウラだって強いと思うよ？」

ラ「私が…か？」

隼「うん。でもね、強弱なんて誰が決めるのかな？視点によっても変わるしね。勿論、力があるから強いって考えも有りだと思うよ。」

何やらラウラが難しい顔になってしまった。うーんと、

隼「昔誰かが言ってたんだ。『強者など何処にもいない。人類全てが弱者なんだ』ってね。結局、強い人なんてどこにもいないんじゃないかな？」

ラウラは少し考えた顔をして、

ラ「人類全てが弱者…か。そうかもしれないな」

そう言って、どこか分かったように、笑みを浮かべた。

隼「ほら、笑えばとても可愛いんだから、一夏だってイチコロだよ？」

ラ「……／／／／」

ラウラは何も言わなくなり、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

隼「おっと、そろそろかな。また後でね。ラウラ」

そう言って、宿の方向に歩き出した。

ラ「やはり、強いじゃないか……」

ラウラが何か呟いた気がしたけど、気のせいかな。

…霜月君は、既に部屋に居なかった。どこ行ったんだろう？

ｓｉｄｅ　霜月一

霜「…居た。全く、手間をかけさせないでいただきたい」

ここは海岸の崖の上。隼人が部屋を出た少し後、私も抜け出し、ある人を捜していた。

篠ノ之束だ。

海岸沿いに歩いていき、ふと、原作と同じ所にいる予感がしたのだ。そして、それは見事に的中した。崖に座り、昇る朝日を見ていた。

束「…君か。何か用？」

明らかに警戒されているな。全く、面倒な人だ。

霜「これを」

言って私はメモリーを投げた。こちらに背を向けていた束は、落としそうになりながらもそれを受け取った。

中に入っているのは、我が社でかなり昔に段階に開発された『プロトタイプビット』のデータ。プロトタイプではあるが、ビームを撃つタイプの遠隔操作武器なので、ブルーティアーズは超える性能はあるだろう。

ただ、私の『ウイングビット』と同様に高度な空間認識力、並行処

理能力、そして脳波が必要で、とても一般人はおろか無人機で操作するのは難しいだろう。

霜「この位しか情報提示は出来ません。これで我慢していただきたい」
束「…なにが望み？」
霜「…望みなどありませんよ。ただ、一夏達を危険にあわすのは止めていただきたい」
束「…何のこと？」

何のこと…か。
福音を暴走させたのは間違いなくこの人だ。妹の初舞台、ただそれだけの舞台の為に。
しかし、バリエントを暴走させたのは束ではないだろう。それだけの技量を束は持っていないのだから。

霜「一夏達に、四世代という”パンドラの箱”を与えたのは誰でしょうか？」

そう、一夏や箒はどこの国家、企業にも所属していない。おそらく二人は世界中から狙われるだろう。或いはそれが目的なのか？

束「…ちゃんとちーちゃんが守ってくれるよ」
霜「…フッ…。そうですか。では、そうしておきましょう」

こちらから束の顔は見えないが、きっと訝しげな顔をしているだろう。

束「ねぇ。君達のＩＳはどうなってるの?私だってあんなの作れないよ」

束はこちらに振り向き、いつものふざけた表情はどこへやら、真剣な顔でそう聞いてきた。

霜「…それを教える事は出来ませんが…。只一つ、チート（我々）に常識は通用しません」

こう、私は言った。

束「…そっか」

束も無理だと思ったのだろう、それ以上は何も聞いてこなかった。

…暫く沈黙が続いた。

霜「さて、そろそろお暇させていただきますか」束に聞かせるわけ

でもなく、そう呟いた。

霜「ＩＳデビューの時のミサイルに然り、この間のゴーレムに然り、今回の福音に然り、周りの人にまで迷惑かける行動は謹んで頂きたい」

霜月の声に驚いたようで、束は後ろを振り向いたが、既にそこには誰もいなかった。

霜（…決まった！）

宿の中で、密かにガッツポーズをとった霜月だった。

短いようで長かった臨海学校も、今日が最終日だ。一般生徒はＩＳの搬入作業をしていたが、私達は休みを貰っていた。といっても、私、隼人、簪は自機の整備で結局休めなかった。あの時作ったハロが、こんな時に役立つとは思わなかった。

１０時頃。搬入作業も終わり、各々バスに乗った。何故か一夏は疲労困憊、いつもの５人は様子がおかしかった。箒はぼーっとしているし、セシリア、シャルロットは終始不機嫌そうな顔をし、ラウラ

は何やら考え事をしているのだろう、険しい顔をしていた。鈴は二組でなので此処にはいない。が、恐らくセシリア達と同じだろう。まぁ理由は知っているのだが、ラウラだけ何故か原作と違う。ま、懸念事項ではないだろう。

一夏は水分を欲しているようだが、見事にスルーされている。我々は水を持っていないから、渡しようがない。

と、ふいに箒、セシリア、シャルロットが立ち上がり、一夏に声をかけた。凄い。挙動がぴったりだ。

箒、セ、シ「「「い、一夏っ」」」
夏「はい？」

…見事にハモっているな。驚きだ。

三人の声が同時に聞こえた一夏は振り向く。と同時に、車内に見知らぬ女性が入ってきた。

確か、ナターシャ……何だったか？あの福音の操縦者だ。お洒落全開のブルーのサマースーツに、黒いサングラスという装いだ。一言で言うなら…大人な女性だ。

ナ「ねえ、織斑一夏くんっているかしら？」

ふむ、私は入っていないか…。良かった…のか？

夏「あ、はい。俺ですけど」

素直に返事をする一夏。気付け、周りの、主に三人の視線を。ラウラ、考えすぎてはないか？

夏「あ、あの…。貴女は……？」

ナ「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』（シルバリオ・ゴスペル）の搭乗者よ」

言うなり、ナターシャは一夏にキスをした。周りの三人と、後ろにいる復活したラウラの様子を擬音で表すなら……

ピシッ！

…か？取り敢えず、何かが割れた音がした。

ナ「じゃあ、またね。バーイ」

元凶であるナターシャは私と隼人に一瞥くれた後、バスを出て行った。

残されたのは、呆然としている一夏、血管が浮き出ている箒、俯いて髪で顔が見えないセシリア、凄く笑顔のシャルロット、後ろで殺気を物凄く出しているラウラのみだった。隼人はお昼寝中。私は傍観中だ。

そして、一夏は５００ｍｌペットボトル×３を投げつけられた。良かったな一夏。予定よりも一つ少ないぞ。

さて、楽しんだ。私も寝るか……。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

此処はバスの外。千冬とナターシャが話をしていた。

冬「全く…。余計な騒ぎを起こさせるな…。鎮めるのが面倒だ」
ナ「思ってたよりもいい男性だったので、つい」

笑顔で舌を出し、おどけてみせるナターシャ。千冬はやれやれといった具合でそれを見ている。

ナ「…あれがブリュンヒルデの言っていた『悪魔』と『騎士』？」
冬「……ああ」
ナ「ふ～ん。いい男だったのにな～」

ナターシャはふざけた口調だが、さっきとは打って変わり、二人共真剣な顔をしていた。
因みにブリュンヒルデとは、ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』の総合優勝者に授けられる称号だ。千冬はこう呼ばれるのは好きではなかったが、今ではそれ程不機嫌にはならない。

冬「まぁ、彼等自身に害はない。それより、暫くは大人しくしていろよ？この後も査察委員会だろう？」
ナ「それは忠告ですか？ブリュンヒルデ」
冬「……いや、アドバイスさ」
ナ「そうですか。では、暫くは…大人しくしていましょう」

二人の会話はここで終わり、千冬はバスへ、ナターシャは外へ、それぞれ歩き出した。
その背中同士は、また会おう、と語っているようだった…。

ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥ！！

21話　「これで我慢していただきたい」（後書き）

次から夏休み。

オリルートに入る…かな？

22話　「これは契約」（前書き）

やっと更新出来た…。

初心者の私には、少なくても皆様の応援やＰＶ、ユニークに大変元気付けられています。どうぞ、これからも宜しくお願い致します。

夏休み編突入です。夏休みは、原作とはあまり当たらないようにします。…といってもたまには当たりますよ？

今回はオリジナルです。

では…どうぞ。

22話　「これは契約」

side　霜月一

――夏休み初日――

翼「サテライトキャノンに頼らずにかつチャージをしない広範囲武装と、サテライトキャノンのチャージ率向上？」

私は、フォン・ブラウンの研究所を訪れていた。

霜「ああ。天候によって使えないのは不便だった。チャージ無しでないと上手く立ち回れないのでな」
翼「ふーん。大変なんだねぇ。分かった。開発してみるよ」
霜「ありがとう。恩に着る」
翼「なに、それが仕事だからね」

翼は、自身の前に浮いているディスプレイに私の希望をメモをしていた。

翼「うーん…。君達の夏休み中には終わりそうに無いねぇ」
霜「…済まないな。休み無しで」
翼「なんの。これが僕に課せられた条件だからね」

霜「…そうか」

私は研究所を後にしようとした。その時、

翼「あ、忘れるとこだった。ＩＳビットの量産型一世代が完成したよ。データ採りありがとう。既に配備してあるから、後で使ってみてね」

霜「ん、ああ。分かった」

整備が終わった我が愛機、それに簪の斬鉄を持って研究所を後にした。

――――――

――――

さて、現在私はアリーナにて新型のテストをしている。

といっても、Ｐ－Ｇビットと、新型『Ｇビット』では、期待性能しか差がないので、動作確認と操作確認ぐらいで終了した。

…特に特筆すべき事でもなかったか？

――――――

一一一

家に帰ってくると、簪は学園の課題をやっていた。因みに私も一緒にやっていたのだが、ものの2、3時間で終わってしまい、こうして研究所に行っていた訳だ。邪魔しても悪いしな。

簪「一？どこ行ってたの？」

簪も、あれからまだ声は小さいが、普通に話せるようになってきた。筆者の手抜きでは断じてない…何を言っているんだ？

霜「ん、研究所に出掛けていた。邪魔するのも悪いと思ってな」
簪「…終わったなら手伝ってよ…」
霜「自分でやらなくては意味はあるまい」
簪「…けち」

そういうと、簪は頬を膨らませながら再び課題に取り掛かった。

霜「そろそろ昼だ。切りのいいところで休憩だ」
簪「分かった」

…何はともあれ平和だ。これで良いのかもな。

だが、この時私は気付きもしなかった。ニュータイプの力を以てでも感じ取れない、これから起きる事件を……。ｓｉｄｅ　枢木隼人

隼「はぁ～しんどい」

臨海学校の前に行われたテストで、散々な目に遭ってしまい、ごく、ごく少数の人と共に勉強をしていた。共にしていたのは、何を隠そう一夏である。ま、しょうがないよね。うん。

隼「どうせもう就職してるんだから、こんな勉強しなくてもいいと思うけどな～。はぁ…」

今は自室に向かう途中の廊下。

霜月君と簪さんは月に行った。仲良くていいねぇ。羨ましいや。

…はぁ。さっさと寝よう。そうしよう。

―――

そうして、僕は自室の前に来た。そして、ドアノブに手を掛け……

ガチャ

？「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それとも……
…」

……最早？にする事もないかもしれない。我らが学園生徒会長、
更識楯無会長だ。裸エプロンという装いだが、どうせ下に水着でも
着ているんだろう。

今は相手にするのも面倒臭くて、自分より少し小さい楯無の腰に手
を当て（この時に何か喘ぎ声が聞こえたが気にしない）、その場で
１８０度回転。楯無を部屋から出すと、そのまま扉を閉めた。

楯「ちょ…！何か反応してよ！ていうか制服返して！」

どうやら此処で着替えたらしい。迷惑甚だしい。
ペッと扉から一式を投げ出すと、そのまま鍵を閉めた。

楯「ねぇ～！話したい事があるの～！」

因みに現在午後六時。いくら人が少ないからって迷惑ではないだろ
うか？

隼「…疲れてるんです寝させてくださいどうせまた中に入ってくるんでしょうから明日話しましょうそうしましょうお休みなさい」

外で楯無が何か騒いでいるような気がしないでもないが、既に意識は沈みかけていた。もう何も聞こえない……。

――――――――

――――――

――――

外で蝉が鳴いている……。朝日が眩しい…。どうやら朝までずっと寝ていたらしい。不健康かな？

意識がぼんやりとしたまま、取り敢えず布団の中で体を動かす。

プニッ

……ん？

指先に当たった感触に違和感を覚えた僕は、布団をゆっくりと持ち上げた。

…そこには青の髪。とてもいい匂いがする。先程（といっても昨晩だが）追い払った筈の楯無会長は、やはり侵入してきていた。問題は、起こそうと思って裸エプロンでベッドに入ってきたのだろうが、何故かエプロンは脱げ、白い肌を露出させた水着姿でスヤスヤと寝息をたてていた。

自分の指先は…腹の辺り。太りすぎず痩せすぎず、絶妙なラインで……これじゃ変態みたいじゃないか。

一夏だったらひっくり返って泡吹いて気絶するだろう（因みにそこまではしない。以前ラウラに裸で侵入されているので抗体はある）。しかしそこは僕。意趣返しのつもりで、楯無会長を抱き締めた。決して下心が有るわけではない。うむ。

楯「んっ……朝？」

どうやら会長もお目覚めのようだ。寝ぼけ眼を私に向け、ゆっくりと自身に向け、暫くしてバッと私を見て、自身を見た。顔…いや、身体が赤く染まっていくのがわかる。

楯「キ……」

不味い。これは女子の得意技、金切り声だ。なんとしても止めなきゃ。

隼「シー。今は朝ですよ。周りに迷惑です。」

会長の口元に人差し指を当て、さらに会長を胸に押し付けてから再び眠りに落ちた。
会長は……寝れたのかな？

時刻は午前１０時。流石に寝過ぎだろうと思うだろうけど、それ程疲れていたという事だ（とは言え十六時間も寝たのだが）。

隼「ん～。よく寝た～」

布団から起き、伸びをする。身体の関節が音を鳴らすのがまた心地良い。

隼「さてさて、会長は…？」

布団の中を見てみると、真っ赤に茹で上がった会長が気絶していた。
どことなく嬉しそうなのは気のせいだろう。そうに違いない。そう願いたい。

隼「会長～。朝ですよ～。話したいことさっさと話して出てって下

さ〜い」

しかし、一向に目覚める…いや、覚醒しない。こうなったら…

隼「会長が夜這いに来たって織斑先生に報告しますよ?」
楯「それだけは止めてっ！」

恐るべし織斑先生。此処にいなくてもその力を発揮するとは。
会長は跳ね起きた後、自分の装いと状況を再確認し、胸を守るように手を交差させ、頬を赤らめ、上目遣い（ちょっと涙ぐんでいる。多分演技）で、

楯「……エッチ……」
隼「どの口が言いますか…。はぁ…。で?話したい事って何ですか?さっさと話して出てって下さい」

半ば…いや完全に呆れながら言った。が、会長は未だ顔を赤くしながら、

楯「その前に…着替えさせて?」
隼「着替えればいいじゃないですか…」

そう言うなり、脱兎の如くバスルームに飛び込んだ。

一一一

数十秒後、制服を着た会長がほんのりと頬を赤く染めながら出て来た。

楯「…えっと…ゴメンね？」

隼「少しは恥じらいを持って行動して下さいよ…」

うん？お前が言うなって？いいじゃない。

会長はこれまでのおふざけモードから一転。真面目な顔になって質問した。

楯「さて…。あなた達は何者？簪ちゃんも巻き込んでるの？」

…あ〜。やっぱし…。どうしよ？霜月君居ないし…。

隼「何度も言いますが、それに答えることは出来ません。以上、サヨウナラ」

楯「誤魔化さないで。私を襲ったって織斑先生に報告するわよ？」

…ここで織斑先生か…。襲うの部分は可笑しいけれど…

隼「別に言えばいいじゃないですか…。面倒臭い」
楯「言ったら多分追加の課題に罰則にｅｔｃ．．．。大変ね」
隼「スイマセンやめて下さいお願いします」

…恐るべし織斑先生。この場に居ないのにこの威力とは…。

楯「じゃあ、答えてくれる？」
隼「はぁ…。万事休す、かな？」

やはり呆れながらそう呟くと、

隼「そうですか…。そんなに知りたいんですね…」

隼人は態度を変え、どことなく暗い雰囲気を醸し出した。

楯「ええ。どうしても、よ」
隼「なら…。これは契約。我々の事を知る代わり、私の願いを一つ叶えていただきましょう。これを知れば、貴方はこの世界に生きながら、この世界とは違う理で生きる事になります。異なる摂理、異なる時間、異なる命…。この情報は貴方を世界から孤独にします。その覚悟があるのなら……」

会長は頭に？を浮かべながら、考え、結論を出した。

楯「覚悟なんてとうにあるわ。結ぶわよ！その契約！」

…ふむ。まあ、良いよね？

楯「…ところで、今の何？」

隼「気にしないで下さい。どうせならセシリアに言ってほしかったんですけど…。じゃ、話しますか」

…こうして僕は話した。僕達の事、簪さんの事、この世界の事、僕の好きなアニメｅｔｃ．．．。え？最後のは要らないって？いいじゃないの。

会長は最初こそ半信半疑だったけど、ちゃんと信じてくれた。対暗部用暗部の訓練とかで嘘を見抜けるのかな？どうでもいっか。

楯「貴方達の事情はわかったわ。…ところで、叶えてほしい願いってなに？」

隼「あ。なんとなく言っただけで特に決めてなかった…」

楯「…え？もしかして、おねーさんの身体とか…？／／／／」

無視。うーん…。どうしよう…。あ、そうだ。

隼「会長……。いや楯無。僕に恋をさせてくれないか？」

楯「……は？」

ここに、僕と楯無の契約が成立した。ｓｉｄｅ　霜月一

――夏休み2日目――

……何故だ？

何故、楯無会長が家の前で仁王立ちしているんだ…？

話は数時間前に遡る。

私は箸を起こし、一緒に朝食を食べていた。本日は納豆ご飯に味噌汁に鮭（全て月産）という、日本に良くありがちらしいが前世ではあまり見たことがない朝食を食べた。流石月製、美味い。

余談だが、箸は未だ身体の一部の接触、要するに手を繋ぐのさえ躊躇している。明らかに同棲していると思うのだが、いまいち境界線

がわからない。

話を戻そう。
その後、仕方なしに勉強を教えていたところで異変は起きた。
何故か、ここの住人の物ではないプレッシャーを感じたのだ。このプレッシャーは学園内で感じた物だ…。
そして外を見てみると、家の前で仁王立ちしている楯無会長、後ろに呆れている隼人を見つけた。

霜「はぁ…。いつかこうなるとは思っていたが…。面倒なものを連れてきたな…」

因みに簪には聞こえないように言っている。失礼だからな。

霜「簪。外に君の姉がいるのだが、入れても良いか？」
簪「お姉ちゃんが…？うん、いいよ」

が、いざドアノブに手を掛けると、体を激しい虚脱感が襲った。理由は簡単。面倒なのだ。

はぁ…。深い溜め息をつき、玄関のドアを開けた。

霜「……理由は聞きません。入るなら入って下さい」

短くそう伝えると、さっさと室内に戻った。なんかもう、面倒だ。

隼、楯「お邪魔しま～す」

とても息がぴったりだった。そこまで仲がいいのか…？

一一一

簪は困惑した眼差しを此方に向けている。
会長は気まずい雰囲気の中、隼人の右腕に抱きつきながら簪を見つめている。
隼人はこの状況を楽しんでいるようで、どこか皮肉めいた笑みを浮かべている。
そして私は……とても、とても深い溜め息をついた。最近は溜め息ばかりだ…。

…沈黙が続く。この沈黙を脱しなければ話は進まないのだが…。私が先陣をきるしかないのか…。

霜「隼人。その様子だと、会長も軸を外れたらしいが、どういうことだ？」
隼「……仕方なかったんだ。あんな大切な物を人…じゃないな、質

にとられちゃね…」

…隣で会長もとい楯無はニヤリとしている。質にとられたのが何なのかはわからないが、やはりこの人はかなりのやり手らしい。

霜「こちらの世界に来る覚悟はあるのですか？御義姉さん」

簪「お…おね…／／／」

簪が隣で顔を真っ赤にしているが気にしない。

楯「…隼人にも同じ事を聞かれたわ。大丈夫。十分あるわ」

霜「そうですか。なら、この事を口外なさらなければ大丈夫ですね」

ふむ、と考える仕草をした。まあ、大丈夫だろう。

霜「では、私は隼人と話したい事がある。簪はあっちの部屋で義姉さんと話でもしていてくれ。姉妹同士、積もる話もあるだろう」

勿論、彼女達の関係は知っている。

姉妹の行き違い、多少荒療治ではあるが仲良くなってもらいたい。

簪「え…？でも…」

楯「わかったわ。ほら、簪ちゃん。行きましょ」

渋る簪の手を楯無が引っ張っていった。私の方に軽く礼をしたのは気のせいかな。

隼「…どったの？」
霜「いや、何でもない」

無意識のうちに顔が綻んでいたようだ。気を引き締めよう。

霜「さて…。更識姉妹はまだ軸から外せる存在だったが…。メイン組にはこちらから言うことがあってはならないな」
隼「…どして？」
霜「…保証は無いが…。彼らにバラすと歪みがこの世界を崩壊させるような気がしてな。いいか？バラすなよ？」
隼「…でも、今回みたいに課題を質にとられちゃ…」

ビキッ！

霜「言うな。これは命令だ」

こいつ…。質にとられたのは学園の課題だったのか…。愚か者め。
一言だけ、満面の笑みでそう言うと、隼人も無言のプレッシャーを

感じ取ったのだろう。

隼「了解（サー）！」

…それはそれは綺麗な敬礼をした。

――――――

――

暫くして、更識姉妹も部屋から出て来た。眼が赤くなっているので何があったかは大体想像がつくが、生憎あの部屋は外部からは内部情報は一切入ってこないので、やりとりは全くわからない。が、彼女達の雰囲気から無事に和解した事が伺えた。

霜「さて、この件はこれで一件落着か？」

ここにいる全員を見回した後、そう告げた。

？「いんや。まだだぜ？」

全「！」

…どこからか声が聞こえてきた。次の瞬間、目の前にあの黒ずくめの副社長が立っていた。

真「久しぶりか？あまりここに人を連れてきてほしくねぇんだけどな…」

と、副社長は楯無をじっと見つめた。

楯「…知り合い？」

隼「僕達の企業の副社長さんだよ」

楯無は少し怪訝な視線を向けていたが、やがて視線を外した。

真「ま～た原作から人間連れて来やがって…。ったく、管理する俺の身にもなれっての」

何やら愚痴をこぼしているが、社内でも高い地位にいない我々には何の事やらさっぱりわからない。

真「さて…と。アホ社長に報告しとっか。これ以上は連れてくんなよ？」

霜「あ、ああ。了解した」

そう言うと、副社長は突然消え、後には静寂が戻った。

霜「…何だったんだ？」

隼「…さあ？」

我々は話についていけない。更識姉妹など言うまでもないだろう。

霜「…ひとまず、社長に話がいくまでは隼人の家「その必要はない」な！？」

見ると、いつの間にか社長がソファーに座っていた。どうしてこの人達は普通に入ってこないのだ？

ク「真人から話は聞いた。更識楯無氏に居住権を与えよう。これで貴女は正真正銘軸から外れたわけだ。嬉しいかい？」

楯「は、はあ…」

なんということでしょう。あの楯無が匠の手によってペースに乗せられているではありませんか。

…くだらなかったな。取り敢えず、流石神と本気で思ってしまった。

ク「楯無氏。これからはここの施設を好きに使ってくれて構わない。住居は…どうせ隼人の家に住むのか。これからも我が社を宜しくな？では、失礼しよう」

一方的に一通り話し終わった後、すぐさま帰ろうとした。なんて身勝手な。

霜「一つ聞きたい。シャルロットはどうなった？」
ク「…ああ。地球方面の社員に名義を変えておいた。これで問題ないのだろう？」

なんだかんだ言ってこの社長は仕事が速い。しかも正確でたすか…何の仕事をしているのだろうか？まぁどうでも良いか。

ク「もう良いか？では、さらばだ」

社長まで急に消えた。…頼むから普通に出入りしてほしい。

楯「…えっと……」
隼「要するに、ここを好きに使えるようになったって事。僕の家に住んでね。なんなら道案内も兼ねてデートしない？」
楯「ほんと？じゃ早速行ってみよ～！」

隼人と楯無はさっさと家を出て行ってしまい、家には呆然としている私と、未だに話の流れについていけない簪が残された。

霜「っと…。姉君とは上手く仲直り出来たか？」
簪「…え？ああ、うん。ありがとう」
霜「なに、礼を言われることではないさ」

…こうして、我がメンバーに新たな住人が加わった。正直、ついていけん。

簪「…どうしてお姉ちゃん達はあんなに仲が良かったんだろう？」
霜「……さあな」
簪「…一も、ああいうのが良いの？」
霜「……さあな」

…願わくば、この関係が永久に続くように…。

To Be Continued・・・

22話　「これは契約」（後書き）

初（？）のオリ話！
次回は…どうしましょ？

23話　プール編上「阿呆」（前書き）

更新しました！といってもめっさ短いですが。

今回は二部作、季節外れな水着ネタ（下手ですが）です。

…クリスマスはクルシミマスです。

では、どうぞ。

23話　プール編上「阿呆」

side　枢木隼人

どうも皆さん今日は。隼人です。

あの楯無事変から早3日。楯無は既にこの都市に馴染んでいます。
いやいや、順応性高すぎでしょう…。
当人曰わく、「順応性を高めて、あるがままを受け入れれば大丈夫よ♪」とのこと。流石、霜月君が目を付けていた人だね（勿論彼女的な意味じゃないよ？）。普通じゃないよ。

その楯無だけど、機体の改造及び開発は拒否した。国家代表ってそんな大変なのかな？まぁ、本人が嫌がってるなら別に良いよね。

…さてさて、長々と話をしてしまったけれども、フォン・ブラウンそのものは至って平和。夏休みもエンジョイ出来そうだね。…え？課題？あんなの後回しだよ～。苦労は短時間で十分！長々引き摺る必要無し！

…現実逃避も済んだことだし、楯無誘って遊びに行こう。

隼「楯無～。プール行かな～い？」

家の二階にいる楯無にそう呼び掛ける。因みに僕は一階。

楯「え～？課題終わらせたの～？」

返って来るのは楯無の声。ていうか…

隼「君は僕の母親か～い？」

そう突っ込まずには居られない。

楯「最後まで残しておくと後が大変よ～？」

隼「大丈夫だよ～。いざとなれば僕の能力使えばいいんだから～」

楯「隼人の力じゃ頭ないんでしょ～？」

グサッ！心に刺さったね…。痛いよ…。頭無いって…酷い。

隼「誰が馬鹿でアホなボケじゃ～！」

楯「そこまで言ってないし日本語になってないわよ～」

…意地悪。

僕と楯無は結構相性が良いと思う。言いたい事が言い合える仲が一番良いと思うんだ。
いや、彼女が合わせてるだけなのかもしれないけれど、僕は良いと思う。人の真意なんて分からないし、考えたくもない。

今は、楯無をプールに誘うことだけを考えよう。
それが一番幸せだ。うん。ｓｉｄｅ　霜月一

あの激動の日から早数日。今日は簪とプールに出掛けている。
たまには良いじゃないか、という私の意見に終始顔を赤くしながらも了承してくれた。
…水着姿が恥ずかしいのか？つい先日着たばかりだというのに…。
わからん。

この都市のプールについて説明しておこう。

この都市は、あの社長が転生させた人間や、天然チートの人間が殆どだ。よって、施設もそれに合わせて作られている。
このプールには、１００００００ｍプール（水深１０００ｍ）や津波プール、流れるプール（緩やか～激流まで）というまさに桁外れな（というか安全度無視）プールがある。いや、勿論普通のプールもあるが。他の施設も同様と考えて頂ければ有り難い。

…フォンブラウン社に常識など無いらしい。いや、転生の時点で常識外か。

私と簪は当然普通のプールに行く。先程の説明は全く意味が無いか

もしれない。

などと誰に向けて説明しているのか分からないような事を考えていたら、いつの間にか目的のプールに着いていた。簪に話しかけなかったな。拗ねているかもしれん。

霜「…簪」

簪「ん？どうしたの？」

霜「いや、何でもない」

…良かった。大丈夫のようだ。隼人から教わった事なのだが…本当にこのくらいで機嫌を悪くするのだろうか？

霜「さて…行く…か？」

視線を簪に戻した瞬間、向こうから隼人と楯無がやって来るのを確認した。

簪「…どうしたの？」

霜「……（隼人達を指差している）」

簪「……あ～」

参ったぞ。面倒なことにならなければいいが…な。

一一一

やがて、隼人達も此方に気付いたのか、手を振りながら走ってくる。
腕を組ながら。…器用だな。

隼「や～や～霜月君。奇遇だね～」

霜「…課題は終わらせたのか？」

まぁ、どうせ終わらせてないのだろうな。

隼「……（冷や汗ダラダラ）あ～、その～、ほら、大丈夫なんだよ。うん」

霜「何が大丈夫だこの阿呆」

言って私は軽くどついた。

簪「こんにちは。お姉ちゃん」

楯「…ええ。こんにちは」

打って変わって此方は更識姉妹。まだ少し緊張は解けていないらしい。…あれで完全和解は無理があったか？

霜「…とりあえず、中に入ろう」

幸先不安だが、この面子でトラブルに巻き込まれないようにしてもらいたい。これ以上は御免だ。

……平和第一。そんな主人公には叶えられない夢が頭をよぎるのだった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

23話　プール編上「阿呆」（後書き）

次回は今年中に。

ではでは。

２４話　プール編下「馬鹿者」（前書き）

まさか…こんな酷い文になってしまうとは…。
今回の作品（いえいつもでしょうか？）あまりいい出来ではありません。なんて貶してもいけないと思ってますが…。

では…どうぞ。

２４話　プール編下「馬鹿者」

ｓｉｄｅ　霜月一

隼「や～。眼福眼福～」

霜「馬鹿者」

現在、例のプールにいる。

いや、最早プールという枠組みで語ってはおかしな位、常識外れだ。中に入って驚いたのだが、上の青空には太陽が輝き、何故かある砂浜は熱く、設置されているプールもとても人工物とは思えない。紫外線まで降り注いでいるらしい。

敢えて言おう。海であると…。

そんなプールで、私は砂浜のパラソルの下で寝転がり、隼人はさっきからウロウロと歩き回り、愛しのヒロイン達は向こうの流れるプール（緩やか）でのんびりとしている。

…見事にバラバラだ。というか、誘った我々が何故泳がないのか、とも思っている。

霜（しかし…。これでは後で簪に怒られそうだな）

フッと、顔に微笑みを浮かべる。私もこういうところは彼女に依存しきりか？

すくっと立ち上がり、隼人の頭を掴み

霜「行くぞ馬鹿者」

隼「バカって言うな痛い痛い痛い」

そのまま流れるプールまで隼人を引きずっていった。

――

楯「あら、隼人達も来たの」

隼「来たって言うか連行され「プールに来たのだから泳がなくては悲しいでしょう」ちょ…」

楯「隼人も遊ばれてるわね…」

流れるプールに入ると、楯無がこちらにスイスイ泳いできた。簪は向こうで浮いている。…楽しいのか？

楯「それよりどう？おねーさんの水着姿？」

そう言ってこちらに身体を見せつけるようなポーズをとり、こちらを悪戯な目で見てくる。そのポーズは目のやり場に困る…。

着けている青い水着は…露出度が高く、スタイルのいい楯無にとてもよくあっていた。…少々小さすぎではあるが。一般の女性水着の3分の1位だろうか、明らかに彼氏用の物だ。…何を言っているのか分からないな。

そんな中、隼人だけはマジマジと楯無を見て、

隼「いーんじゃない？」

と笑顔で返している。その視線のせいか、楯無は顔を赤らめて、

楯「やん。視線がえっちぃ」

とふざけた口調で隼人に返している。周りが桃色になってきた。

…この空間には居られまい。さっさと退避だ。私はピンク色の隼人、楯無空間から離脱。簪の元へ向かった。

一一一

霜「簪」

プカプカ仰向けに浮いている簪をそっと自身の方へ近付け、名前を呼んだ。

簪「……一ぇ／／／」

身体、それも肌同士が直接触れ合ったせいか、簪の顔はみるみるうちに赤くなっていく。いや、上から直接見ているせいか？

優しく立たせると、簪は若干身を引く。その反応は地味に傷つくのだが…。

霜「…どうして逃げる…？」

簪「…あ。そ、そのね、嫌いな訳じゃないよ？でもね、そのね、はずかしぃ……」

言葉が進むにつれどんどんと声が小さくなっていく。顔が真っ赤な事から、相当恥ずかしいのだろう。あの夏の日はどこへやら、少し物悲しい。

身を捩らせながらこちらを上目遣いで見ている簪は、臨海学校で着ていた水着と同じ物を着ていた。やや姉の物よりも薄い青色で、標準よりも露出の少ない水着だ。控え目なその水着から、白い肌が覗いている。

簪「…一。視線が…」

霜「ん…済まない」

どうもこのような解説になってしまうと視線が危うくなってしまう。まぁ、当たり前と言えば当たり前なのだが…。

簪「…で、どうしたの？」

霜「いや、誘ったのにこうしてバラバラではいけないと思ってな。…といっても、何もすることはないのだが…」

普通の物話だったらここでイベントが起きるのだろうが、客足のないここでイベントは起きるはずもない。ただのんびりと時を過ごすしかない。…失敗だったか？いや、そうだな。

簪「…取り敢えず、泳ぎに行く？」

霜「…すまないな。気を使わせてしまって…」

そのまま、五十メートルプールで泳ぐ事三時間。何時までもピンク色だった隼人達と、どこかモヤモヤとした私達は、プールから帰宅した。

…敢えて言わせてもらうならば、ここ、月だよな？
この問いに答えてくれるものは無い…。

――――――――

――――――

――――

今回の外出、失敗だったのではないか？そう私は思う。待遇もそうだが、数時間水に浸かっていただけというのは相手の気分を悪くするだろう。それが彼女なら尚更…。

家に帰ってきても、簪は無言だった。やはり……？

霜「…どうしたんだ？さっきから何も話さないが…」

簪「え?何でもないけど?」

…言葉の節々に棘を感じる…ような気がする。

簪「…一こそどうしたの?さっきから黙って考え事をしているみたいだけど…」

霜「…いや、今回の事で簪に嫌われたのではないかとな…」

簪「…?どういうこと?」

霜「だから…プールではひどい事をしてしまったからな。居心地が悪かったんだ」

これは素直な気持ち。そういう類の知識はないが、恐らくプールでの対応は恋愛方面で考えればいけないものだったのだろう。

だが…。簪はくすくす笑い出した。

霜「…何が可笑しい?」

簪「もしかして、私が怒ってると思ってる?」

霜「…ああ。そうだが?」

…なにか噛み合わないものがあるな…。

簪「私は…楽しかったよ？」

…は？

霜「どういうことだ…？」

簪「こっちが聞きたいよ。どうしてそう思ったの？」

霜「いや…。簪への配慮が足りなかったと思っているのだが…」

私の答えに、やはり簪は笑みを崩さず溜め息をついた。

簪「私はＶＩＰ扱いなの？一は真面目に考えすぎだよ」

霜「しかし……」

簪「ほら、そんなことより夕食の時間だよ。お礼は何にしようか考えてたんだから」

そう言ってさっさと台所の奥に消えていく簪。その横顔はどこか楽しそうで、より一層私の頭を混乱させた。

霜「……わからん……」

恋人というのがますますわからなくなり、同時にこれが一カ月も続くかと思うと頭を抱えたくなってくる。とある夏休みの一日だった。

因みに、本日の簪の夕食はとても美味しかった。どうやって接すればいいのかわからなかったが。

霜「……女という生き物も、恋愛というものも、さっぱりわからん……」

To Be Continue・・・

２４話　プール編下「馬鹿者」（後書き）

霜月の恋愛下手を表現したかったんですが…。

とりま、今年はお世話になりました。来年もよろしくお願い致します。

皆様、よいお年をお過ごしください…。

25話　「インチキな魔法もあったもんだな」（前書き）

非常に遅くなりましたが…

明けましておめでとうございます。今年もどうか、宜しくお願い致します。

では…どうぞ。

25話　「インチキな魔法もあったもんだな」

Ｓｉｄｅ　霜月一

この夏休み、出来れば月でずっと過ごしたかった。何故なら、物語のこの世界にいない方が歪みが少なくなる……かもしれないからだ。私は余程の事がない限り、簪と月で過ごすつもりだった。簪が地球に行きたいと言ってくる、急用ができた、それらのような場合を除いて、つまりは行きたくなかった。
余程の事がない限り……

霜「何故私が生徒会の仕事を手伝わなくてはならないのだ！」

……夏休みも折り返し、隼人がやや挙動不審になってきた今日この頃。私達月グループ（私、簪、隼人、楯無）は、地球、ＩＳ学園の生徒会室で仕事をしていた。

……事の始まりは楯無の一言……

楯「ねぇねぇ一君。生徒会の仕事を手伝ってくれないかな？え？生徒会に入っても良い？ありがとう！おねーさん嬉しい！」

霜「……は？」

一言ではないだろう、とツッコまないでいただきたい。
突然家に入ってきた楯無は、簪とのんびりＴＶを見ていた私に言葉の嵐を浴びせた。嵐に呑み込まれた私には為す術も無く、事の流れに身を任せるしかなかった。我ながら情けないが…。

次の日、楯無は再び家に侵攻し、私を連行した。その顔に浮かぶ笑顔は、とても力強く、自信に満ちあふれていて、とても魅力的だった。
尤も、当時の私にそんな事を気に掛ける余裕はなかったが。

楯「まさかこんな力強い助っ人が来るなんてね。早く終わりそうで助かるわ」

まるで私達が協力するとでも言いたそうな…いや、彼女の事だ。きっと、いや絶対手伝わされるのだろう。

その後、地球に着くまで楯無は終始笑顔を浮かべ、隼人は苦笑い、簪は申し訳無さそうに俯いていた。姉妹でどうしてこんなに性格が違うのか、非常に難解な問題である。

―――――

一一一

いつも地球に行く時は、八区のゲートから飛んでいる。体内に入っているナノマシンに世界の情報とかが記録されているらしいが、正直理解できなかった。取り敢えずゲートに入れば、我々の世界に飛ぶ仕組みになっている。だが、今回降り立った場所はいつもと違った。

これまでは私と隼人が社長と会ったあのビルだったが、今は見たこともない部屋に居る。恐らく社長が移動先を変更したのだろうが、何らかの連絡があっても良かったのではないだろうか。

［社員ＩＤを確認］

天井からそんな音声が聞こえると、目の前のドアが開いた。

ひとまずその部屋から出るが、やけに近未来な造りの廊下が続くだけで、ここがどこなのか判る物は何一つ無かった。

楯「どうしたの？早く学園に行きましょうよ」

…そう言えば、隼人が楯無を月に連れてきてから、我々は一度もこっちに来ていない。…大丈夫なのか？楯無家は対暗部用暗部の家柄で色々あると思うのだが…。いや、その他にもＩＳ学園生徒会長の仕事が…今からそれを片づけに行く訳か…。はぁ…。

隼「そっか。楯無は月からこっちに来たことがないから分からないんだ。実は、僕達が前まで行き来していた所と違うところに着いちゃったんだ。多分座標が変更されたんだろうけど…」

楯「え？じゃあ…」

隼「…うん。この建物が何なのかさっぱり分からなくて、出口がどこなのか分からないんだ」

楯「…それって、かなり不味いじゃない…」

落ち込む一同。取り敢えず立ち止まっていても始まらないので、辺りを散策する事にした。

――歩くこと数分――

歩き回ること数分。未だに何もつかめていない。社長に説明でもしてもらおうかと考えたその時、

？「あれは…霜月君に隼人君？」

後ろから聞いたことのあるような声が聞こえた。

声のした方に振り返ると、

霜「君は…シャルロット・デュノア？」

ＩＳ学園の制服を着たシャルロットが、そこにいた。

シャルロットの話によると、ここはフォンブラウン社の本社（この本社とはＩＳ部本社ということ。当然シャルロットは知らない）で、驚くべき事に此処は太平洋のど真ん中にあるらしい。交通手段は空、つまり飛行機が主になっている。ＩＳでも可だが。シャルロットは、私がデュノア社のいざこざから離すために入社させたここに来ていて、偶然会ったらしい（何か社長の陰謀のような気がするが、気のせいであろう。そう願いたい）。

シ「霜月君達は道に迷ってたみたいだけど、昔からここの社員なら、来たことある筈だよね？」

霜「…ああ。ここは最近立て直したばかりで、私達も初めて来るんだ。出入り口が分からなくなってしまってな…」

勿論嘘だが、内心ヒヤヒヤしている。嘘をつくのは余り得意ではないんだ…。何故か嘘をつく技術は転生条件に含まれなかったらしい。

シ「ふ～ん。確かにここ広いもんね。さっき係の人に貰った内部データを転送するよ」

霜「ありがとう。助かる」

空中投影型のウィンドウを開くと、シャルロットから送られてきたデータを閲覧した。
私達が来た最上階は特殊ＩＤが無いと入れないらしい。恐らくナノマシンの事だろう。

地球分社なのにかなり広く、かつ何に使うのか分からない部屋が多くある。ビル内にＩＳアリーナがある点については当たり前だろうか。

霜「助かった。では、また学校で会おう」

シ「うん。またね」

シャルロットはまだ見て回る気らしい。まぁ、本社に続く手掛かりなど無いだろうから大丈夫だろう。

すれ違いざま、

霜「一夏に気付かせるのは難しいぞ？」

シ「！！／／／／」

シャルロットを赤くさせた。反応が分かり易いのは考え物だと思うが、これも一興だろう。

――――――――――

――――――――

――――――

それから数時間後、私、隼人のＩＳに搭載された強力なステレスシステムを使い、かつアローケル（長距離高速移動形態）に四人乗り（両腕に隼人と楯無、簪は私の後ろ側でアローケル背部とドッキングしている。定員オーバーだ。仕方ない）で移動した。
アローケルのブースターが使い物にならなくなってしまったが、比較的早く着くことが出来た。

そして話はやっと冒頭へ戻る。

――

霜「何故私が生徒会の仕事を手伝わなくてはならないのだ！」

楯「文句言わないでさっさとやる～」

簪「……こんなお姉ちゃんでごめんね、一……」

ＩＳ学園の生徒会室は、現在非常に混沌としていた。長方形の大机には、楯無を中心に私、簪、隼人が座っている。

楯無の後ろには、私と同じクラスである布仏本音（のほとけほんね）、通称のほほんさん（使っているのは一夏と私だけ…か？）とその姉である布仏虚（のほとけうつほ）先輩が立っている。先輩は苦笑いを浮かべているが、のほほんさんはいつも通り無邪気な笑みを浮かべている。

…ところで、さっきまで机に突っ伏したまま動かなかった隼人は、何故いきなり立ち上がって深呼吸しているのだろう？

隼「すぅ～。はぁ～。ん！」

急に息を止め、腹に力を込めたかと思うと、

隼「ガァァァッツツ！！！！」

あろうことかチート能力まで使った、かなり大きな声で叫んだ。窓にヒビが入ったじゃないか…。

私と隼人以外は、目玉を見開いて驚いている。私はというと、手を頭にあて呆れていた。

隼「は～い。今からあなた達は仕事をしたくなりま～す」

霜「…それは間違ってもお前のやる事じゃないだろう…」

隼「だって君と僕しか分からないじゃないか」

霜「だったら余計にやることは無かっただろう…」

私達が話していると、呆然としていた楯無が漸く正気になり、

楯「…ねぇ、隼人。今の何？」

衝撃を受けたのだろうか、頭の上で星が回っているような状態でそう聞いてきた。

隼「えっとね、今のはガッツの魔法って言ってね。元気が出て仕事がはかどる魔法なんだ」

霜「インチキな魔法もあったもんだな」

楯「どう見ても使い物にならなくなってるじゃない！」

改めて周りを見てみると、簪はまだクラクラしているし、布仏先輩もソファーに座っている。のほほんさんは先輩に引っ張ってこられたのか、ソファーの上で横になりながら完全にダウンしている。元気が出るどころか全滅である。

隼「……ありゃりゃ。ごめん」

楯「…はぁ。まぁいいわ。休憩にしましょう」

机に向かっていた面々も、ソファーに移動した。簪は私がおぶった。

一一一

楯「あら、これ美味しいわね」

ちょっとの休憩がいつの間にかティータイムになっていた。

休憩を予測して持ってきたフォンブラウン社製茶菓子を食べながら、のんびりと時を過ごしていた。

…さっきからのほほんさんが凄い勢いで菓子を食べている。そんなに珍しいのか？

の「ん～。おいし～。しもづーこれどこで買ったのー？」

霜「……私の故郷にある馴染みの店だ。あと、しもづーは止めてくれ」

のほほんさんはよく人をあだ名で呼ぶ。一夏は”おりむー”と呼ばれていたな。私は”しもづー”、隼人は”くるるん”のようだ。隼人が呼ばれた時、腹の中で大爆笑した私は悪くないと思う。かく言う私も、非常に恥ずかしいので止めてほしいのだが、恐らく止めないだろう。

楯「貴方のおかげで予想以上に早く終わりそうね。助かったわ」

霜「…出来れば強制連行は止めていただきたいな」

楯「あははっ。分かってるわ。もう生徒会役員なんだから連行はしないわよ」

霜「そうk…今なんて言った？」

楯「だ・か・ら、貴方は副生徒会長で～す」

霜「……拒否権は？」

楯「無いわよ？」

この人は、いつもぱっと決めてすぐ行動に移す人だ。その行動力を仕事に生かせと言いたいが、それは無粋だろう。

霜「はぁ……。分かりましたよ、やりましょう。隼人はどうするんですか？」

そう言って、壁側のソファーで横になって寝ている隼人を見た。こいつ、殆ど何もしてないな…。

楯「隼人は…そうね、適当に書記にでもしましょう。仕事自体は虚ちゃんがやってくれるわ。」

霜「のほほん…いや本音さん「呼び捨てでいいよー」…本音が書記だった筈だが？」

楯「…そこについてはノータッチでお願い」

そう言う楯無の顔には、少し翳りがあるように見えた。
何か触れてはいけない領域だったのだろうか…。

※因みに、この翳りは本音が居た事により増えた仕事を回想しているだけである。霜月は完全に負の方向で考えているが、そうでもなかったりする。

霜「…失礼した」

楯「…いえ、大丈夫よ」

何となく気まずい雰囲気になってしまったな…。さて、どうしようか…。

霜「休憩もこの位で良いだろう。私は仕事に戻る」

楯「そうだった。私もそうしましょう」

それからは、私、楯無、虚先輩の3人で仕事をこなしていった。ぐっすりと寝ている隼人、すやすやと寝息を立てている簪、すっかり菓子を食べ終え、満足顔でお茶を飲んでいるのほほんさんは戦力外だ。隼人には少し制裁が必要かもな。

霜「…隼人はどうだ？」

ふと、楯無にそんな事を聞いてみた。大した返答は期待していない、気軽な話だ。

楯「そうね…。まだ期間が短いからどうとも言えないけれど、一筋縄ではいけそうもないわ。貴方と同様に、でも貴方とは違うタイプだわ」

霜「…ほう、違うタイプとは？」

楯「貴方は恋愛慣れしていないわ。それこそ、第三者から見てもね。でも、彼はとても恋愛慣れしてる。付き合った回数が多いのでしょうね。それだけの違いかしら」

なかなか痛い事を言ってくる。
恋愛経験か…。あいつは転生前、どんな人生をおくってきたのだろうか。勿論調べなどしないが、偶に気になる。

虚「お嬢様、高1にしてそのような方と…いいのですか？」

楯「お嬢様はやめてよ。大丈夫、貴方が考えているような人ではないわ」

虚「…失礼しました」

まぁ、仕事もせずにぐっすり寝ているアイツの事はいいか…。
残る書類も後少し。恐らく学園祭前も同じような感じなのだろう。
頭が痛くなってきたのは気のせいではないはずだ。

仕事は案外早く終わった。まだ日は暮れていないが、空は赤く染まり始めている。学園に着いた時間を考えれば、仕事時間はおよそ六時間位だろうか。机一面に積まれた書類を良く片付けられたものだ

と思う。

楯「ふ～。これで終了よ。お疲れ様」

霜「ああ。お疲れ様」

簪「……あれ？何時の間に寝てたんだろう。仕事、終わっちゃった？」

隼「ｚｚｚｚｚ…」

の「終わったのー？お疲れ様ー」

虚「終わりましたね。お疲れ様でした」

各々労いの言葉を掛けつつ、自身の身体の疲れをほぐしていく。特に右手が不味いな…。

霜「起きろ、馬鹿」

ガスッ！

隼「いってぇ！…あれ？終わったの？」

結局何もせず端っこで寝ていた隼人に制裁（キック）を加える。勿論、チート能力を使って、だ。

楯「そうね…。時間も時間だし、今日は寮で休みましょう。隼人達もそのように、ね？」

楯無の一言で、私達まで此処で泊まることになってしまった。私と隼人は同じ部屋なので、夜中楯無が侵入して来ないか非常に心配なのだが…。

隼「侵入して来ないでよ？」

楯「勿論♪一君にも迷惑だしね。二学期が始まってから変えるわ」

さらっととんでも無い事を言い出す楯無。また会長権限とやらを使うのだろうか。

楯「学園祭前はもっと大変よ～？でもまぁ、こんなに早く終わったんだから大丈夫ね。じゃあこれで解散。寮のルールは守ってね～」

…やはり学園祭前も呼び出されるのか…。

何はともあれ、仕事はこれで終了。明日くらいは地球に居るかな。などと考えながら、自室へと向かった。今は只、疲れきった我が身を癒すべく、そこにある最上級の癒やし（ベッド）を目指して進む

のみである。

ベッドにを堪能した後、大浴場へと向かったが、やはりだろうか、
そこは開いてはいなかった…。

To Be Continued・・・

25話　「インチキな魔法もあったもんだな」（後書き）

話がワンパターンになってきてます…。
時間も無いですし…キツいですね。まぁ、これは完結させますが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7432x/

IS～Along with the memories～

2012年1月10日02時46分発行